
怪異と私の恋物語

夜桜 舞利花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怪異と私の恋物語

【Nコード】

N91690

【作者名】

夜桜 舞利花

【あらすじ】

普通の日常をおくっていた一人の女子高生。しかし、彼女の平穏は壁の破壊音と共に崩れ去った。【契約】を果たしに来たと彼女の目の前に現れた美青年。彼の正体は、人間では無く【怪異】だった。そんな怪異に溺愛され尽くされる女子高生と怪異の恋物語。（魔法iらんど本選2010進出作品／携帯サイトではすでに完結済み）

契約（前書き）

生まれて初めて書く創作小説です。
宜しくお願い致します。

契約

山の中で少女は泣いていた。
暗い暗い木々に囲まれた山の中、迷子の少女は泣いていた。

月の光が彼女の涙を照らす。
愛する両親と兄の名を何度叫んだだろう？
彼女の声はもう掠れ、もう、動く体力も失われていた。

深い深い山の中。
捜索隊が出動しても、最低1週間は彼女を見つけ出すまでかかるだろう。

それまでとても少女の体力は持ちそうに無い。
少女を待っているのは【死】しかなかった。

それを本能で分かっているのか、彼女はもう会えないであろう家族の顔を思い浮かべながら嗚咽を上げながら泣いていた。

「ひっく…ま、ま…ぱぱ
おっ：っ、にーちゃっ：…っ
」

涙を拭くその小さな手には無数の傷が刻まれていた。
同様に腕、足、顔にも血が滲んでいた。

痛い、怖い、一人ぼっち。
そんな絶望的な状況に置かれていた。
助けてほしい、誰でもいいから、この状況から…。

幼い少女は、只管神に願った。
助けてほしいと、助けてくれと…。

だが、無情にも時は流れついに少女が山に迷い込んで4日が経った。
涙は枯れ果て、唇は干からびていた。
空腹に苦しみ栄養価の無い葉を握りしめる力も無く、また空腹を気にする余力も残っていなかった。

少女は、悟った。

ああ、死ぬのかと。

僅か6歳の少女は【死】を覚悟した。
ぼやける視界。

少女は、己の運命を呪った。
そして、自分を助けない神を呪った。

「かみさまなんて・・・だいきらい」

掠れた声。

最後の力を振り絞って出した声。
瞼が段々重くなる、もう駄目だと思ったその時、

「くくくつ、神を冒瀆するとは、人間の娘の分際でいい御身分よ」

自分の真上から声がした。
再び瞳を開くが、顔が見えない。

分かるのは、相手が男だということだけ。

「あ、あなたは・・・だあれ？」

少女は、助かったと安心した。
きつとこの男は大人だ。
きつと彼女を助けてくれると、
そう思った。

「ん？我は…まあ、少なくとも人間ではないな」

人間じゃない？

じゃあ、なんだというのだろう？

「たすけて、くれないの？」

そういうと、人間では無いと自分を称した人外の生物は、少女の言葉に対して鼻で笑った。

「はっ、お前を助ける？この我がか？
娘…お前を助けて何になる？
食うならまだしも、こんな干からびたお前からは、何のヨウリヨクも得られん。」

我がお前を助けたところで何も得をすることは無い。
さっさと死んでこの森の栄養となったほうが、まだ利用価値はある
だろう」

6歳の少女は理解できなかった。

何故、助けてくれないのか。

何故、自分が早く死ぬことを願うのか。

何故、自分がこんな目に逢わなければならないのか。
だが、分かることは1つだけ。

「―たたくない」

「ん？」

「しに、たく・・・ないよ」

最後の力を振り絞って、手を伸ばす。

人外の生命体に向かって、必死に手を伸ばす。

「人間はすぐそれだ。

死にたくないと嘆くだけ嘆く。

生きていても良い事なんて何もないぞ、人間の娘よ。
寧ろ待ち受けるのは試練ばかりだ。

死んだ方が懸命だ。」

そう、苦々しく少女に答える姿は、何処となく苦しそうだったが、
それに少女が気づく事はなかった。

少女はそれでも腕を伸ばす。
震えながら伸ばす。

それを見た【人でないモノ】は、面白そうにその少女を見つめ、あざ笑う。

「くくくつ、生きる方が苦しいというのに
それでもお前は、生きる事を望むというのか？ バカバカしい…本当に愚かな娘よ」

背を向けて、立ち去ろうと歩を進めた。

いや、【立ち去ろうとした】。

だが、それは少女が彼の服の裾を掴んだ事によりそれは叶わなかった。

何処にそんな余力があったのだろうか？
生きたいという執念がそうさせたというのだろうか？

「…離せ」

そんな必死な少女を無慈悲にも突き放す言葉を吐き捨てる。
だが、少女はそれにも負けず、最後の力を振り絞って顔を上げ、ぼやけた視界の中、顔があるであろう部分に視線を向けて言った。

「いやだ…だって、わたしは…わたしは、いききたいっ！！
つらいこともあるとおもう。

いたいことだってたくさんあるとおもう。

でも、ちいさなしあわせのために…

わたしは…いききたいのっ！！」

父、母、そして兄の顔を浮かべながら、少女は、必死に縋りつく。
そして、【人でないモノ】に言った。

「わたしを・・・いかしなさい」

目を見開く彼。

そして、楽しそうに笑いながら、体を少女に向け、そしてしゃがんだ。

「面白い・・・実に面白い。」

我に命令する度胸のある人間がまだ存在していたとは驚きだ。
数百年生きてきたが、ここまで面白い人間にあったのは初めてだ。」

少女の顎を持ち上げ、実に楽しそうに笑った。

「人間の娘よ、名は何と申す？」

反抗的な目を向けながら、
少女は答えた。

「・・・なつ

林^{ハヤシ} 菜春^{ナツ}」

くくくつとまた笑う。

そして、何度か少女の名を口ずさんだ。

「菜春とやら、お前を生かしてやってもよい。

だが、お前をただで生かしてやるわけにはいかぬ。

お前を生かしてやる変わりにお前は、我に何をしてくれるというのだ？

答え次第で生かすも見殺すも私の自由だ。さあ、お前は我に何をくれる？」

ただでさえ幼く、経験も知識の無い少女。

おまけに衰弱しきって頭の回転が鈍い。

必死になって考える。

自分にできることを。

自分が彼に出来ることを。

「・・・てあげる」

「聞こえぬ、はっきり申せ」

「さみしくないように
いっしょにいてあげる」

そういうと、少女は伸ばした手は力尽きたのか地面へと落ちた。もう限界だ。

少女の命は蠟燭の灯火よりも儚く、もう消える寸前だった。

いつ死んでもおかしくない。

重い瞼が閉じかける、最後に視線だけ上に向け少女は口にする。

「だからおね、がい：

いっしょに：いか、せて？」

そう言うとき目を閉じ氣を失った。そんな少女を見下ろす【人で無きモノ】。

その瞳は、困惑に満ちていた。

数百年生きていたという生物の名はまたの名【怪異】。

彼は、この世にその生を受けてからこんな奇妙な人間に出会った事は無かった。

生かすか、見殺すか・・・。

しかし、このまま人間の世界に返しても少女は命を落としてしまうだろう。

数百年生きていた【怪異】には、少女の生命の力がどれだけ衰弱しているか、そしてそれは人間の手では救えない事が分かっていた。

「一緒に生かせて：か。我の百分の一も生きていない小娘がよく言
いよる。この怪異の頂点に君臨する我の忠告を無視し、命令口調と
いい・・・。」

呆れながらもその顔には笑みが浮かんでいた。

それは彼がもう自分の中で決断を下した事を物語っていた。

「久々に耳にしたな…命令というものを。

気に食わない娘だが、所詮人間の命なんぞあつという間に尽きてしまっただろう。

その間、このじゃじゃ馬娘なら退屈させてはくれまい。」

親指をガリツと尖った歯で噛む。

滴る赤い血。

それは絶大な治癒力を誇る、この【怪異】特有のモノ。

うつ伏せに倒れている少女を仰向けにさせ、抱きかかえるようにして支える。

そして、自分の血を口に含み

口移しで少女に流し込んだ。

少女の舌に血を絡ませ、飲み込むよう促す。

そして、ゆっくりと離れたとき赤い唾液の線が二人の舌を繋いでいた。

それを絡め取る【怪異】。

その行為は、艶めかしさと、神聖じみたものが滲んでいた。

血を飲んだ少女の回復は見るに明らかだった。

傷口はみるみるうちにふさがり、弱弱しかった呼吸と心音は、安定した。

少女の命の灯火は、その光を取り戻した。

「菜春よ、約束は果たした。

お前を生かしてやった。

その代償は、我にとってはかなり大きいかな・・・。」

自嘲気味に言う【怪異】。

彼は思った。

らしくないことをしてしまったと。

だが、不覚にも彼は喜びを感じてしまったのだ。

共に居てくれると言った少女の言葉に。

数百年、森の中でひっそりと誰にも姿を現すことなく生きてきた。

誰にもその存在を知られずに。

知られても伝説と化し、誰にも存在を認められる事無く、一人で生きてきた。

だからだろうか。

血迷って、こんな軟弱な人間の小娘と【契り】を交わしてしまったのは。

「菜春よ…契約を忘れるな。お前を生かしてやった。その代わりに我はお前から片時も離れず、お前の命が尽きるまで傍に居ようぞ。」

遠くから大勢の人間の気配を感じとった怪異。

彼の聴覚は、犬の何倍もあり、距離も正確に把握出来るほど研ぎ澄まされていた。

もう、時間は無い。

少女はきつと人間たちに保護されるだろう。

そして、人間の家族と再会するだろう。

【契り】を交わした今、一生共にすることになったが、すぐには
いかない。

少女が契約を交わした怪異は、怪異の頂点に立つモノ。

そんな簡単にこの聖なる山から出られる身分では無かった。

「惜しいが少しの間、そなたの傍から離れる。

全てを片づけ、準備を整え、そなたの元へと向かおう。

もうお前は我から離れることはできない。

また我もお前から離れることはできないのだから焦る必要はない。」

優しく少女の額を撫でる。

その手は、やはり人間離れした鋭い爪とどす黒い皮膚をしていた。

だが、その手は、まるで壊れ物を扱うように少女に触れていた。

「10年後そなたを迎えに行こう。

忠実なお前の僕^{しもべ}となって、全てを尽くそう。

それまで幸せに過ごすといい。」

前髪をかきあげそつと額に口づけを落とすと、怪異は風に包まれ、消えた。

それから数時間後、少女は救助隊によって無事保護されたのだった。

再会

「菜春ちゃん、朝ごはん!」

「はい!今いくっ!」

急いで髪を結んで制服の皺を伸ばす。

都会に移ってから早10年。

私が遭難し、奇跡的に無傷且つ健康体で見つかったから10年。
本当に早かったなあ…。

幼いながら【死】を目の前に突きつけられた記憶はあるが、何故助かったかまるで覚えていない。

夢にも何度か出てくるある【物体】が居るけれど、それは【人】ではないと何処かで認識している。

まあ、所詮は夢なのだからと思いつつながら、私の心のどこかでやりきれない気持ちを抱えている。

私が遭難してから両親は、山に囲まれた田舎からすぐに都市へと移った。

最初はコンクリートとビルに囲まれ、緑の無いこの場所に酷い違和感と冷たさを感じたものの、今は少し慣れた。

でも、今でも恋しい。

あの綺麗な空気。

星が鮮明に光輝く空。虫の鳴き声、鳥のさえずり。

都会では何もかもが違う。

緑は無い。空気も苦く感じる。

便利さで言えばやはり都会はいい。

交通手段はいくらでもあるし、コンビニは半径1キロ圏内に何件もある。

服も選び放題。美味しい食べ物も密集している。

ネオンライトは独特の美しい光を放つし、情報もいち早く手に入る。

でも、この都会の人々はとても冷たく感じてしまう。

世間の目を気にするにも関わらず、近所と関わりを持とうとしない。生気を失った機械じみたこの町。

若者は、何処か大人びていて、私にはついていけない。

電車の中に入るとすぐに携帯を取り出していじりだす人々。

皆、こんな大きな窓の外を見ては居ない。

この灰色の現実をから逃避するかのように下を向いて小さな画面から視線を逸らさない。

私はそんな人間味の無い都会の人たちがとても怖く感じられる。

田舎の山に囲まれていた頃はまだよかった。

皆あたたかかった。6歳ながらも鮮明に覚えている。

10年も経つのに染まれ切れない私。友達はある。

だけど、それは本当に【友】と呼べるのかどうか分からない。

ただつるんでいるだけなのかもしれない。

一人になりたいくないが故に一緒にいるだけ。

持たされている携帯も私を縛り付ける鎖でしかない。

メールが届けばすぐに返信を求められ、電話がくれば応対しなければ

ばならない。

誘いを断れば、嫌な雰囲気になる。

都会の人はそんなものなのか。

それとも私が住んでいた田舎が特殊だっただけなのか。

私の兄である、弥鶴みつるはすぐに慣れた。

彼は元々私と対照的に明るくて、優しくて、男前と来た。

兄妹だというのにどうしてここまで違うのだろうか？

私の為に田舎を離れる時、寂しそうにしていたのに、何も文句を言わず、私の為に都会に移ってくれた。私がごめんと謝ったら、優しく笑って

「なーに言っただよ。

お前の命より大切なもんなんてこの世にないんだから。

気にすんな。兄ちゃんは、順応性も高いし天才だから大丈夫。

俺の事よりも自分のことを心配しなさい。」

そういつて、私の髪をぐしゃぐしゃに撫でてくれた。

すごく温かった。自信家で頼りのある弥鶴。

その彼は、この家には居ない。

弥鶴は、自分の事を【天才】と称していたけれど、それは自称では無く彼はまぎれもない本物の【天才】だった。

IQ300という桁外れの頭脳。

それを国に見初められ、アメリカの大学へと飛び級して入り、更に飛び級で最短で卒業し、現在Ivyリーグの大学を転々としながら研究している。

ちなみに私と兄の年齢差は、たった4つ。20歳である。

それに比べて私は、見た目も、頭脳も標準。

自分の性格の暗さはよく自分が分かっている。

私はどうも大多数の人間とは波長が合わない。

皆笑っているときに私は面白いとも思わない。

何処が面白いの？何が楽しいの？

年頃の子は皆恋愛に興味を持つ。

だけど、私は一切この手の話題にはついていけない。

恋なんてしたこともない。

好きになったことなんて16年生きてきて1度もない。

ホント、何のために生きてるんだか。

でも、【死】を前に置かれた時、私は死にたくないと本気で思った。理由は、家族だけだった。誰かが生きてても苦しい思いしかないと言った。

その通りだった。

でもまだこの先長い人生の中で何かがあるかも知れないと思いながらこの10年間生きてきた。

これからそのつもり。

「ふああ、おはよーお母さん。今日はホットケーキですかい。」

「菜春ちゃんの大嫌いな人参を搗って入れてありまーす♪」

「…それ食べる前に言わないでよぉ」

とはいえ、小さい頃入れられたのを知らずに口にして普通に食べた記憶があるので最初はフォークで突つつきながらもメープルシロップとバターを塗って口に運ぶ。

メープルとバターの素敵なダンスが舌の上で繰り広げられる。

実に美味でございます、お母さま。

「じゃ、お母さんこれから仕事だから行ってくるねー。

車に気をつけて、夜7時までには帰宅。

不審者が後ろに近付いてくるのを感じたら防犯ブザーを鳴らすこと。えーとそれから…」

「お母さん、一番最初に戸締りという大切な部分が抜けてますよ。っていうか、もう小学生じゃなくて高校生なんだからそこまで心配しなくても…」

毎日、登校日や外出する度に言われて耳にタコが出来てます、お母さん。

それも10年間言われ続ければホント暗唱余裕で出来るから。

っていうか高校生に7時に帰れとかどんだけ過保護ですか貴方は。

呆れながらそう言うと、真剣な目をして扉を開きかけたお母さんが私に向き直る。

「昔と同じ過ちを犯したくないからよ、菜春ちゃん。あれは全て私の不注意の所為で大事な娘を失いかけた。もうあの時の絶望感は、味わいたくないのよ。」

そう、お母さんもお父さんも弥鶴も全員過去に囚われたまま。

10年も前のこと。

10年しか経っていない。

捉え方は、人それぞれ。

私もあの時を思い出すと背中から悪寒が走る。

でも同時に何処か暖かく、懐かしくなるの。

最近よく見る夢のせいかも知れない。

迷子になったアノ山奥で。生き倒れ、死を待つのみ。屍と同等の私。

そんな私に誰かが姿を現して、私が必死に助けをこう。

それに対しその人は私にこう囁く。

『約束は、果たした。これは【契約】。』

もう逃げることは許されない。

一生私はお前の傍に居よう。

忠実なる僕と化して、お前の前に現れよう。人間の娘よ。

人間の娘、菜春よ。10年の時を経て、お前に会いに行こうぞ。』

そう言って立ち去る相手に、誰と問う私。そしてその言葉に止まって口を開いたところでいつも目が覚めてしまう。

肝心なところがいつも聞けない。

そんな夢がここ1カ月頻繁に見るようになり、今日は3日連続同じ

夢を見た。

もうすぐ何かが起こる。そんな予感がしてならない。だけど、それはいいことなのか悪いことなのか…全く予想できない。

「うん…分かってるよ。」

大丈夫、私は今日もまだ生きているから。」

笑ってそういう私に大してお母さんは、硬い表情で笑う。

「じゃあ…いつてくるわね、菜春ちゃん。気をつけてね。」

そう言って扉の向こうへと消えて、玄関が閉まる音がした。

まだ学校に行くまで30分時間はある。

その30分のうち15分は、私の時間は一人になれない。

何故なら弥鶴からTV電話が来るから。

―プルルッ、プルルッ

噂をすればなんとやら。早速、TV電話が鳴る。

番号をチェックすると案の上、アメリカから。

デジタル時計を見ると7時15分。

いつも1分の差も無く電話をかけてくる弥鶴。

アメリカの大学を転々としているのにこの時間にいつもかけてくる。ある意味怖い。下手したストーリーカーだよ。

これを友達に話したら、あんたのお兄ちゃんシスコン？って真顔で聞かれてしまった…。

えーと、今はコロンビア大学で研究してるから時差は14時間。あっちでは17時15分か…研究大丈夫なの？そう思いながら、ポタンを押した。

「おーはよっ、菜春うー！」

制服姿がまた似合ってるぞ！今日も元気か？」

「おはよ、弥鶴。っていうか、そっち午後5時でしょ？研究そっちのけで大丈夫なの？」

「お兄ちゃんの心配してくれんのか！？研究なんかよりもお前との会話の方が俺にとって重要。というか、会話しなかったら俺死ぬ。」

そ、そこまで私との会話にこだわらなくても…。たった5分の会話ですが？こんな他愛も無い会話が毎日行われる。弥鶴が渡米してから早5年経つけれど、この習慣は変わらない。私が夏休みの時、冬休みの時、春休みの時、日程を全て確認してその休みの始まりから終わりまで帰国して私に付きっきり。過保護にもほどがあるよ…。

「弥鶴、いい加減彼女作りなよ…。
もう20歳でしょ？顔いいんだから沢山寄ってくるでしょうに…。」

「え、俺、菜春以外興味無いし。可愛い妹だけ居れば十分!」

…マジ心配になってきたよ。

友達のシスコン説が段々真実味を帯びてきましたよ。

弥鶴の後ろから外国人の人が何やら英語で話しかける。

弥鶴は、それに流暢な英語で対応する。

そして、げんなりした顔を画面に向けた。

「悪い、そろそろ行かなきゃ。

これくらいしか話せなくて本当にごめん、寂しくないか?」

「いや、全く。

っていうか、やっぱり研究ほっぱり出してたんでしょ。

その頭脳をお願いだから人類に役立ててください。」

「ひ、酷い…。

お兄ちゃんは、人類に役立つことよりも菜春の傍に居たいのに…。」

うん、もう完璧にシスコンだわな。

60億人よりも1人の妹をとるなんて頭おかしい。

いい加減自立しろ。妹離れしろ。

「じゃあ、私の為にも研究してください。

私もそろそろ学校の準備しなきゃいけないし、切るからね。

電話代も時間も勿体ないでしょ。」

「うう、仕方ない…。

菜春が学校遅刻して教師なんか怒られるの耐えられないから、涙を吞んで切るよ。

気をつけて行って来いよ？

不審者が尾行してる気配があつたらすぐに――」

何を言われるか分かっていたので言い終わる前に切った。

時計を見ると7時30分。

話しすぎたみたい。

もう出なきゃ、学校に遅刻しちゃう。

急いで食器をキッチンの洗面台に置き、リビングの窓の戸締りを確認する

。一軒家なので本来ならば2階の戸締りも確認した方がいいのかも知れないけれど、そんな時間はもう無さそうだ。

鍵を持っていざ学校に出ようとすると…

――ドカーンッ！！

映画のような破壊音と共にすごい強風により壁に体を打ち付ける。胃が口から出そうな衝撃と背中での痛みでこれが現実なのだと突きつけられる。

庭が見える方の壁と窓ガラスが破壊されたのを辛うじて理解する。だとすると、窓ガラスが突き刺さらなかったのは奇跡だなと冷静に考える。

コンクリートの破壊によって撒き上がった埃が煙幕のような役割を果たし、視界がはっきりとしない。

ただ影が見える。人影が。

それが我が家の壁を崩壊させた人物だろう。

それ以外考えられない。

埃と砂のようなコンクリートの残骸が床に落ちていき、視界が少しずつクリアになっていく。

人影が距離を縮め、瓦礫の山と化したコンクリートの壁に器用に立つ。

最初に見えたのは、黒い革靴。

次に黒いズボン。

黒いマント。

黒い帽子。

間から見える黒い髪。

「契約を果たしに来ましたよ」

異質すぎるその姿。

怖いと瞬間的に思う。

逃げたいのに足が動かない。

目の前の男は、笑みを浮かべて近づいて来る。

「…い、いやっ、来ないで!!」

体を体育座りのように縮めて、頭を膝に埋めて、腕を頭に被せる。
何の意味も成さない防御。
だけど、そうせずには居られなかった。

頭の中は混乱状態。

【契約を果たしに来た】？

契約という言葉が夢とリンクする。

あれは、夢では無く現実起こったことだというの？
ありえない。だって、夢でしか見たことが無い。

10年後に会いに来ると言われた。10年前、私は遭難して死に欠けていた。

記憶の欠片がパズルのピースのように埋め込まれていく。

気付いたら足音は、止まり。

気配は、私の前にあった。

【彼】は、もう私の前に居る。
もう、逃げられない。

布が揺れる音がする。

そして、吐息が私の頭に触れる。

【彼】がしゃがみ込んだのだと理解する。そして、

暖かい【彼】の手が私の頭を優しく撫でた。

何処か懐かしいその手。

一気に解き放たれる記憶。

ああ、そうだ。私は目の前の【彼】に10年前に救われた。

そして、【彼】は人間ではない。そう10年前彼は言った。

私は顔をあげる。今度は、私の視界はくっきりとしていた。

目の前に居る【彼】は、この世のものとは思えないほど妖美だった。端正な顔立ち。つり上がった黄色い瞳。真っ白な染み一つない滑らかな肌。

野性的に飛び跳ねている黒い髪。全てが私の心をつかんで離さない。人間では無いはずの【彼】は、何処からどうみても【人間】の姿をしていた。

だけど、その人間は、異質じみた艶めかしさを発していた。

10年前に問いかけた質問を再び口にする。

「貴方は、だあれ？」

すると、目の前に居る【人間ではない】彼は、美しく微笑む。

その微笑みには、悪戯っぽさと冷たさが入り混じっていた。

そして、彼は10年の時を得て、答えを口にする。

私が長年求めていたその答えを。

「私は、【怪異】の頂点に君臨していた者。」

ですが、今は【契り】の為に舞い戻って来た
貴方を一生お守りするただの【僕^{しもべ}】ですよ」

10年前とは違った丁寧な口調。

私の【僕】と言いながらも何処か見下した感じを漂わせている【彼】
は紛れもない、10年前、私を生かした【人では無い者】だった。

10年の時を得て再会した私たち。

その時、私の心にすでに【アレ】は芽を出していた。

それに気付いた頃にはもう手遅れだったということを思い知らされるのは。

これからもっと後のお話。

命名

「ごめんなさい【僕^{しもべ}】ってどういうことかしら？
私、貴方に会うのは多分初めてでは無いと思うのだけれど…」

そういうと、目の前に居る【彼】は、微笑んで

「ええ、会うのはこれで2度目になりますよ、菜春様」

…初対面と変わらないじゃないか！？
そんな人間の【僕】宣言で…意味分かって言ってる？

「あのー、【怪異】ってマジですか？」

そう、怪異って言ったら、私が想像するに、お化けだの、幽霊だの、
化け物だの、妖怪の類。

だけど、目の前に居る彼は、どう見ても美青年だ。
それはもう、目を見張るほどの。

そういうと、クスクス笑う自称【怪異】。
笑う姿もまたとても美しい。

「人間は、年老いるのも早ければ、忘れるのも早い。

まあ、無理ありませんね。

10年も前の話ですし、貴方は死ぬ運命にありましたから。」

10年前：やはり、彼は私が幼い頃みた【彼】なのだろうか？

私が山で遭難し、奇跡的に無傷かつ健康状態で発見された。

それは本当に異例としか言いようがなかった。

何かしら絶対損傷があるはずなのに、居たって無傷であり、空腹であって当然なのにそれすらなかった。

「10年前、私が遭難した時に助けたのは貴方？」

それにしては、口調も何もかも違うけれど…。

だって、あの人は、私を上から目線で見下して居て…。

私が死のうがどうでもいいといった感じだった。

それに手が黒かったような気がする…。

「いかにも、私でございます。」

「でも、口調が違いすぎる…。」

そういうと、それはもう素晴らしい笑顔で

「それは、現代の人間の口調を覚えましたが。

敬語というのも、私が知っている時代とはだいぶ違いましたからね。

」

なるほど…ん？

でも、何故、彼は私の【僕】なのだ？

それに彼はまだ応えていない。

っていうか、怪異、怪異っていつているけれど、

彼の正体は何なんだ？

「ごめんなさい、いきなり【僕】と言われても…。

一体何故貴方が私の僕になってしまったの？」

「それは、貴方が私と【契約】してしまったからです」

・・・はい？

「いやいやいや！！！」

そんなことした覚えありませんが！？」

「貴方は、私に『生かしなさい』と

命令口調でおっしゃったじゃありませんか」

んなこと言ったのか、6歳の私よ!!

私は、本当に申し訳なくなり、項垂れながらも口を開いた

「本当にすみません。」

もう無知で馬鹿だったもんですから、現に本人覚えてませんし…。」

そういえば、この人の名前は何というのだろうか？

でも、謝りたいのには変わりない。

「だから、すみません…【怪異】さん」

そういうと、特に驚きもせずに、目の前に居る彼は、逆に微笑んだ。
まるで、【予想していた】とでもいうように。

とても、とても…寂しそうに。

「人間にとって10年という月日は長いものですからね。」

ですが、私にとっては10年とは、人間でいうつい数カ月前と言った感覚です。

貴方がここまで成長したのを見て、本当にうれしい限りですよ、菜春様。」

「えっと、生かしてくださったのは、本当にありがたいのですが、生かしてくださったのだから、寧ろ私が何かしなきゃいけないのに、

何故、貴方が私の…えーと、【僕】に？」

「それが、私たちの間で交わした【契り】ですから。」

素晴らしいスマイルでありがとうございます。
ですが、まったくもって

私には理解ができません。

誰か助けてください。

つーか、その【契り】の内容をかみ砕いてください。

「えー…その【契り】とやらの内容を出来れば詳しく説明していた
だけると、本当にありがたいことこの上ないのですが…」

「もちろんですよ。」

とても、単純なものです。

私は貴方を生かす為に私の血を分け与えた。

それは、【忠誠の契り】といわれる神聖なものですよ。

だから、私は貴方から離れませんし一生おそばにお仕え致します。

貴方以外愛しませんし、貴方以外何もいらぬ。

貴方が傍に居て、愛さえ下されば私は、

この手を血に染めても宜しいですよ？」

：これが流行りのヤンデレか、これは。

シスコンの次は、ヤンデレですか。

友人Aがヤンデレ萌えとかほざいてたけど、全くもって迷惑だよ、これ。

「：愛が重すぎです。」

「愛故に私は10年待ち、全てを捨てて貴方の元に来ました。

別に何かをしるとは言いませんよ、もちろん。

寧ろ、私が貴方の身の周りのお世話を致します。

貴方がお金を欲するのならどんなことをしてでも手に入れます。

世界がほしいというのなら、世界を。

星がほしいというのなら星を。

貴方が望むものは全て与えましょう。

それが今の私の存在理由です。」

誰か：この【僕】信者どうにかしてっ！！

私には手に負えません。

弥鶴以上に強敵です。

ああ、もう話題をとりあえず移そう。

「怪異さん、貴方、お名前は？」

「おや、私の存在を認めてくださるんですか？」

「名前分からなきや不便でしょう？」

「生憎持ち合わせて無いのですよ。」

【山神様】やら、【化け物】とか、【妖怪】など呼ばれてましたよ。」

…こんな美青年をそんな風に呼べるか！！！！

いや、待て私。

そもそも、この姿こそ借りの姿なのかもしれない。
人間の姿を変えるのは、妖^{あやか}の特徴とも呼べる。
化け狐やタヌキなどがその典型だ。

「じゃあ、質問を変えましょう。」

貴方は何という【怪異】なんですか？」

そういうと、悪戯っぽい笑みを浮かべ、人差し指を口元に運び、左目を閉じて、甘く彼は囁いた

「ひみつです」

：嫌味なくらいそれが似合っていた。
それはもう画家に描かせてもいいんじゃないかというくらい。

って結局私、流されちゃってる？

もう、いいや諦めよう。

そう思って盛大な溜息をついた。

でも、一生傍に居るのは困るなあ…。

というか、この残骸どうしよう？

本端微塵になった壁を見て気が遠くなる。

時計を見ると確実に学校にも間に合わない。

あー、もうー

「どうしよう…」

頭を抱える私。

そんな私に対して、ふんわりと微笑みかけて、耳に囁く【彼】

「助けが必要ならばご命令を。

貴方の望むがままに私は動きましょう。

貴方が傍に居るだけで、幸せなのです。

さあ、貴方を悩ませているのはなんですか？」

髪をすくい上げられ、私の髪は、彼の口元へと運ばれる。
いわゆる、【キス】だ。

血と熱が顔に集中するのが分かる。

ああ、もしかしたら沸騰して、湯気が出ているかもしれない。
こんなに美しく、妖美で、私に尽くそうとしている【彼】に

元凶はお前だなんて言える筈もない。

卑怯だ。

美形ってずるい。

世の中の美形は絶対得している。

私は、とりあえず、【彼】のことを省いて、私の悩みの種を吐き出す。

「この木端微塵になった壁どうしようとか、学校間に合いそうにな
いだとか、貴方のこと親にどう説明しようとか…。

…もう色々よおっつつっ！！！！」

最後の方は、半泣きになって叫んでしまった。
すると、彼は、笑顔で頷き。

「分かりました。

貴方を苦しめるものは、全て排除致しましょう。
まずは、この壁でしたっけ？」

パチンツと指を鳴らす。

すると、瞬きをした次の瞬間。

何事も無かったかのように綺麗になっていた。

え、何、新手のマジック？

それとも、私が夢を見ていたの？

白昼夢ですね、分かります。

非現実すぎて、

現実逃避くらいしてもいいと思うんだ。

「…一体全体、貴方は今何したの？」

「やっと敬語を辞めて下さいましたね！
嬉しい限りでございます。

お役に立てたようで私は、感極まっておりますっ！」

無駄にその素敵なスマイルを私に向けないでください。
私の心臓に毒です。

人間、一生の心拍数は決まっているって言われてるから確実に私の寿命はジワジワと縮まっているに違いない。

「えーと、私の質問に答えてないけど？」

「どうやってアノ悲惨な状態を一瞬にして、回復してみせたの？」

「私のヨウリヨクを使えば、簡単に治せますよ。」

「…ヨウリヨク？」

「妖の力と書いて、妖力です。」

伊達に長生きしてませんから。」

頬をかいて照れ笑いをする【彼】。

か、可愛いと不覚にも

思ってしまったわ…。

「あ、あのさ、その妖力って使っても疲れたりしたいの？
大丈夫なの？」

「なんと、私の身を案じて下さるのですか！？
その慈悲深い菜春様のお言葉を聞いただけで、私は、癒されますの
で、心配には及びませんよ。」

つり目や、シャープな顔をしているのに、どうやったらそんなのほんとした幸せそうな顔が出来るのだから…。
って、結局答えて貰って無いし!!

いいようにあしらわれてる気がしてならないわ…。
まあ、いいや。
きつと言いたくないんだろう。

「あーもー、いいや。
とりあえず、整理しよう。

貴方は、【怪異】であり、人間じゃない。」

「はい、その通りでございます。」

「そんでもって、6歳の私が貴方に俺様的に【生かせ】と豪語したと。」

「おっしゃる通りで。」

「なんで、山の神とも言われる貴方が6歳の人間の小娘をその【忠誠の契り】とまで交わしてまで生かそうと思ったの？」

そういうと【彼】は、笑顔のまま固まった。

そう、それが最大の疑問だった。

何故、怪異の頂点に君臨していた彼が何故私を助けたのだろうか？
それも、私の【僕】となるという行為は頂点から真っ逆さまに地の底に落ちるようなもの。

屈辱的だと思うし、本当に理解しがたい。

顔を俯けた彼は、そのままポツリといった。

「……かったから」

「え？」

「孤高であるが故に孤独だった私に対して恐れず同等の立場……いや、それ以上の目線で話しかけて下さった。
それが嬉しくもあったのでしよう。」

そして何より……と続けて彼は、俯けた顔を上げ、優しく微笑みながら、私の頬を、冷たい大きな手で覆う

「貴方が私に『寂しくないように一緒に居てあげる』そうおっしゃいました。

数百年生きていた私にとって、一番嬉しかったのですよ。」

その優しい微笑みから私は目がそらせなかった。
闇夜に輝く月のように美しくきらめくその瞳から。
そして、私は悟った。

私は逃げられないと。

その瞳は、私を捉えた。
捉えて離さない。

笑顔の奥にある、その瞳の奥にある彼の本心

それは一体なあに？

「そ、そう：
分かった、それで納得しとく」

そう言って視線を彼から逸らした。
彼は、私の頬から手を離し、そして、真剣な瞳で私を見つめた。

「菜春様、お願いがございます。
お仕える身でありながら、厚かましいのは、承知の上ですが、申
し上げても宜しいでしょうか？」

「え？あ、うん…

私にできる範囲なら別にいいけど？」

一体何を要求されるのだろうか？

まさか、寿命の半分くれとか？

それだったら本当に困る。

というか、【僕】発言された

その時点で私は、十分に困っている。

それに、一生傍に居るとか…。

お仕えるだとか…。

執事ですか？

流行りの執事気どりでございますか？

そうこう私が思考をめぐらされていると、彼は、とんでもない要求をしてきた。

「私に【名】を与えて下さいませんか？」

へ？

「えっと、【名】って名前ってことだよね？」

「その通りでございます。」

えええええっ！?!?!

そんな大事なものを私が決めていいの!?

いや、確かに名前が無いって言ってたけど…

責任重大だよ、私。

「わわわわ、私なんかでいいの!?
名前ってすっごく大切なんだよ!?

意味とか色々あるし、その人を思っつけられるものだよ？」

「だからこそです。」

私は、菜春様に全てを捧げる身なのですから、【主】である菜春様に【名】を頂戴するのは、この上無い至福の極みなのでございます。

「

この人は、どれだけ私に尽くすのだろうか？

ふと、疑問に思う。

彼は、私が欲しいモノを全てくれると言った。

でも、私は、何もほしい物が無い。

ただ、家族が幸せであればいい。
健康であればいい。

平凡な私。

容姿端麗でも、成績優秀でも、身体能力が高いわけでもない。

そんな、私に尽くすという【彼】。

王の玉座を捨ててまで、私の元へと来た【怪異】。

何処まで信用すればいい？

私は、信じられない。

この現状を受け止めきれない。

だって、私は…

10年もの間、普通に生きていたのだから。

そう、何事も無く。

何も変わらない毎日を。

淡々と生きてきた。

そんな最中出現したイレギュラー。

私の日常を数秒でぶっ壊した。

いや、すでに壊れ始めていたのかもしれない。

10年前のあの日から。

「∴カイ」

甘んじて私は

彼を受け入れよう。

もしかしたら彼は美しい仮面を被ったとんでもない化け物かもしれない。

でも、それでもいい。

たとえば、彼の気まぐれで私を助けたのだとしても。

「妖怪の【鬼】に、北斗七星の【斗】と書いて、【魁^{カイ}】」

「魁∴」

「意味は、長年生きている貴方なら知っていると思うけれど、【魁】

の意味は、頂点を極めた者を指すの。

貴方にぴったりでしょう？

かつて【怪異】の頂点に君臨していた貴方に。」

そういうと、

「ふふふ…アハハハハッ!!」

声を上げて笑い出した。

不愉快極まりない。

そんなに変な名前だった？

息を整えると、顔を私に向けて、妖美に微笑んだ。

「さすが、私の【主】です。

感服致しましたよ、ものの数十秒で考えた名とはとても思えません。
これほど私に合った名はございません。」

私の髪に愛おしそう触れる。

やたらとボディータッチが好きな【僕】だこと。

って、私何偉そうな…

ものの数分で、この主従関係に慣れて来たっていうの？

…順応性低いと思ってたんだけどなあ

「金輪際、私は【魁】と名乗りましょう。
貴方の忠実なる【僕】。」

愛しい貴方の為に全てを捧げましょう。」

髪に触れていた手を私の左手に移動させ、そして、その甲に

キスをした。

ああ、何処かの詩人が言っていた。
キスされる位置によって意味が違う。
確か…手の上ならば

【尊敬のキス】

強行

「今日から急遽担任になりました山上^{ヤマガミ} 魁^{カイ}と言います。
中途半端な時期に担任交代となりましたが、これから仲良くやって
いきましようね。」

そう言って彼は教卓にあるクラス名簿に手を添えながらクラス全員
に悩殺スマイルを送った。

…何故こうなった？

うん、そうですね。

元凶は全て私ですよ、分かってます。
アノ私に仕える【僕】さんの力技です。

魁は、今日から私の高校の教師それも、私のクラス2-Cの担任に
なった。

それも突然に。

ちなみに現在は秋の10月。
無論、担任は魁の前に居た。
典型的な温厚な中年男の教師で、音程が一定だったので、彼が喋る
たびに眠りそうになったのを
今でも鮮明に覚えている。

その温厚な教師が突然転勤になったのだ。

まず、第一にこの時期にはまずありえない。

1学期が終わって2学期からとかならまだしも、2学期半ばに急遽、教師が変わるなんてありえない。

絶対にあつてはならないことだ。

私に通っている私立高校なら尚更だ。

奇跡的に一昨年受かって入った高校。

それも、結構ハイレベルな教育で有名だ。

私はそんな高校にたまたま受かってしまった所為で、毎日ヒーヒー言いながら、とにかく日々こなされる授業についていくのに必死…。

さて、怪異である魁が何故、よりによって私の高校のしかも、私の担任の教師になったか。

それは、彼にとって実に単純な理由で、そんなことの為に彼が言う【妖力】で校長を意のままに操り、

挙句の果てに前担任を何処か遠い学校に飛ばしてしまった。

教員免許はあるのかとか、色々と突っ込みたいところが満載なのだ、さすがは、長年生きていたこともありとても歴史などに詳しく、

その知識量は、東大の教授も腰を抜かすくらいだ。

そして、10年間近代の日本のシステムを徹底的に勉強したのか、色々と戸籍だとか、教育免許だとか、ありとあらゆるものを偽造した。

もう、どうやってやったのだとか、色々と本当にツツコミたい所が満載なのだけれど、彼は笑顔でさらりと、

【貴方の為でしたら何でも致します】

と、笑顔で言って結局うやむやなままである。
もういいです。

全て【怪異】の特殊能力と思います。
もう、現実の次元を越えちゃってるので、小さな脳味噌を持つ私には、そうでもないかと、頭がパンクします。

さて、そこまでして私の担任に就任した彼。
その理由はとても単純で、何処までも一途だ。

【一生、貴方のお傍にお仕え致します】

たったそれだけの為。
それだけの為に、彼は、複雑かつ尋常でない膨大な情報操作を行い、
気がついた時には、

黒板の前に教員の1人として立っていた。

とりあえず、ここまで来た経緯をフラッシュバック形式で、思い返してみようと思う。

全ての始まりは、私が『学校に間に合わない』と嘆いた事からだった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

魁が私の手にキスをして私が放心状態に陥りそれから我に返った時真っ先に私は、時計を見た。

針は、8時を指していた。

ちなみにH Rの開始時刻は、午前8時20分。
そして、私の家から学校までかかる時間は…

どんなに急いでも30分。

しかも、今日私は日直だったのだ。

8時には着こうと思っただのに：絶対サボったと思われてるよ！
ごめんなさい、不運にも今日私と同じ当番だった人！！

私の通う高校は私立。

勉強や部活はもちろんのこと、規律はとても厳しい。

遅刻した場合、【無断欠席】したとみなされる。

たとえば、後から来たとしても、正当な理由が無ければ却下だ。

私は電車通学でもないのに、正当な理由もへったくれない。

ましてや、人外の生物が突然現れて、壁がぶっ壊れたりしてて、物事を整理するのに遅れましただなんて

絶対誰も信じません。

加えて、【無断欠席】は、病による【欠席】より遥かに重く、【欠席】2個分としてカウントされる。

そして、【欠席】が3つに達すれば、放課後、追試扱いになってしまふし、5つになれば【留年】だ。

去年、皆勤賞だった私にとって、それはとても大切なことであり、勉強が出来ない私が唯一自慢できることだったのだ。

それが、崩れていく音が聞こえる。

泣きたい、マジで泣きたい。

「どうしよう・・・学校絶対間に合わないよ・・・

日直サボっちゃったし、無遅刻無欠席が唯一私の取り柄だったのにつ
！！

泣きたい・・・ほんと、どうしよう」

マジで涙が浮かんできた。

すると、全ての元凶である魁がとても、困ったような、悲しそうな表情をして私を見つめた。

「ああ、どうかそんな悲しい顔をなさらないで下さい私が原因です
よね。わたくし

大変申し訳ございません。

せめて週末にすれば良かったのかも知れないのですが、そうすると
ご両親がおられるので色々と面倒かと思ひまして・・・」

シュンと項垂れる魁。

耳としっぽが垂れ下がっているのが見えた気がした。

わんこだ・・・わんこが目の前に居るよ。

あまりにも可哀想だったので、魁の頭をポンポンと撫でた。
すると、キョトンとした顔で私を再び見つめた。

その姿に思わず苦笑し、

「そんな落ち込まないで。

そりゃ確かに魁に非はあるけれども…

まあ、なってしまったものは仕方がないもの。

気にしないで、魁」

「いえ、気にします」

・・・即答しやがった。

そんな責任感を感じている【僕】に対して溜息をついて

「じゃあ、どうしろっていうの？

この現状を魁は打破することが出来るワケ？

家から学校まで自転車で30分だよ？

学校が始まるのは8時20分。

100%間に合わないわよ…」

頭を抱える私に相反して、魁は微笑んだ

「菜春様、私が何者かお忘れで？」

「え、私の【僕】でしょ？」

そう答えると、苦笑しながら『それでもありますが』と言言葉をつづけた。

「私は人間ではございません。

【怪異】であり、かつてその頂点に立っていたモノですよ？
それに言いましたよね？

貴方が望むもの全てを叶えると。」

そういうと、『失礼致します』そう一言断って、私のかばんを肩に掛けたかと思うと次の瞬間、私は中に浮いていた。
いや、正確には…

魁に抱きかかえられていた。

いわゆる、お姫様だっこという乙女の夢ともいえる体制で。

「かかかかつ、魁!？」

い、一体、な、何をっ!？」

「菜春様、貴方の可愛らしいお声を聞くのは嬉しいのですが、暫しその花のような唇を閉じて下さい。」

舌を嚙んでしまいますよ?」

「・・・?」

どういうこつ・・・」

最後まで私が言い終えることはできなかった。

突如、すごい風圧が私を襲ったからだ。

あまりの衝撃に思わず目をつむって、ガッシリと魁の首に手を回した。

何が起こっているのか何とか理解しようと襲う風圧に耐えて、目を開いた。

そして、私は自分の瞳に映った光景に愕然とした。

物凄いスピードで過ぎ去る住宅。

まるで4倍かそれ以上の倍速でコマを早送りになっているようだった。そして、私と魁が立って居た場所は道路どころか地面では無く

屋根の上だった。

・・・ありえない。

もはや、人間業ではない。

彼が人間ではなく【怪異】なのだとやっと実感が湧いた気がした。

上を見て、魁の表情を窺う。

その顔には、一滴も汗が浮かんでおらずまさに【余裕】と言った表

情であつた。

そして、10分もしないうちに、私たちは、校門どころか学校の屋上に立っていた。

私を壊れ物を扱うかのように優しく、そつと優雅に地面に立たせたあと、魁は、懷から懷中時計を取り出した。

「8時12分32秒ですね。

約7分早く学校に着けました。

ね？遅刻せずにすみませんでしたでしょう？」

得意げに笑いかける魁。

家、出たのは多分8時5分過ぎくらいだった。

本当に魁はしてみせたのだ。

学校に間に合わせるといふ荒業を。

それも、余裕で、当然かのように。

驚くことにあれだけの風圧だったのに彼の服も髪も全く乱れていない。

そして、私ですら全く乱れておらず、無傷の状態だった。

魁は私を見つめて、何か言われるのを待っていた。

まるで、褒められるのを待つ犬のようだ。

母性本能がくすぐられ、見た目、23歳くらいで背の高さ180c

mはあろう彼に

背伸びをして頭を撫でた。

「本当にありがとうね、魁。
すっごく助かった!!
もうこの恩は絶対に返すね!」

「いえ、【僕】たるものこれくらい出来て当然でございます。
恩など返す必要などございません。
貴方が愛してくれさえすれば、私は、満足でございます」

心底うれしそうに魁は言った。
そろそろ、教室に行かなければ。

屋上は、5階の位置にある。
私の教室は、3階にあり、
それも端の方なので、
そろそろ行かなければ
魁に送って貰った意味がない。

「そろそろ教室に行かないとせっかく学校に来たのに
遅刻扱いになっちゃうから、私、そろそろ行くね!!」

あ、そういえば、魁はどうなるだろう？

このまま放置するわけにもいかないし、ましてや家に帰って貰うわけにはいかない。

彼はどうするつもりなのだろうか？

「ねえ、私は教室行って授業を3時半まで受けるけど、魁は、その間どうするつもりなの？」

「もちろん、貴方の傍に居るつもりです」

・・・はい？

「え、ちょい待て、それってどういう意味？」

「言葉のままの意味ですよ？」

微笑みを崩さずに答える魁に苛立ちを感じた私にきつと非は無いつと思う。

「あのね、ここ学校なの？」

学校って何かわかる？

生徒が教師に色々と学ぶ場所なの。

大体生徒は、15歳から18歳。

どう見ても魁は、20歳以上にしか見えないから、生徒になるっていうのも無理だし、転入試験も受けてないのに、一緒に居るなんて

無理なわけ。

私の言っている意味分かる？」

「はい、もちろんですよ。」

分かっているのなら、何故、傍に居るだとか非現実的な事が言えるのだろうか？

「何も、私が生徒として菜春様のお傍にお仕えするだなんて言っていないじゃないですか？」

・・・え？

「それって、どういうこと？」

「菜春様は、不思議がられないのですか？」

何故、貴方の【学校】の場所を私が知っていたのか。」

言われてみればそうだ。

私は、彼に通っている学校の場所は愚か、その学校名すら教えていない。

なのに、私が学校に遅刻すると言ったら何の迷いも無く所属する学校に連れて来たのだ。

何故気がつかなかったのだろう？

私の反応を見ながら面白そうに笑う魁が視界に入る。
不愉快な事この上無い。
気付かなかった自分に舌打ちしたい気分になった。

「戸惑われるのも無理ありませんよね。
…あ、【彼】が来ますね。」

「え？」

私とその彼とやらが誰か問いただす前に屋上に通じる扉が開く音がした。

その方向へと、振り返って私は、愕然とした。
そこには、

魁が居たのだ。

いや、正確には魁に瓜二つの人物と言うべきか。
目の前に居る【魁そっくりさん】は、スーツを綺麗に着こなし、ワックスで綺麗に髪を整え、銀縁の眼鏡がインテリな印象を与えていた。

魁にそっくりな【誰かさん】は、魁を見るなり、溜息をついて

「人に面倒押し付けておきながら、いきなり呼び出すの、勘弁してくださいよー。
貴方の振りをしたりして、微笑みを絶やさないでいなきゃいけないし、人間なんかに気を使わなきゃならないし、俺、マジ過労死しますって。」

…魁にそっくりだが、どうやらその性格は、違うらしい。

肩が凝っているのか、慣れないことをしていた所為か、肩を回し、骨が鳴る音がした。

よっぽど疲れているのだろう。

顔がゲンナリとしていた。

私の視線に気がついたのか、魁そっくりさんは、私を見ると、目を丸くした。

「あれ、この子が貴方の言ってた【主】ですか？

人間の中でも弱そうだし、っていうか、まだ餓鬼じゃないですか!?!
貴方のような高貴な存在が、【契り】を交わした事自体、俺には信じられなかったのに何を血迷ってこんな脳味噌小さそうな餓鬼んちよの下に付こうと思ったんですか!?!

そいつなんかの為に俺がこんな重労働されられたと思うと…」

鋭い瞳をさらに鋭くさせ、苛立ちを隠さずに、【魁】の姿で

「マジ、食い殺したくなりますね。」

そう嫌悪を隠さずに言っただけだ。

その殺意の籠った視線と、恐ろしい言葉で、全身の鳥肌が立った。

一体目の前に居る人は【誰】なのだ？

魁にそっくりだが、その口調や、態度は別人だ。

威圧感に押され、思わず後ずさりすると、背中に何かが当たった。
見上げるとそこには、

怒りをあらわにした魁が居た。

「【化け狐】 ごときが口がすぎますよ？

一生その口が聞けないように私の手自ら、お前を地に沈めてやりま
しょうか？」

微笑みながらも、その目は笑っていなかった。

怖い。

魁が二人居るだけで怖かったのに、怒り狂っているダブル魁に挟み
うちにされて余計に恐ろしいことこの上無い。

「それに、私の姿で我が主に暴言を吐くなんて言語道断です。
まるで私が言っているようで反吐が出る…。

まずは、変化を解きなさい【化け狐】」

「は、はい…」

魁の殺気と怒りに怯えた様子の魁そっくりさん。

何かを唱えると、木の葉が彼を包み、それが弱まると、そこには

別人が立っていた。

艶やかな栗色の癖の付いた髪に、炎を思わせる紅色の瞳の私と同じ年くらいの少年が立っていた。

その顔立ちは、幼さを残していたが、とても整った顔立ちはジャニーズぶりだ。

きっと世の女子は彼を放っておかないだろう。

服はスーツでは無く、何故か、我が高の学生服を着こんで居た。

「さあて、どう料理してあげましょうか？」

私の妖力の一部として取り込んでやりましょうか？

我が【主】をコケにした罪は、海よりも深いものなのですよ？」

「す、すみませんって！

口が過ぎました！本当に反省してます！

100年も貴方に仕えて来た俺にその仕打ちって酷すぎません！？」

「黙らっしゃい。

私の広い心で苦しまずに一瞬にしてあの世に送って差し上げますよ。

」

「ちょっ、冗談ですよね!？」

「冗談に見えますか？」

恐ろしい事を連呼する魁に対して青い顔をして必死に許しを乞う少年。

どうやら、原因は私に対する暴言らしい。

まあ、確かに殺す発言は恐ろしかったけれど、彼は行動に移さなかったわけなのだから、命を取るの、やりすぎだろう。

っていうか、人権完璧に無視ってるって!!

「はい、魁ちょっとストップ!

そこらへんにしておきなさいって。

別に彼は、行動に起こしてないでしょう?」

「いえ、貴方に対する暴言は死罪に値します」

一体誰がそんな法律を決めた。

だったら、今ごろ弥鶴のからかいは全て死罪に値するのか? だったら何回弥鶴は死んでるんだ。

「そんな理不尽な理由で簡単に殺しちゃいけません。それに命に代えは利かないの!

簡単に奪っちゃいけません!!」

「ですが…」

「ですがもへったくれもない!!」

私がいいって言ってるんだから、いいの。

それとも私の言うことが聞けないの？」

そういうと、『うつ』と押し黙る魁。

暫く栗色の髪 of 少年を恨めがましく睨むと諦めたのか、溜息をついて渋々了承した。

これで、なんとか血生臭い光景を見ずに済んだわ…。

いくらなんでも私の所為で誰かが殺されるだなんてまっぴら御免だわ。

「で、魁、目の前に居る少年は一体誰なの？」

「ああ、私の配下に当たるものです。」

ふーん、つまり魁に仕えてるんだ。

そういえば、さっきもなんか100年仕え来ただの言ってたな…。

って、100年!?

「え、もしかしくなくても、彼も・・・魁と同じく【怪異】？」

「お察しの通りで。」

まだまだ未熟者ですが、変化は得意なものですから、貴方のお傍に居るために必要な手続きを全て彼に任せておきました。」

そういえば、結局聞けず仕舞いだったがどうやって魁は私の傍に居るつもりなのだろう？

「魁、貴方一体全体どういう形で私の傍に居るつもりなの？」

すごく嫌々な予感がしてならない。
スーツ姿、キッチリとした髪、眼鏡。
その姿はまるで…

「貴方の担任の教師としてですよ。」

見事に私の予感は的中してしまった。
この時期に？

新しい教師でしかも、担任？
今までの担任はどうなった？

「え、でも、前の担任は？」

「それなら俺の妖術で校長操って3日前に解雇処分にしてどっか別の場所に飛ばした。」

そうサラッと少年は答えた。

：マジですか？

私1人の為に15年間この学校に勤めていた教員を解雇させちゃったの！？

罪悪感、半端ない。

「主君シュクンがどうしても、アンタの傍に居たいからやっつけっつーから俺が妖術使って人操って、主君をアンタの担任になるように操作してえーと、戸籍と教員免許とやらも偽造させたり：ほんっとーにマジこの3日疲れた」

仕えて来た100年の中で一番の労働ですよーと、魁に対してブルー文句を言う少年。

彼は、一体自分がした重大さに気付いていないに違いない。

完璧犯罪だからね、それ？

だけど、怪異である彼らには人間の法則なんてどうでもいいのだから。

少年も魁に言われたからやっただけだし、魁は私の傍に居たいからそうした。

ただそれだけの事。

本当に自由奔放だ。

「こら【化け狐】言葉づかいに気をつけなさい。

私の【主】ですよ？

私よりも上の存在、お前より遙か彼方上に立つ者なのです。

お前なんか菜春様から見たら蚤虫以下です」

いや、そんな事思っていないし私言っていないからね！?!?!

不服そうに私をジトーと見つめる少年。

絶対嫌われた。

好感度完璧ダウンした。

印象最悪じゃないかあああっ!!

「でも、逆に俺が敬語にしたら困るのは菜春さんなんじゃないですか？

だって、俺は転校生としてクラスで彼女を守んなきゃいけないんですよ？」

「ちっ、口だけは達者ですね。
これで菜春様が掠り傷一つして御覧なさい、原型が分からないくらい切り刻みますから。」

あー、なんかまた恐ろしい言葉がー。

でも、聞こえない、聞こえない！

幻聴だ、幻聴だと思い込むんだ。

この現代社会において、そんな言葉が日常に使われる筈ないんだから！！

それよりも、転校生？

少年は、転校生として学園に潜り込むつもりだろうか？

しかも、その理由がまた

私の護衛みたいだ・・・

家族以上に心配性だよ、魁：

「魁、彼の名前なんていうの？」

「【化け狐】は化け狐ですよ。

それ以外に名前なんてありません。」

いやいやいや、それは妖怪の名前でしよう！？

少年の正体が【化け狐】というのはもう理解した。

だから魁の姿になれたわけね。

でも、本来の彼の【人】としての姿はこの姿ってこののかな？

って、そんなことよりも、【化け狐】なんて名前の人日本中探しても居ないから!!

「それじゃ不自然すぎでしょ！」

【化け狐】は、妖怪の種類で、名前とは異なるものだし、そんな名前の人間は居ないわよ!」

「じゃー、適当に付けますか？」

私は、別に【蚤虫】でも全くいいのですが」

「そんなの嫌ですよ、俺!!」

「お黙りなさい。」

お前の意見なんて聞く価値も無い。」

よっぽど先程起こった事を根に持っているらしい…。
大人気ない……。

私は盛大な溜息をついて、【化け狐】君に向き直る。

「えーと、【化け狐】君？」

「はい、なんですか菜春さん？」

私に対する苛立ちを隠さずに腕を頭の後ろに組んで私を鬱陶しげに見つめる。

100年も仕えて来たって事は、本当は、100歳以上なんだから、16歳の私なんて彼から見たら赤ん坊見たいなもの。

彼ら【怪異】のように何の力も無いただの【人間】の私に仕え、ましてや護衛しなくてはならないのだからそれは、屈辱的だろう。

「ごめんね、幼い私が【契り】とやらを交わしたばかりに、貴方まで巻き込んでしまつて…。

私みたいなのを護衛するの、面倒だよ。

無理しなくてもいいんだよ？

別に普通の学校だし、危険なんて無いからさ。」

そう笑って彼に、自由になってもいいよと話しかけると、目の前に居る美少年は、くりくりとした赤い瞳を丸くさせた。

何か変な事、言ったか私？

数秒固まった後、目の前に居る少年は、クツクツと笑い出した。

初めて見た彼の笑み。

それは、私を小馬鹿にしたものだろうがそんなことが気にならなくて、思わず見惚れてしまった。

口元に手を構えて、意地悪そうな笑みで私に向き直ると

「へー、随分と面白いお嬢さんだ。

主君が気に入ったのも何となく分かるや。

普通の人間なら図に乗るものを…

いいよ、アンタの護衛になってあげる。
これは俺の意思だから、気にすんな」

「ほう、お前に意思があったとは初耳ですね」【化け狐】

「俺にだって感情くらいはありますよ」

どこか不機嫌そうに【化け狐】君を見つめる魁。
それに対して、軽くあしらって得意そうに笑う少年。

なんで魁は、不機嫌なんだ？

「あのっ、【化け狐】君。

やっぱり悪いよ。

貴方を拘束するようなものだし…。
やっぱり後ろめたいというか、罪悪感が…」

「だったらちよっと取引きしよ？

俺のお願い聞く変わりにアンタを俺が護衛する。

それなら別に罪悪感も糞もないだろ？」

…それなら幾分かマシだけど。

でも、食べられるとかそういうのだったら嫌だなー。
さっきまで私のこと食い殺すって言ってたし…。

「名前」

「え？」

「だから、名前付けてよ。

俺、今名前無いからさ。

名字は、【七尾^{ナナオ}】って決めてんだ。

化け狐の俺の尾が7本しか無いからさ。

というわけで、名前付けて。

それが護衛の交換条件♪」

ニヤリと笑って言う彼。

それに相反して、魁の取りまく空気は悪くなる一方だ。

「【化け狐】、私の主に条件を出すとはいい御身分ですね？
タヌキ汁ではならぬ、キツネ汁にでもしてやりましょうか？」

「だって、主君。

菜春さんが俺が護衛すると、罪悪感抱えるっていうんですよ？
それ解消してあげないと、菜春さん苦しんじゃうじゃないですか。
主を苦しみから解放するのも配下の勤めでしょう？」

魁は、苦虫を噛みつぶしたような表情をしたのち、いやいやながら、
仕方ありませんねと、言って無理やり納得した。

「と、いうわけで菜春さん早く考えて！
そうじゃないと、HRとやらが始まっちゃうよ？」

確かに、そうこうしてる間に時間が経ってしまった。
もう時刻は、8時15分を回っていた。

栗色の髪、紅の美しい瞳、変化、人を操る…

「…シュリ」

「しゅり？」

「朱色の【朱】に利口の【利】で【朱利】。

君の紅色の瞳が凄く綺麗で私、思わず見惚れちゃったの。

そこから【朱】を取って、頭の回転が速くて、化けるのが得意な狐だからお利口さんという事で【利】。

それで【朱利】。

どうかな？」

ちょっと漢字の見栄えは悪いかもだけど…。

しかも、意味もかなり単純だし…。

大丈夫かな？

「朱利…ん、気に入った！」

ありがとう、菜春さん。

まさか短時間で本当に名前付けてくれるとは思わなかったよ。」

嬉しそうに笑ってくるっと一回転すると魁に向き直り

「これからは、あいつ等にも朱利って呼ばせよっと！
あ、主君も俺の事朱利って呼んでくださいよー？」

「お前なんぞ【化け狐】で、十分ですよ。
調子に乗るな馬鹿狐」

「あれー？
菜春さんが一生懸命この短時間で考えて下さったたーいせつな名前ですよ？」

【主】の努力を無駄になさるおつもりですか？」

楽しそうにケラケラ笑いながら魁に話しかける朱利。
心底不快そうに顔を歪ませた後、盛大な溜息について力無く少年の名を【朱利】と呼ぶということを
了承した。

「菜春様言い忘れておりましたが学校とやらでは教師を名字で呼ぶのが主流だそうなので、私も勝手ながら名字を作りましたので名で呼ばれないのは大変残念なのですがその名字の方で愛を込めて呼んで下さいませ。」

「あ、魁も名字作ったんだ！
なんていう名字なの？」

「【山神】と呼ばれていたなのでその名の通り、少し漢字だけ変えて山の上と書いて【山上】と、名乗ることに致しました。」

「うん、すごくいいと思うよ。
じゃあ、山上先生って呼ぶね。」

「はい、お願い致します。
私もそろそろ準備しなくては…」

そういうが否や何処から共なく葉が入り混じった竜巻が魁を覆い、それが晴れた時、魁は、朱利が魁の変化をしていた時と同じ格好をしていた。先程までのワイルドかつ紳士的な印象とはまるで違って、彼の知性が滲み出ている。

本当にどんな服でも似合うな…。

「私と朱利は、後でまいりますので菜春様は、先に教室でお待ちください。」

もう8時18分ですから、間に合いませんよ?」

「えっ、嘘!?!?
流暢に話してる場合じゃなかったんじゃない!!
じゃあねっ!?!?!」

「くれぐれもお怪我をなさらないよう気をつけてくださいね。そうでないと私は、きっと正常じゃいられなくなりますから。」

「はいはい、また後でねー」

魁が言った恐ろしい言葉は聞かなかった事にして、私は屋上を後にした。

猛ダッシュのおかげかクラスに滑り込みセーフで席に着くことが出来た。

クラスは、担任が辞めた話題で持ち切りで、新しい担任が男か女か、年はどれくらいかとか

朝から皆さんテンション高い。

きっと、魁と朱利が来たら女子生徒の皆さま方は、放っておかないだろうなー。

何せアノ外見だしね。

魁は、インテリクール系。

朱利は、ジャニーズ系だしね。

朱利は、多分身長は、ギリギリ165cm前後くらいかな？
それでも私より高いけど。

でも、まだ成長過程だしきっと大きくなるんだろうなあ。
って、もう100歳以上なんだっけ？

怪異ってどうやって外見の年、変わるんだろう・・・？

とか、なんとか考えているとHR始まりのチャイムが鳴った。
すると、騒がしかった教室は、一瞬のうちに静かになった。
それも廊下から聞こえてくる

靴の音が聞こえるくらい。

複数の足音が教室に近付いてくる。

そして、ついに教室のドア付近で止まる。

ドアが開き、そして、現れたのは

私の【僕】である彼だった。

そして、冒頭に戻るわけである。

周りの女子生徒は、もう夢見る乙女状態。

目がハートマークになっている。

そりゃそうだよね。

前まで爺が担任だったのに、中途半端な時期とはいえ、

こんな美形が担任になるんだもの。

魁の仲良くなりましょう発言にほとんどの生徒が勢いよく首を縦に振っていたしね。

私もきつと彼女たちまでとはいかなくても、きつと見とれるくらいはしただろうなあ…。。

相手が怪異で【僕】であることを知りさえしなければね。

「さて皆さん、私と同じく新しくこの学園に入ってきた生徒が居ます。

…入ってきなさい」

ガラッとドアが再び開かれる。

そして、現れたのは、仏頂面でやる気の無さそうな顔の朱利だった。

女子の皆さんは、もう昇天寸前。

そうだよね、こんな美形が二人も一気に入ってくるなんて鼻血ものでしょう。

さっき会っていた私ですらやっぱり見惚れてしまうくらいですからねー。

「今日からこのクラスに入る【七尾 朱利】です。
よろしく願います」

…自己紹介それだけかよッ!?

そんな私の心のツツコミはもちろん心の中で散っていき、周りの女子は、彼の声に聞き惚れている様子だった。

確かに、いい声してるもんね。

美形って顔だけじゃなくて声もいいのか?

それって随分と都合良く出来てるよね。

というか、【怪異】って擬人化すると、皆がみんな美形なのかな?

是非知りたいものですね。

「じゃあ、七尾君の席は…」

クラス名簿と机の位置を見比べる魁。

今、きつと女子生徒の皆さんは、自分の隣に来るよう一丸となって神様に同じ願いをしているに違いない。

「林 菜春さんの隣にしましょうか。」

林さん、手を上げてください」

・・・マジですか？

一瞬にして生徒全員の視線が私に降り注がれる。

その中に嫉妬という名の殺意が入り混じっている気がするの

私の勘違いでは無いだろう。

恐る恐る手を上げる私。

そんな私の心中を知らないであろう魁は私に対して愛おしげな笑みを浮かべた。

幸い全員の視線が今私にあるからいいものをもしも女子の誰かが見えていたらきつと視線で射殺されているだろう。

現に今視線と言う名の刃が私に降り注いでいる。

朱利が席と席の間を通り抜けて私の隣に行こうとすると突然1人の女子が手を上げた。

「山上先生、林さんの隣には盛岡君が座っています。

私の隣は、空いてるので、七尾君の席は私の隣が妥当かと思います」

朱利は、足をピタッと止め。

魁は、引きつった笑みを浮かべた。

その女子が言う事は正論だ。

私の隣には現に盛岡君が大人しく座っている。

朱利が私の隣と聞いてかなり動揺していたのを私は、隣でキチンとみていた。

ふう、と溜息をつくと困りましたねーと、頭を抱える魁。

それに対して朱利は、彼女の発言を完璧に無視しなんと、私の席の隣、つまり盛岡君の前に立ち

爆弾を落とした。

「そこ、俺の席になったからアンタすげえ邪魔だから、退いてくれない？

っていうか、失せろ。

さっき手上げた女の隣に移ればいいだけの話でしょ」

ピシリツと空気が凍った。

口、悪すぎだよ朱利…。

貴方そんな口調だと、モテないわよ…？

いや、そのルックスなら平気かもだけど、注目する部分はそのでは無くて！

堂々と威圧的に見下しながら言われ、挙句の果て邪魔者扱いされてしまった盛岡君。

もう、その迫力と朱利の言動に盛岡君は半泣き状態だ。
しかし、そんな彼におかまいなしに言葉を続ける朱利。

「アンタ耳大丈夫？

俺、脚疲れてんの。

さっさと退いて？そこ俺の席だから。」

転入したばかりとは思えない俺様ぶり。

盛岡君は、怯えながらも急いで教科書を鞆の中に詰め先程、手を上げていた女子の隣の席へと移動した。

すると、ドカッと盛岡君が座っていた場所に朱利は腰を下ろし、満面の笑みを私に向けて

「お隣さん同士これから【も】仲良くしてね菜春さん♪」

【も】を強調するな。

絶対、今女子の耳がダンボになったに違いない。

あーもー!!

ええ、分かってます。

元凶は全て私です。

不運にも私の隣に座ってしまっていた盛岡君に心からお詫び申し上げますよ。

盛岡君、本当にごめん。

皆から憐れみの視線を受ける盛岡君と、美形ながらもとんでもない事を初っ端からしでかした朱利に好奇の視線が交差する教室。

そんな室内の空気を完璧に無視してパンツと手を叩き皆の注目を自分に戻した魁。

その顔には満面の笑顔が浮かんでいた。

「これで問題解決ですね！

盛岡君、動いてくれてありがとう。

私の考える手間が省けましたよ」

いやいやいや!!

っていうか魁、普通に止めようよ！

そもそもお前が元凶だろ！！
突っ込みたい所満載な発言は、彼の無敵スマイルにより
完璧スルーされ、このひと騒動の終わりを告げるかのように、

H R 終了のチャイムが鳴ったのだった。

これから私の平凡な何も無かった日常は、どのようにして脅かされるのだろうか？

初日の朝からこの騒ぎ。

これから巻き起こる嵐に私は耐えられるだろうか…。
不安を抱えながらも、私は、1限目の古文の教科書とノートを取り
だすのだった。

「あ、俺、教科書無いから見せて」

「（もうなんか逃げたい）」

忠義

「ねえねえ、七尾君って何処から来たの？」

「目の色赤いけどカラコン？」

「うちの高校、そういうの禁止だよ？」

「外しといたほうがいいよ？」

「どうしてこの時期にここに引っ越したの？」

「お父様のお仕事関係？」

「お弁当とか大丈夫？」

「購買まで案内しようか？」

「うるさいです、お嬢様方。」

「現在、昼休み。」

「私の左隣から女子の皆さんのマシンガントーク。」

「全て朱利に対する質問ばかりだ。」

「ゆっくり食事くらい取りたい。」

「それも許されんのか。」

「盛大な溜息をつく。」

「しかし、質問されている朱利は、私以上に不機嫌だった。」

「無理もない、彼は人間では無い。」

「私に対する当初の反応からすると人間嫌いと思われる。」

「彼は無表情だったが、私は見た。」

彼が持っている金属製であろうペンが

有得ない方向に曲がっているのを。

あちゃー、相当キテるね。

爆発しないかハラハラする私。

嫌な予感がしてならない。

そして、その予感は：

「…ギャーギャーうるさい。

昼休みくらい黙って食べれば？

俺、腹減ってんの。

腹減ってて不機嫌なの、分かる？

ただでさえ慣れない場所で疲れてるのに、そんなに一度に質問されて答えられると思う？

少し考えたら分かるでしょ？」

吹雪が到来した。

空気が一瞬にして固まった。

あんなに煩かった女子の皆さんは、一同口を噤んだ。

すると、慌てた様子で弁解と謝罪の言葉を次々と口にする。

「ごめんね、そうだよね。

気が回らなくてごめんなさい」

「七尾君の事、知りたくて…余計なお世話だったよね、本当にごめんない」

女子の皆さんは、申し訳なさそうに若干首を傾げて可愛らしく許しを乞う。

…猫かぶってますねー。

いや、そりゃ分かるよ。

こんな美男子が転校したんだもん。

そりゃ知りたいし、お近づきになりたいよね。

そりゃ少しは可愛らしくしたいと思う。

だけど、そんな可愛い仕草しても多分…

「うん、分かったならいいから。

ホントほっという。

俺の視界から消えてくれると本当に助かるんだけど」

はい、効果まるであります。

やっぱり【化け狐】。

人間なんて眼中に無いですよね。

ましてや、人外だし。

100年以上生きてる朱利にとって彼女たちは赤ん坊みたいなものなのだろう。

無論私も含めて。

ぐうぐうと、音が隣から聞こえる。
すると、朱利は机に突っ伏して

「も、無理…お腹空いた、死ぬ」

昼休み開始から15分経過したというのに朱利は、一向に食べ物を
買いに購買に行こうとしない。
お弁当を持っているような感じは全くないし。
もしや、お金が無いのでは？

「大丈夫？

もしかして、お財布忘れたの七尾君？」

「あたし、よかったらお金貸すよ？」

「行くのも辛かったら私のお弁当あげるよ」

ここぞとばかりに取りつくろう女子の皆さま。
なんという変わり身の早さ。
すると、朱利は手を力なく振ると

「大丈夫、金ならあるしお弁当、いらない。
そしたらアンタの分無くなるじゃん」

そして、ボソリと小さな声で【それに頼い小娘の弁当なんて死んでも食えるか】と、乙女心を抉るような言葉を吐き捨てた。
幸い、その彼の呟きは、彼女たちの耳には入らなかった様子で、頬を染める女子たち。

騙されてる、騙されてるよ！

文字通り、狐にまんまと化かされている
お嬢様方。

朱利は、彼女たちに席に戻って弁当を食べるように促した。

顔を真っ赤にして、女子たちは彼の前から立ち去った。

その際、彼女たちの間で朱利の何気ない優しさや、外見についてキヤーキヤー騒いでいた。

弁当の件は優しさじゃないですよー。

そう言ってやりたかったが、朱利のイメージが悪くなるのであえて
言わないでおいた。

それに私が言ったところできっと聞く耳を持たないだろう。

ぐうく…

隣でまた空腹を訴える音が聞こえた。

「お腹…空い、た」

バツタリとしてしまった朱利。

お金はある。

なのに、購買にも行かず何故か教室はおろか、席すら立とうとしない。

彼の思いと行動との矛盾に疑問を持ち、思い切って聞いてみた。

「朱利、お腹が空いたのなら購買に行って買いにいけばいいじゃない。

場所、分らないの？」

「校内の設計は全部把握済み。

何処にあるのか知ってるし、メニューも値段も暗記した」

だったら尚更だ。

何故、彼はココに居る？

もう、立つ気力が無いくらい空腹だというのだろうか？

だけど、彼は【怪異】だ。

多分それで動けなくなるような魂ではないだろう。

「じゃあ、尚更よ。

早く買いに行つてらっしゃい。

それともお腹空きすぎて立ちあがれない？」

「…人間みたいに俺は、軟じゃない。

大体1週間は食べずとも平気」

「だから今食べないの？」

そんなにお腹鳴らしてるのに」

「そりゃ食べたいよ。

食べなくても動き回れけど、空腹なのには変わりないし、その苦痛は食べない限りそのまま。

今日は特に妖力使ってるから消費が激しくて、ちょっとつらいかな…」

机に突っ伏した状態で私の方向を向き苦笑する朱利。

彼の顔には確かに疲労の痕跡が見当たった。

食べれば解決するのなら食べればいい。

買いに行けばいいだけなのに、何が彼の行動を邪魔しているのだろうか？

「じゃあ、どうして食べ物を買に行かないの？」

すると、彼はさも当然かのようにとんでもない事を口にした。

「だって、俺は菜春さんの護衛だから、離れるわけにいかないじゃん」

絶句。

まさか、原因が自分にあったとは思ひもなかった。

そうだった。

朱利は、魁の配下に位置する。

魁に私の護衛を命じられたのだから、当然私の傍を離れるわけにはいかない。

つまり、どんなに腹が減っていようが私の傍を離れて、購買に行くなんて言語道断、論外というわけだ。

なんて、主人の命令に忠実なのだろう。

魁は私に忠実だ。だが、朱利は魁に忠実なのだ。

魁の命令は絶対。

それは、配下にいるからなのか、事情はよく分からないけれど。

「：朱利、貴女まさか私の傍を離れるわけに行かないから購買に行かないで教室に居るわけじゃないでしょうね？」

「そうに決まってるじゃん」

当然かのように豪語する朱利。
その言葉には何の迷いも無い。

「主君の命令は絶対だし、逆らったら俺、消されるし。
それに言ったよね、俺」

腕を伸ばし私の頬に触れるとふわりと微笑み

「名前決めたらお守りしますって」

…どうしよう。

絶対、今私顔真っ赤だ。

アノ朱利君が、微笑んで、私に触れてまで…

「真っ赤になっちゃって面白いね、菜春さん♪
若いっていいなあ」

演技か、演技だったのか！？
まんまと狐に化かされましたよ。
若いって…見た目私と同じ年齢ですが？
ああ、でも100歳以上だっけ？

…お爺ちゃんじゃない

だけど、目の前に居る少年は大変端整な顔立ちをしていてやっぱり、
見ているだけで
心臓の音がうるさくなる。

でも、そんな事より私がしなくてはならないことは。

「いたっ、何するの突然!？」

「馬鹿ね、お腹空いたなら普通に購買に買いに行きなさいよ」

デコピンをして痛がる朱利。

私を騙した罰だ。

ざまーみろ。

「だから、そんな事したら主君に殺されちゃいますって」

「私から離れちゃいけないから？」

学校に居る間は、ずっと私の傍から離れちゃいけないわけ？

トイレとかどうすんのよ」

「その場合は、外で待機してますよ」

男と連れションですか!？

無い、ありえないから!!

「と・も・か・く!!」

購買に今から行くよ、朱利!!」

「え、でも菜春さんお弁当食べ終わってくない?」

「空腹で死にそうになってる人の前で楽しく食事出来る程、私は神経図太くないわよ。

食事って楽しむものなんだから」

財布を取り出し、朱利の手を引いて立たせる。

「ほら、行くよ。

ごめんね、我慢させちゃって。

今度からは、朱利の分の弁当も作っておいてあげるからね」

「…じゃあ、お稲荷さん入れてね」

「はいはい、了解しました。

今だとろくなもの残ってないだろうから、とりあえず、何か買って私のお弁当と半分ずつこにしようか」

栄養に偏りがあるといけないしね!

っていうか、やっぱり化け狐だから、お稲荷さん好きなんだ…。
なんか、可愛いな。

思わず顔が綻ぶ。

すると、朱利は、ポツリと何気なく言った。

「菜春さん、俺の事呼び捨てになってるよ？」

…そういえば。

さっきまで君付けで呼んでいた。

だけど、なんだか名付け親だからなのか、なんだか君付けがこそばゆい。

深い意味は特に無いんだけど…。

「じゃ、私の事も呼び捨てにしちゃったら？」

「そんな事したら主君に殺されちゃうって。

ただでさえタメ口利いてるだけで圧力かけられてるんだし」

「そっか、まあしょうがないよね。

魁は朱利にとって上司みたいなもんなんですよ？」

「うーん、人間界で言うところの社長と課長って所じゃないかな？」

「へー、じゃあ朱利って結構高ポジションなんだ」

そういうと、苦笑され遠くを見ながらポツリと言った。

「まあね、後2本で――るし」

最後の方は、ボソリと呟かれて聞こえなかった。

聞き返そうと思ったが、朱利のお腹が鳴ったので、とにかく購買に急ぐことにした。

無意識に彼の手を握って。

前方を向いていた私には彼の顔は分からなかったけれど、朱利の手が少しビクついたようなそんな気がした。

「あ、ごめん。」

無意識に手握ったけど、嫌だった？」

「…大丈夫。」

ただ、ちょっと驚いただけ」

恥ずかしそうに視線を逸らして言う彼に対して母性本能らしきモノをくすぐられた気がする。

ああ、これがいわゆるツンデレって奴ですね分かります。

そんな彼を見て心温まりながら手を引いて私達は、購買へと向かった。

だけど、私はたったこれだけの行動であんな事が起こるなんてその時は、

全く予想していなかった。

嫉妬

―ベキッ

彼の手に握られていた鏡は、まるで砂糖菓子のように簡単に粉々になって床に落ちた。

破片によって傷つけられ手から滴るのは、彼の血。

「だ、大丈夫ですか、山上先生!？
て、手から血がっ…」

若い女教師が、青い顔で彼に寄って来るが、彼は、それを気にする事無く無表情で空を見つめる。

その黄金に輝く瞳には、怒りの色が見えていた。

手の痛み等感じていないかのように鏡の残骸を手放し刺さっている破片を一気に引き抜く。

「山上、せんせ、い？」

幸い彼女以外の教員は、教員食堂やら、何処か別の場所で昼食を取っているのか誰もいなかった。

冷たい瞳で、女性教員を捕える。

ヒッ、と悲鳴を上げた女性教員だが、彼の瞳を逸らさずにいると、

彼女はまるで人形かのように目から光が失われ、元に居た彼女の席に着きボーっと座る。

まるで、何も起こっていなかったかのように。

席から立ち上がるとペキリと鏡の破片が壊れる音がする。

赤い色と銀が混じりあいなんとも不気味な雰囲気を漂わせている。

眼鏡を取りそれを胸ポケットにしまう。

そして、血が出ている傷口に舌を這わせ、血を舐めとる。

「調子に乗りすぎですよ、【化け狐】の分際で…」

彼は、鏡越しに全てを見ていた。

愛する主が、護衛を指名した自分の使いを

気遣い、手をつなぎ昼食を共にしている姿を。

自分の僕が、何処か幸せそうに、自分の主に触れ、主がソレに笑みを向けているのを。

「菜春様に触れていいのは、私だけ。

：彼女は私だけの者。

彼女の寵愛も、優しさも、全て私だけが受け取るべきもの。誰にも渡さない。

渡すものか…最愛なる我が主」

10年も待った。

彼女の為に全てを用意し、全てを片付け、様々なものを犠牲にした。

「お仕置きが必要みたいですね、7つしか尾を持たない【化け狐】が」

血を舐め終わると、手にあった傷は全て消え鏡の破片も消えていた。何事も無かったかのように場所は静寂と日常が流れていた。

ただ、彼の心には嵐のような怒りの渦が占めていた。

愛する少女に触れられた。

たったそれだけの為に、彼の心は大きく揺さぶられた。

誰にも触れられたくない。

大切な大切な自分の【主】。

【契り】を交わしてから10年思い続け、やっと触れられる範囲にまで近づく事が出来た。

自分はそのままで苦勞した。

だが、自分の下僕はいとも簡単に彼女に触れた。

否、触れることを許され、しかも、彼女から触れたのだ。

許せなかった。

憤怒、憎悪が彼を覆う。
当初はただの小娘だった。
なんとも思わなかった。

【契り】を交わそうと、別に飽きたら自分の下僕に殺させれば良い
と思った。

まだ、【契り】は不完全だったのだから。

だが、それを変える決定的な出来事がこの10年の間にあった。
それが故、自分は誓ったのだ。

彼女を愛する事を。

口調を変えた。

姿も変えた。

自分の立場も捨てた。

全ては、

少女の傍に居る為に。

きっと少女は覚えていない。

あの時、彼女はまだ10歳だった。

この空気の汚れた都会に自分が視察に来た時に少し早かったが、様

子を見に来たのだ。

その4年間も、彼女の同行を鏡越しに見ていた。彼にとって鏡とは、己が望む者を映すいわば道しるべ。

どのような日常を送っていたか、自分が住まう自然に囲まれた山から緑の無い都会に移る様子、家族と共に過ごしている姿、少女の成長を鏡越しに見守っていた。血に汚れた自分にとって少女の姿を見るひと時がいつの間にか唯一の癒しになっていた。

ひと段落ついた時、鏡越しの彼女ではなく、本物の実物を見たくなった。

人間の姿へと化け、自分は彼女の元へと一度行った。

家臣たちを撒き、遠く離れた都会へと足を踏み入れた。

人間の欲望に満ちた都会は正直自分には苦しかったが、それでも、少女を見たかった。

住宅が密集している中に1つある公園に、少女はブランコに1人で座っていた。

赤いランドセルは、隅に置かれており、周りには誰もいなかった。

時刻は、夕方の5時を指しており太陽は沈みかけていた。

10歳の幼い少女が出ていい時間帯では無い。

見守るだけだった筈だったのだが、どうせ覚えていないと高を括って少女に近付いた。

「十になった娘がこんな時間まで一人で何をしてる？
家族の元に帰らぬと、両親が心配するぞ？」

突然話しかけられた少女は、驚いて、自分へと目を向けた。
自分の姿を捕えると、悲しそうに言った。

「うん、知ってるよお兄ちゃん」

「だったら尚悪い。

さっさと家に帰れ。

過保護な兄も心配してるだろう。

今頃、慌てふためいているぞ」

異常なまでの執着心を持っている彼女の兄は、きっと今ごろ落ち着かず彼女の名前をぶつぶつ唱えているだろう。

「お兄ちゃん、菜春の家の事よく知ってるね。
でもね、今日はまだ帰りたくないの」

驚いた顔をした直後、幼い顔に似合わない
儂い笑みを向けた。

それを見た自分は、何も言えず、空いていたもう一方のブランコに
腰をかけた。

「我でよければ話してみよ。

少しは気が楽になるかもしれん。」

目をパチクリさせると、
クスリと笑った。

「お兄ちゃんって、面白い話し方をするのね。
でも、なんだか懐かしい気がする。
何でだろう：ね」

その言葉に心臓がはねたが、それを顔にあらわさず、彼女に話すよう促した。

「今日、少し悲しい事があったの」

「どんな事だ？」

「菜春、花とかね、自然が凄く大好きなんだ。
だから、お花係になったの。」

お花をお世話する係ね、お兄ちゃん知ってる？」

知らなかったが、とりあえず頷いておいた。
何かは彼女が説明したのだから、意味は把握したから嘘はついていない。

「大切に大切に育てたの。」

毎日を撒いて、肥料を変えたりして、泥だらけになったけど、やっと昨日ね、その花達が咲いたの。
菜春：すっごく嬉しかったなあ」

それはよく知っていた。

昼休みや放課後、彼女が必死に花壇に入り
小さい手で雑草を抜いたり泥だらけになりながらも手入れをしていたのを鏡越しで見ていたのだから彼女のその苦労も、その時、浮かべていた笑顔も自分はよく知っていた。

幸せそうな笑みを浮かべていたが、それが次の瞬間一変し、泣きそうな顔になった。

「だけどね、今日見に言ったら：お花、踏み潰されちゃった。
花壇もボロボロで、土も滅茶苦茶。
足跡だらけで：全部だめになっちゃった」

目を見開いた。

足跡ということは、誰かが侵入し踏みつぶしたのだろう。

少女の努力の結晶を一瞬のうちに奪ったのだ。

少女の立場になって考えれば、それは悲しいだろう。

だが、それ以前に：

「お前は：憎くないのか？」

「え？」

「その踏みつぶした相手が、大切な花を台無しにした人間に怒りを、憎しみを感ぜないのか？」

自分だったら憤るだろう。

相手を怒鳴り散らし、何故あんなことをしたのか問いただすだろう。

いや、自分だったらそれ以上のことすらしかねない。

相手を殺す事とすら厭わないのだから。

「怒ってないって言ったら嘘になるよ。

…だって、頑張って必死になって育てたんだもん」

「ならば…」

復讐すればいい。

その相手を付きとめて、相手に対してそれ同等の苦しみを与えればいい。

だが、少女の出した答え。

その言葉に自分は驚きを隠せなかった。

「だけど、その踏みつぶした人も可哀想だなんて菜春は思うの」

【可哀想】？

それは、お前だろう。
手塩をかけて育てた花を台無しにされたお前にふさわしい言葉ではないか。

断じて加害者に使われる言葉では無い。

「きっと凄く今苦しんでると思う。
なんて事をしてしまったんだろうって。
謝りたくても、謝れなくて。
責められるのが、怖くて、黙ってるしか無くて。
悪いことしちゃったら、菜春も謝り辛いと思うし、さ」

「お前…」

何故そのように考えられるのだろうか？
自分は沢山の人間を見て来た。
そんな事をされた人間は、怒り狂って、相手を責め立てた。
それが普通ではないか。

「そんなの綺麗ごとだ。
いい子ぶらず、相手を怒ればいい。
憎めばいい。
お前にはその権利がある」

だが、少女は
首を横に振る。

「菜春は、その子を憎めないよ。
だって、憎しみは何も生まない。
責めても花は戻ってこないんだもの。
それに、菜春が悲しいのは、花がダメになっちゃったからじゃない
の」

涙が眼から滑り落ちる。
でも、その顔から儂げな笑みは消える事は無い。

「誰も：何も言わなかったの。
花が可哀想とも、菜春が可哀想だとも。
皆、知らん顔だったんだ…。
先生も表向き犯人は手を上げなさいって皆に言ったけど、面倒くさ
そうだった…。
…みんな、どうでも良かったんだ。
菜春が育てた花も、咲いた花も、全部」

ああ、なんということだろう。
人間とはここまで自己中心的だったのだろうか。
ここまで他人に無関心になれるのだろうか。
冷徹になれるのだろうか？

目の前に居る少女は、誰よりも優しく、人を思っているのに、誰も

彼女に対してそれを返さないのか？

花のように無償の愛を与えている少女に、年の功である【先生】でさえも彼女の悲しい訴えに無関心なのか？

それでは、あまりにも彼女が…報われなさすぎる。

「お父さんとお母さんやお兄ちゃんに話したら、きっと学校に行って抗議したりして、大問題になっちゃうし、悲しむと思うの。だから、泣くのは菜春だけでいい。悲しいのは、菜春だけでいいんだ」

馬鹿だ。

この娘は大馬鹿者だ。

子供なのだから、甘えればいい。

泣きたいのなら泣けばいい。

助けが必要なら、助けを乞えばいい。

その苦しみを一人で抱え込む必要など無い。

何故肉親にすらそれを言わないのだ？

言ってもいい。

それが【家族】というものではないのだろうか？

全てを大切に思うが故に、一人で悲しむのか？
こんなに弱くて、脆いのに、全てを抱え込んで、

誰もいない場所で一人泣くのか？

心がこんなにも傷ついているのに誰にも悟られないようにして…。
これでは、いつか彼女は

壊れてしまう。

誰かが守らなければならない。
彼女の全てを受け入れて、苦しめる全てを排除し、泣いたときには
抱きしめ、その顔を笑顔に染め上げる。
そんな人物が少女には必要なのだ。

「ありがとね、お兄ちゃん。
話し聞いてくれてありがとう。
これできっと家に帰っても
泣かなくて済むから…。
遅くまで本当にありがとう。
気をつけて帰ってね」

何故、私なんぞの心配をする？
大変なのは、お前の筈なのに。
誰よりも苦しんでいるはずなのに。

「子供なのだから甘えればいい。

何故甘えない？何故悲しまない？

全てをぶちまけて言ってしまう方がいい。

自分はこんなにも苦しんでいるのだと！

何故一人で全てを抱え込むのだ！？」

「…お兄ちゃん、優しいんだね」

優しい？

この私が？

多くの命をこの手で奪い、血で汚れた身であるこの私が？

「菜春の事を思っただけで怒ってくれてるんでしょう？

菜春、嬉しいな。

お兄ちゃんみたいな人が、傍に居たら凄くいいのに」

悲しそうに彼女は笑った。

初めて言われた。

自分が必要とする言葉を。

力を欲するが故に必要なのではなく我自身を見つめて、必要としてくれた人間を生まれて初めて見た。

衝撃的だった。

同時に胸が暖かくなり、また彼女に愛おしく思った。

一人で全てを抱え込もうとする彼女に…。

「娘、ちょっと手を出せ」

「…え、こう？」

「そうだ、少し痛い但我慢できるか？」

「…ど、どれくらい？」

「ちょっと血が出る程度だ」

「…ん、分かった。

それくらいなら我慢する」

彼女の右手を取り自分の人差し指を本来の鋭い爪の姿へと変貌させる。

その先端をぷつりと少女の薬指に指した。

「・・・ついた」

「すまん、少し我慢してくれ」

素早くその指を口に含んだ。

その行動に目を見開き顔を真っ赤にさせる娘。

その理由はよく分からないが、血を身体へと取り込んだ。
そして、最後に一舐めし、傷をいやした。

「あれ？傷が無い…？」

「…手品だ。」

少しは、気分が晴れたか？」

「うんっ、ありがとう！

そろそろ帰らないと、怒られちゃうから行くね！

バイバイ、お兄ちゃん！！

また会おうね！！」

そう言って手を振り公園から走り去る少女に手を上げて見送った。

「ああ、また6年後すぐに会おう…」

【契り】は、もう確固たるものになった。

傍にいただけの【傍観者】としての契約は、彼女と己の血がお互い交わる事により

【忠誠の儀】へと変貌を遂げた。

もう、自分は彼女から離れられない。

これは永遠の契約。

守護し、忠義を尽くす契り。

もう、自分は彼女から逃げられない。
いや、逃げるような真似はしない。

彼女は自分が守るとそう心に誓ったのだから。

一人で泣く少女を、一番傍で自分が抱きしめてやろう。
悲しめるモノ全て排除しよう。
お前の為ならなんでもする。

誰よりも心優しく、幼いながらも一人で抱え込む愛しいと思う、少女の為に。
欲の為で無く、自分という存在を認め、

我を必要としてくれたお前の為に。

あれから6年。

何百年も生きて来た自分には、一瞬の出来事のように過ぎていく短い時間の筈なのに、果てしなく長く感じてしまった。

ずっと鏡越しに見守って来た。
ずっとずっと思い続けて来た。
当初は、喜びからだった。

だが、その思いは時間が経つにつれて、どんどん大きくなり、今では自分でも笑えるほど

彼女に執着してしまっている。

愛おいしい。

全てから守ってやりたい。

触れたい。

必要とされたい。

愛されたい。

彼女が大切に育て、愛情を注いだ花のごとく、自分にもそれ同等の…

それ以上の愛がほしい。

人間のように欲深くなったものだとか嘲笑する。

分かっている。

これはもはや愛では無い。

これは己の一方的な

【依存】だと。

彼女に依存してしまっている。

【主】と【僕】という関係でもいい。

それでもいいから傍に一生居たい。

自分にとって大切に夢く、折れてしまいそうな花。
誰にも踏みつぶされてなるものか。
折られてなるものか。

彼女は、自分だけを見ていればいい。
見ていてほしい。
その瞳には、自分だけを映してほしい。

狂おしいほどの激情を自分は、彼女以外に感じた事は無い。
彼女の為に心を乱される。

「愛しています、菜春様。
だから、私だけを見ていて下さい。
そうでないと…自分と彼女以外の人間を消してしてしまいそうだ」

胸を抑え、顔を歪める。
苦しい、痛い、息ができない。

昼休み終了のチャイムが鳴る。
我に返り全ての激情を無理やり抑え込み眼鏡をかけて深呼吸する。
愛する主を見た時、化け狐を見た時、感情が乱れないようお願いを込めて。

愛に狂った怪異は、歩みだした。

理解

「…ぐあっ」

「死ね、化け狐が」

目の前の光景は何？

血を吐いて、地面が濡れる。

滴る血を辿ればそこには朱利の腹と口元。

殺意の籠った声を辿ればそこには、手を血に汚した魁。

何故こうなった？

どうしてこうなった？

ココは何処？

現実？

夢？

赤い夕陽が私の頭を鈍らせる。

ただ分かっているのは。

朱利が魁によって

殺されかけているということ。

時は、放課後17時。

空は血と同色に染まっていた。

帰宅すべく、校門へと向かおうと朱利の手を取って私達は、帰路に付こうとしていた。

だけど、それは叶うこと無かった。

一瞬にして、世界がモノクロへと変わり。

世界が歪んだかと思うと、下駄箱近辺に居た私たちは、どういう理屈か

屋上に居た。

まだ青かった空は、赤く染まっていて、時間の感覚がおかしくなったのかと、頭がいかれたのかと頭が混乱した。

だけど、隣に立つ朱利は至って冷静で、おまけに溜息までついていた。

その表情は、【またか】とでもいうように呆れていた。

「主君、また時止めたんですか」

時を…止めた？

そんな事出来るわけがない。

自然の摂理を完璧に無視して決して操る事が出来ないという【時】を止めることはできるはずがない。

「正確には菜春様とお前を少し先の時間に送っただけです。

その間、面倒な【教師】とやらの職務を真っ当しなければならなか

ったので」

「どっちも同じですよ。

【神隠し】まで使って…。

一体どうしたんですか、主君？」

【神隠し】？

山とかで行方不明になるっていう？

分からない単語だらけだ…。

本当に怪異って何なんなんだ。

人間じゃないっていうのは確かだけれど

全ての原則を無視してるよ…。

魁は、かけていた眼鏡を上へと放り投げると、次の瞬間

赤い液体が宙を舞っていた。

そして、冒頭に至る。

一体何故、魁がこのような行為に出たのか。

何故、朱利が殺されなければならないのか。

目の前で起こっている【現実】についていけない。

いや、ついていける筈がない。

全てが日常からかけ離れ過ぎているのだから。

私は、動けずにただその光景を見つめるしかなかった。

決して貫通するはずの無い腕が朱利の身体を釘刺しにしている、彼は、吐血した。

魁がその腕を引き抜くと、グシャリとその場に朱利が重力に逆らうことなく倒れる。

それを汚物でも見るかのように見下し、腕から血を滴らせているのは紛れもなく魁だった。

何故こうなっているのか。

何故魁が朱利を殺そうとしているのか。

私には一切理解できなかった。

一体朱利が何をしたというのだろうか？

彼は魁が命令した通り、私の護衛を務めたのだから、寧ろ賞賛されるべきである筈。

なのに、魁は問答無用で何かの力を使って私達を屋上へと連れて来たかと思えば朱利に【死ね】と冷たく言い放った。

何も悪い事も間違ったこともしない朱利に対して何故このような行動に出るのか、何故いとも簡単に命を奪えるのか私には何一つ理解できなかった。

「しゅ、くん…

お、れ：何か、しくじりましたっけ？」

「いいえ、護衛は十分しましたね。
御苦労さまです。

しかし、私の菜春様に触れるのを許した覚えは一切ありませんよ？」

触れた？

アノ頬に触れた事を指しているのだろうか？

一体全体どうやってそのことを耳に入れたのだろうか？

それ以前に触れたくらいで何故ここまで憤る必要があるの？

触れたくらいで

何故朱利が死なねばならないの？

「す、みません：。

許して：は、くれなさそうですね」

「当たり前です。

出過ぎた真似ばかりして：。

愛しい菜春様にお前の汚れた手が触れたと思うだけで虫唾が走りま
す」

心底嫌悪しているかのように血が出ている腹を押さえ、痛みに耐え
ながらも話す朱利に向かって吐き捨てるように話す。

何故、魁はここまで私に執着するのだろうか？

私は覚えていない。

私が知っているのは、契約を交わした時ただ彼に命令口調で生かせ

と言った事だけ。
それだけで人を

ここまで愛せるものだろうか？

「殺すんですか…俺、を？」

「お前の代わりは、いくらでも居ますからね。
次は【烏天狗】にでも頼みましょうか。

御苦労さまです、お前の妖力は美味しく頂いておきますから」

不気味に笑う魁。

それに対して、諦めた顔をして笑う朱利。

何故、笑うの？

死ぬというのに、何故笑えるの？

何故そんなにいとも簡単に命を奪えるの？

魁が腕を振り上げた時私の身体は動いていた。

「…菜春、様？」

「辞めて、魁。

朱利は、何も悪くない」

「な、っ…さん」

朱利の前に立ちはだかる私。

魁は、寸でのところで赤く染まった腕を止めていた。

「貴女に触れただけで死罪に値します」

「じゃあ、魁はどうなの？」

貴方だって私に触れたじゃない」

「それは私が菜春様の【僕】だからです。

私は、許せない…。

私以外の生命体が貴女に触れるのが…絶対に」

全身鳥肌が立った。

初めて私は、魁の【怪異】としての部分を垣間見た。

姿・形は人間なのに、彼を取り巻く空気は人間が纏うものではない。

殺す理由が狂っている。狂わせたのは、私？

私の為に誰かが死ぬなんて絶対に嫌だ。

「辞めて、魁。

私には私の所為で誰かが死ぬのは耐えられない。

何より…とても、悲しい」

「こんな奴の為に貴女が悲しむ必要はありませんよ」

「魁は分かっている。」

命は、そんなに簡単に奪っていいものではない」

「コイツの代わりは、いくらでもいるのです。
ゴキブリと同じです。
いくらでも湧いて出てくる」

ああ、魁にとって朱利の命は、虫のように軽いのか。
じゃあ…

「じゃあ、魁にとって私の命も同じなの？」

魁が目丸くさせた。
それまで射抜くような視線とは打って変わり、私の前で見せる
へと変貌した。【魁】

「そんなわけありません！！
貴女の代わりなんてある筈がない！！
貴女は私の唯一無二の主です私だけの【主】なんですっ！！」

身を翻して必死に訴える魁。
その姿は、先刻朱利を殺そうとしていた者と同一人物とはとても思
えない。

何故、そこまで私に執着するの？
私が【主】だから？

何故愛されることにそこまでこだわる必要があるの？

何故【私】なの？

「魁、貴方が私に対して思っていることは、朱利にも当てはまるの」

「…おっしゃる意味が私めには理解出来かねません」

何百年も生きてきている彼。

私の想像を絶するほど長い時を彼は生き続けて来た。

だから、きっと彼は沢山経験してきた。

痛いことも。

辛いことも。

苦しい事も。

沢山の負の感情を。

だから、きっと彼は忘れてしまったのかもしれない。

不老不死に近い、人外の力を持つ【怪異】の頂点に君臨していた彼。その名を得るのにどれだけの犠牲を払いどれだけ血を流し血を浴びたことだろうか？

平和で平凡な日常を送っていたこの私には、想像してもそれは現実とはかけ離れているものだと思う。

躊躇なく朱利を殺そうとする彼。

きっと沢山裏切られたりして傷ついた事もあったのだろう。失ったものも沢山あったのだろう。

だから簡単に殺せてしまう。

何かに恐れている。

恐れているが故、彼はこのような行動に出る。

【愛して下さい】

そう懇願する彼の姿を見た時表情はとても穏やかだったが、目はとて必死だった。

彼は飢えている。

【愛】や【平和】を。

信頼出来る【何か】を私に。

私しか縋れない。

理由は分からないけれど、それが故、

彼は何かに怯えている。

「魁、貴方は何を恐れているの？

触れたくらいで何故朱利を、命を簡単に奪おうとするの？」

「私は：貴女が離れるのが怖い。

朱利に取られてしまうのが恐ろしいのです。

不安で、不安で仕方がない。

いっそのこと永遠に私の腕の中に閉じ込めて置きたいほど、私は貴方を失うのがとてもなく恐ろしい」

ああ、そうか。

この人は【寂しい】のだ。

【主】である私を愛しているとそう何度も何度も言うのは、愛してほしいという彼の願い。

安心させてほしい。

自分だけを見てほしい。

異常なほど私に依存している彼。

顔は今にも泣きだしそうで、本当に何百年も生き、孤高な存在であったとはとても思えないほど、その姿はとても弱々しい。

「魁、よく聞いてね」

朱利の様子をチラリと見てまた魁へと視線を映す。

大丈夫、朱利は苦しそうにしながらもまだ息はしている。

「私は、貴方に誰も殺して欲しくない。

命は【代え】が効かないの。

貴方が私に言った通りの事は、他の生物にも当てはまる。

もちろん、朱利にも当てはまるのよ」

黙って私の言葉に耳を傾ける魁と朱利。
その表情からは何も感じ取れない。

「私の所為で誰かが死ぬのは嫌。
朱利は、私の護衛をしてくれた。
触れるくらいでそこまで怒るのは魁、おかしいわよ？」

「おかしくなんてありません。
私は：他者に貴女を汚されたくない」

他人は黴菌か何かか！
思わず心の中でツツコミを入れる。
それくらいで汚されるて：私は、病人ですか？
思わず呆れてしまって大きいため息をつく。

「それくらいで汚されないよ。
重点はそこじゃない。
貴方が簡単に朱利を殺そうとしたり命を奪う点にあるの」

「何故です？
邪魔者は排除するのが一番効率が宜しいですし、安全も確保されま
す」

「朱利は少なくとも害は無いよ。」

私をずっと護衛してたし、お腹空いてるのに我慢してくれたくらいなもの」

「…それが気に食わないんです」

「はい？」

憎々しげに朱利を見て魁は、やっと一連の行動の動機を語りだした。

「菜春様から手を繋がれて…共に食事をし、共に時を過ごす。私よりずっと過ごす時間が長い。

それに加えて触れるなんて気がおかしくなりそうでしたよ。その時に殺したくなりましたが、放課後までわざわざ我慢したのです。

貴方に触れるのは私だけでいい」

：ちよい、待て。

もしかして、魁…。

【私から】手を繋いだ事を怒ってる？

しかも、その【最初】が自分じゃなくて朱利だったから？
時間を過ごすのが朱利の方が長いから？

いや、そりゃ教師と生徒だったら生徒の方が過ごす時間長いでしょ。
そんなの考えればすぐ分かることよ。

魁が朱利を殺そうまでして怒った原因は…

「魁、朱利に嫉妬したわけ？
私が朱利の手引いて購買行ったから」

気にも止めて無かった。

弥鶴の手を引くノリで朱利の手を引いただけだったから。

だが、目の前に居る魁はぐっと押し黙り、それが肯定を意味していると理解するのには時間はかからなかった。

嫉妬で朱利殺すって：まだ会って2回目の小娘にここまで執着するのか【僕】とやらは。

もう呆れてものも言えない。

「魁、とりあえず朱利の怪我治してあげて。
そうじゃないと、口もう一生効かないよ」

「：仕方がありませんね」

心底嫌そうに朱利を見下す魁。

朱利は、私と魁とのやりとりを苦しげに息をしながら黙って聞いていた。

出血の量が酷い。

腕が貫通したのだから当たり前といえば当たり前。
生きている事自体が奇跡のようなものだ。

それが人間では無い【怪異】というもののなのか。
これくらいでは死なないとそういうものなのか。

「化け狐、お前は一応七本尾を携えているのですからそれくらいの傷、自分で癒せるでしょう？」

「ははは、そう見えますか？
だったら今ごろ、ピンピンして立って飛び回ってますよ」

息は落ち着いているものの脂汗が額から滑り落ちている。
そりゃ痛いだろうし、自己回復能力がそこまで高いわけがない。

人間だったら即死だ。

大きな溜息をつくと、手を振り腕に付いていた朱利の血を全て払う。
ビシヤリと血が床にはねる音がした。

本来ならば幾分か残る筈の血は、魁の腕には跡形も無くまるで先程の事は嘘かのように、血は彼の腕から消えていた。

「仕方がないですね…。

まあ、菜春様の願いですし私も少々やりすぎましたね。

特別に私の妖力を分けてあげましょう。

…【器】が壊れなければいいですけど」

ガリっと人差し指を噛み魁の足元まで広がっている朱利の血の海へと

自分の血を数滴垂らした。

スローモーションかのように、世界が無音だったかのように、ピチヤンと音が響く。
そして次の瞬間。

暴風が襲った。

驚きのあまり目を瞑る私。

そんな私を暴風から守るようにすぐさま私を覆うように魁が抱きしめた。

「やはり、少し多すぎたみたいですね。

妖力が暴走してしまっている…化け狐が耐えられますでしょうかねー」

「い、一体何をしたの、魁!？」

「回復能力を高めるため、私の妖力を直接血で分けたのですよ。

貴女を山で救った際も血を直接混ぜ合わせたわけではありませんが私の血を吞ませましたし」

あんな数滴の血の【妖力】とやらであそこまで普通なる!?!
暴走って…

一体、魁の力はどれ程のものなのだろう？

ひやりと背筋に悪寒が走る。

私を抱きしめ、【僕】と自ら名乗り出た自称、怪異の頂点に君臨していた彼。

なんの変哲もない女子高生の私に一生傍に居ると豪語した彼。

…前途多難な事には間違いない。

まだ出会って半日も経過していないのにすでに魁は殺しかけたし、現在進行形で魁の臣下にあたる朱利は、妖力を分け与えられ過ぎて力が大暴走中だ。

「しゅ、朱利は大丈夫なの！？」

「さあ？化け狐次第でしょう。

あやつに私の妖力を受け止めるだけの實力があれば、ある程度力も得られることでしょうけれど…少し乱暴かつ突然でしたし、若いあの子には少し酷でしたね」

まるで他人事のように話す魁。

朱利の苦しそうな声が聞こえる。

そして、声が聞こえなくなると

風がやんだ。

その先に立っていたのは、金色に輝く髪に
狐の耳と九本の尾を生やし赤い瞳をした美青年が立っていた。

だ、誰？

「おや、無事でしたか。
妖力増量のおまけつき。

おめでとうございます、化け狐。

いや…【九尾】と呼ぶべきですかね？」

「まったくですよ、主君。

マジ消えるかと思った…」

「本気でしたからね」

「さりとて恐ろしい事言わないでくださいよ」

ケラケラと笑う金髪で妖美な青年。

何処かで見たことがある笑顔。

笑い方。

も、しや…

「え、朱利？」

「あ、なんですか菜春さん」

嘘だああっ！！

160cm台だったであろう身長が一気に170cm台に！？

童顔だった顔が一気にシュツとしたなんか、キリツとした狐顔美青年に…。

何この劇的ビフォーアフター。

成長期にしても程度というものがあるだろう。

「ごめん、朱利。

何故、髪が金髪に？

そして、何故耳？

獣人化しちゃってるのは一体何故？

ウアツツ・ゴーインオン？」

「…主君あの菜春さん完璧に混乱してますよ？」

「お前の姿が以前と違うからでしょう。

菜春様、落ち着いて下さい。

とりあえず、残念ながら朱利は、生きてますよ」

「主君：それイジメですか？」

「イジメどころか憎悪って所ですよ」

恐ろしい言葉が聞こえてきた。
現実逃避したい。

いや、むしろ現実を返してほしい。

私の日常を返せ！！

1日でこんな珍現象を多々みせられて私の頭はパンク寸前。

うん、とりあえず目の前に居る金髪赤眼の青年は朱利と分かった。

そういえば、朱利を【化け狐】から【九尾】って呼び方を変えたけど…

「ねえ、朱利。

今の朱利は、前の朱利とどう違うの？

何故いきなり成長？

成長期だとしても早すぎだよ」

「俺を人間と一緒にしないでよ…俺ら【怪異】と呼ばれる妖怪は、人間と違って時と共に外見は変わらない。

変わるのは…力を得た場合だよ。

うーん、簡単にいえば、レベルアップしたら、成長するって感じ」

「えーと、つまり朱利は、魁から妖力分けて貰って、力を得たおかげで成長したと」

「そういうことですよ。

さすが菜春様です頭の回転がお早い。

まあ、死ぬ場合もあるんですけどね」

そういえば、さっきもそんな事を言っていた気が…

「ホントですよ！」

最近妖力酷使してたから空気があったから
何とか生き残れましたけど：普通一氣にあんなに妖力流し込まれた
ら、【器】が耐えきれずに死んでましたよ」

「ごめん、【器】って何？」

「菜春様、【器】とは妖力を貯める容量制限みたいなものです。

それは、肉体とどうかしていて私達、怪異は【器】を持つことによ
って存在を成し得ています。

それが壊れてしまえばこの世から存在が消えてしまう。

つまり、それが我々怪異の【死】です」

「【器】は、それなりに生きていれば大きくなるし、成長する。

だけど、その速度は生まれつきのものだし、そのほかの方法だと…」

「黙れ九尾。

それ以上言ったら：分かってますよね？」

他の方法？

一体何なのだろう？

だけど決していい方法では無いのだろう。

空気を読んだ私は、追及せずに次の質問に移った。

「えっと、あと妖力ってどうやって2人共貯めてるの？私達人間みたいに食べたり寝たりすれば得られるもの？」

「まあ、本当に微量ではありますが可能です」

「じゃあ、本来ならばどうやるの？」

「他の【怪異】の血肉を頂いたりまあ、人間だったりするね」

「…っ、九尾！！！」

一喝する魁。

だけど、朱利の言葉はしっかりと私の耳に届いた。

人間の…血肉？

つまり、彼らは生きるために人間を喰らうというの？

「ねえ、朱利。

妖力を使いきっちゃったらどうなっちゃうの？」

「そりゃ、死ぬよ。

だって、力が無いって事なんだから」

ああ、だとすれば彼らは生きるために…

「じゃあ、二人は私を食べるの？」

私を…人間を。

朱利は、妖力を労費したと言った。

人間へと姿を変えるのに、毎回使うのだと思う。

魁から分けて貰って今回は何とかなったといえど魁にもきつと限度がある。

だから、いつか…

人間を食べるのだろうか？

「絶対にありえませんよ、菜春様」

魁は真剣な瞳で私に言った。

その瞳は、迷い無く何の躊躇無く言った。

「大丈夫です。」

絶対に貴女に手をかけるなんてありません。

それに、変化くらいの妖力なんて食べればすぐに元に戻ります。

妖力は、他にも自然から【気】を分けて頂くことで養えますし、自然食を頂ければ平気です。

ねえ…九尾？」

「そ、そうですね！！」

だから俺らが人間食べるっていうのはまず無いから安心して!!
それに九尾になった今、変化くらい簡単にできるし、俺もとは狐だ
から稲荷で十分!!」

過去に起こってしまった事はもう取り返しが効かない。

だから私は彼らを咎める気は無い。

私達人間も生きるために他の動物を食べているのだから言う資格な
ど無い。

この世は弱肉強食なのだから。

「朱利、九尾になったら何か凄いの?」

「…一応、狐全般操れるくらいになるし、化け狐の中じゃトップに
なったよ。」

怪異の中でも上の方だしさ」

「じゃ、かなりパワーアップしたんだ!
おめでとー!」

「あ、ありがとう」

「まあ、私から見たらまだまだですけどね」

「主君と比べたら全員そうですって…」

苦笑する朱利。

見た目は違えど性格はそのまま。

「外見変わったし、一気に成長しちゃったけど…明日から授業大丈夫なの、朱利？」

「あ、大丈夫大丈夫。

九尾になったら年齢とかも自由自在だし。
さっきの姿にも戻れるよ」

「さっさと戻れ九尾。

耳も尻尾もそのままだと、とても菜春様の自宅へは帰れませんよ」

「あ、そうですね。

じゃ、外見変えます」

そういうと、さあと風が吹き先刻まで居た茶色くて美少年の朱利が居た。

さっきまでの金髪美青年は、ちよいとツボだった。

なんか、色気が…ね。

尋常じゃなかった、うん。

普通に話したけど

心臓やばかったです。

「では、帰りますか」

「え、家まで送ってくれるの？
そういえば、魁と朱利住む場所は？」

「菜春様のご自宅ですが」

…はい？

今ちよつと聞き捨てならない凄いセリフが…

「え、何故私の家？

っていうか、無理でしょ普通に。

スペース無いし。

そもそも家族と面識ないでしょ！？」

「さあ、帰りましょうか菜春様」

「俺、帰ったらお風呂入りたいなー」

「え、スルー！？」

完璧に私の言葉を見殺して屋上を後にする二名。
私が立ちすくんでいると、二人は振り返って

「菜春様、ご心配なさらずに。」

早く帰宅致しましょう。

今日は色々あってお疲れでしょうし」

「菜春さーん、早くかえろー」

腕を頭に組む朱利に私に手を差し伸べる魁。

家に帰るのが少々恐ろしい。

どんな非日常がこれから待っているのか

不安を抱きながら私は魁の手を取り

帰路についたのだった。

変貌

「ごちそうさまでしたー。

菜春さんのお母さんってお料理上手ですよねー!!

俺、またオムライス食べてみたい♪」

「うふふ、朱利君の為ならおばさん張り切っちゃうわー!」

「本当に美味でございました。

林さん、ありがとうございます」

「いいのよー。

ああ、私もあと20歳若かったら山上先生とお付き合いたかったわ」

「光栄です。

でも、旦那様が悲しみますよ?」

…何故違和感を持たない、母よッ!!

心の中で盛大に叫ぶ私。

現在、母・朱利・魁・私の4人で夕食を済ませた所である。

知っているかのような口ぶり。

私だけ知らなかったのか!?

いや、そんな筈は無い。

そもそも我が家には、4人分の食器しか置いて無かった筈。

なのに、何故朱利や魁専用と言わんばかりの食器やら、歯ブラシやらが置かれているの!？

今朝まで絶対見て無かった。

しかも、テーブルは、今朝より大きくなってるし、椅子の数も2席増えている。

そして、何より：

部屋が2つ増えているんですね。

何このホラー現象。

そんなに広くなかったぞ、我が家は。

そうだ、そもそも違和感があったのは、家に入ってからでは無い。

入る前からバリバリあった。

時は遡ること1時間。

帰路につき我が家がある場所にあるべき家が無かった。

その代わりあったのが：2倍近く広大化した家。

外観も新築よろしくと言った感じで、お庭付きといった贅沢。

都会に庭ってどうよ？

確かに住宅地ではあるけれど、この住宅街は、人気だ。

だから、無論そんな大きな家を建てられるわけも無いしそんな財力を一般家庭である
私の家では自殺行為だ。

住所を見るが、もちろんそれは、我が家の住所ご丁寧に達筆な字で書かれた【林】という私の苗字が刻まれている。

間違いなく私の家だ。

だけど、外観が朝とは違いすぎる。
デカイ…本当にデカイ。
心なしか、近所の家が1つ消えてる。

「菜春様、お入りにならないのですか？
もう秋ですから夜更けになればお体に障りますよ」

「そうだよ、菜春さん。
俺、疲れちゃったから寝たい…」

…やはり、私の家らしい。
10年住み続けて来た家。
その外観を見間違えるわけがない。
それほどにまで変貌を遂げている。

「…ねえ、魁」

「何でしょうか、菜春様」

「…家の外観が全く違うのは私の気の所為？
今、私…白昼夢にうなされてる？」

「いえ、菜春様。

気の所為ではありませんし、間違いなく菜春様は正気であられますよ」

だれかこの現象を説明してください。
有名な科学者や物理学者を依頼してもきつとこの現象を解き明かす事は絶対的に無理だろうな…。

「じゃあ、何でこんなに外観が違うの？」

大体予想出来るが一応確認の為彼に聞く。
きつと答えは、彼ら【怪異】の成せるものだとなりながら。

「ちょっと部下に変えさせました。
そう言ったこと専門の【妖】がいるので」

「ご近所さんのお宅が1件無いんだけど…」

「大丈夫です。
きつと何処かで生きてますから」

恐ろしい答えに思わず押し黙る私。

これ以上聞いてはいけないと本能が告げている。

無理やりこれは【怪異】である彼らの力なのだと言わせた、どうやって自分の両親に

この2人の事を説明するか頭を悩ませながら、門を開いた。

ハハハ、門なんて初めて開けたけどね。

鍵を取り出し差し込み恐る恐るドアノブを回す。

まるで不法侵入者の気分だ。

自分の家なのに…ね。

玄関に入ってまず思ったのはとにかく、広いという事だった。

無駄に広い。

広すぎるっていう位広い。

今まで窮屈に感じていた廊下は、広々としていたし、何より急だった階段は、滑らかになっていたし、靴箱の大きさも倍になっていた、収納スペースやら、家具もランクアップしていた。
ごめんなさい、

何処の金持ちの家ですか!?

テレビも大型のものに変わっていた。

しかも壁に掛ける超薄型タイプ。

大手の人気メーカーのものだ。

こんな最新機種、CM以外で初めて見ました。

実物初めてです。

食器も増え、ソファも大きくなり、リビングに、ダイニング、部屋の数やキッチンの広さ、ぶっちゃけて言うと、

家の構造がまるっきり変わっていた。

絶対親が帰ってきたらパニックを起こすか、気絶するかのどちらかだ。

いくらなんでも

変わりすぎだって…

あまりの変貌ぶりに声が出ない。

シャワールームなんて何処のホテルですか？

風呂場一つでいいでしょ？

トイレは1階にしか無かったのが、2階にも新たに設置されていた。そして、最大の鬼門に差し掛かった。

自分の部屋だ。

恐る恐る部屋を開ける。

どうか、どうかこの部屋だけはっ！！

そう思ってドアを開けると…

見事に私の希望は打ち砕かれた。

何処のお嬢様の部屋だ。

布団生活を送っていた私。

そこには、私好みの柄のシーツの
私には大きいベッドがあった。

天幕付きって何処の御姫様ですか？

4畳半しか無かった自分の部屋は、8畳という巨大なスペースにな
っていた。

違和感抜群だ。

鏡身台なんておいてあるしっというか、勉強机広い！

本棚なんていうものが！！

クローゼットなんて…

眩暈がしてきた。

はっ、クローゼットの中身は!?

せめて下着等の乙女の類は何も変わっていて欲しくない。
寧ろ何も変わっていて欲しくない。

悉く裏切られてきた自分の希望を全てここに賭ける!!!

目を瞑って思い切ってクローゼットを

開いた。

恐る恐る目を開くと。

そこにあったのは…

自分の見なれた服達だった。

ここまで神様に感謝したのは初めてかもしれない。

ありがとう、本当に。

だけどね、

心なしか少し増えてる気がするよ。

この際、全て変わっていなければいい。

もう何もかもが変わっていて、正直落ち着かなかったのだから、愛
用していたパジャマや、部屋着等があるだけでも嬉しい。

「菜春様、気に入っていただけましたか？」

全ての根源が笑顔で私に問いかける。

責めて一言相談してほしかったが、もうなってしまったものは仕方がないし、気に入らないと言ったら：

どう改築されるか恐ろしい。

引きつった笑みを浮かべながら、
とりあえず、頷く。

そうすると満足そうに、嬉しそうに笑うものだから、仕様が無いなと、苦笑した。

ただ、唯一の問題が残っていた。

それは最大の難関とも呼ぶべき、両親にどうやってこの珍現象を説明し、納得させるかだ。

そもそも魁や朱利の正体明かさなきゃだし、
モノを

どう納得させるか…。

気が重い…。

「顔色が宜しくありませんが、どうなさいましたか、菜春様？
何か不都合な点でもございましたか？
すぐにでも変えさせますが…」

「いやっ、いい！！」

これ以上、何もしないでっ！！」

今でも十分混乱しているというのにこれ以上怪奇現象が起こってしまったらいくら私でも卒倒する。

疑問符を浮かべながらも『そうですか』と納得する魁。

一気に疲れた。

我が家なのに、疲れた。

部屋を後にとすると、見えない部屋が私の部屋の左右に1つずつあった。

私の記憶では、南側には私以外の部屋は存在しなかった筈。増築されたということ…？

「ねえ、魁。

この両脇にある部屋って何？」

「ああ、右が私の部屋で

左が朱利の部屋となっていますよ」

…は？

「え、待って。

いつの間に魁達の部屋が増築されちゃってるの！？」

まさか、このために外観が…家がリフォーム状態になったわけ！？」

にっこりと笑顔を浮かべ頷く魁。

ははは、もうなんというか

どんだけだよ。

どうやってこの状況を説明しよう。

それだけで頭がいっぱいだった私に追い打ちをかけるように

「ただいまあゝ!!」

お母さんの帰宅を知らせる声が家中に鳴り響いた。

固まる私に相反して1階に下りていく怪異2名。

ちよい待て、お前ら私のお母さんと初対面でしょ!?

ど、どうしようっ

なんて説明すれば!?

そんなこんな考えている間に魁と朱利がお母さんにご対面。

一番恐れていた事態がっ!!

お母さんが目を見開く。

そりゃそうだ。

見知らぬ異性が2名家に

上がり込んでいる上、外観も家具も内部設計も何もかもが違うのだ。

驚かない方が無理な話だろう。

「あ、あのね、お母さん。
これには深い事情が…」

「あら、山上さんに朱利君！
お久しぶりね♪
もう引っ越しの作業は終わったの？
慣れない都会の感想はどうかしら？」

さも、顔見知りかのように楽しそうに喋りだすお母さん。
ちよい待て。

初対面じゃないの？
っていうか、家に疑問を持たないの！？

引っ越して何！？

「お久しぶりです、お母様。
お元気そうでなによりです。
引っ越しの方は、元々荷物が少なかった所為かすぐに終わりました。
まだ学校にしか行っていないので都会についての感想は、まだまだ
先になりそうです」

「お婆さん、お久しぶり♪
俺もバッチリ終えたよ！！
学校のクラス、菜春さんと同じになったんだ。
それも、隣同士！！」

「まあ、私が担任を受け持ちましたしね」

「あらまあ、そうなの？」

菜春ちゃんは、勉強が苦手だから山上先生も朱利君も宜しくね♪
自分の家のように寛いでくれて構わないから」

そういうと、母は買い物袋を手にとってキッチンへと向かい、夕飯の支度を始める。

まるで、何事も無く、さも当然のことかのように、見慣れないキッチンに疑問を抱かずいつも通りの早さで夕飯を整えた。

私はというと、頭はパンク状態で、放心しており、ソファーにボーツと座っていたり、夕飯が出来たと呼ばれ、4人で机を囲み、黙々と夕飯を食べた。

そして、冒頭へと至るわけである。

夕飯を終え、2階へと魁と朱利と共に上がる。

「お母様の手料理は大変美味しかったですね。

オムライスという料理は、初めて口に致しましたよ」

「俺もっっ！」

菜春さんの料理上手な理由分かった気がした」

「…朱利？」

それは聞き捨てならない言葉ですね。

いつ何処で貴方は菜春様の手料理を食べたのですか？」

「い、いや、今日の昼休みお弁当を…」

「…やはり殺しておくべきだった」

恐ろしい会話が二人の間で交わされている最中私は頭の中でひたすら考えていた。

結局わからないので、二人を私の拡大化した部屋に招き入れて、質問することにした。

「ねえ、なんで魁や朱利が居る事にお母さんが何の疑問も抱かないのよ？」

そもそも、ごく普通に2人を受け入れていたし…」

「それは私の部下に色々細工して貰いましたからね。

記憶を弄るのに長けている者がいましたね。

その者の力を借りて、お母様の記憶に情報を追加させていただきました」

「ちなみに、それも【怪異】？」

「おっしゃる通りで。

この屋敷の改築は【座敷わらし】に頼みましたよ。

風水的にも中々良物件に変わっているかと…」

座敷わらしって居たんだ…。

っていうか、九尾が居るくらいだしね。

さて、彼らの立場はお母さんの脳内ではどのようなになっているんだろう？

「お母さんの記憶上2人はどういった立場？」

「私は菜春様が田舎の方に住んでいた時、近所に住んでいた青年で、菜春様の学校の教師として上京した際、住む場所を提供して頂いているという立場です」

「俺は、菜春さんの従兄弟設定。
親が急に海外転勤ということで、菜春さんの家にお邪魔することになったって感じ」

・・・なんて王道な。

いや、でも筋は通るわな。

多分記憶も弄って、家の外観などの違和感も無くしたんだろうね。

っていうか、いつの間に記憶いじった？

「一応私、4人家族なんだけど…。
お父さんの方は大丈夫なの？」

「手は回し済みです。
ご心配には及びません。
ただ…」

ただなんだ!?

すぐく気まずそうに眼を逸らす魁。

朱利に視線を移すと彼もまた私から目を逸らす。

「正直におっしやい。

何か…問題起こしたんでしょ」

「い、いえ、問題というか…。

失態というか…」

もごもごと言葉を濁らせる。

全く魁らしくない。

いつもの余裕は何処へ行った。

それほど急な事態なの?

覚悟を決めたのか大きく深呼吸をしたのち

私に大きな爆弾を落下した。

「貴方のお兄様までは…手が回らなかったのですよ。

何せ日本国内にいらっしやらないので…。

でも、大丈夫ですよね?

帰国の目途は立っていないようですし」

一番どうにかしなきゃいけない存在を

見逃しちゃってるよ、この子お!!

私の兄、弥鶴は何度も言うがシスコンだ。

私を溺愛しているが故、あの美貌でありながら彼女が居ない始末だ。絶対問題があるとバレたら、即日本に帰国して、絶対恐ろしい事をするに違いない。

一度、私がTV電話で口を滑らせて男友達の名を出したら即帰国してきて、数日後、学校からその男子は消えていたし…。

一体何したんだ、弥鶴っ！

この2人は怪異であるのは間違いない。

かと言って人外だからといって弥鶴の被害に合わない保証は無い。

IQ300の頭脳を持つ天才の兄だ。

その頭脳を駆使すれば、怪異である2人に勝ってしまいそうだ。

それこそ、現代科学の力を使って。

「まあ、俺にとって所詮菜春さんの兄貴は青二才だし。

まだまだ赤ん坊って感じだよ。

日本に来て騒ぎ出す前に、俺の【眼】を使えば、すぐに記憶を置きかえられるしね」

「朱利の言うとおりです。

菜春様は何も心配しなくても平気ですよ。

お兄様も所詮人間。

私達の足元にも及びませんからね。

軽くあしらって差し上げますよ」

だといいのだけね…。
明日のTV電話に絶対2人が
映らないようにしよう。
そう誓った私だった。

「さて、もう夜も遅いですし今日は色々あってお疲れでしょう。
朱利、お暇しましょう」

「おやすみなさい、菜春さん♪
いい夢を〜っ!!」

そういうと、嵐が過ぎたように二人は部屋から出て行った。
よろよろと立ちあがりベッドに倒れ込む私。
スプリングの軋む音が広い部屋にやけに響いた。

本当に今日は疲れた。

もう明日の事は、明日考えよう。

弥鶴の対策も、今日は考えるのはよそう。

怪異、妖力、僕、契り…。

ありえない事だらけだ。

私の日常は木端微塵に砕け散った。

たった1日で人生なんて180度変わってしまう。

私の歯車は、方向転換してしまった。

これから何が起こるのか。

この忠実な僕と共に一生生きる事になるのだろうか？

私を愛していると囁き、愛するが故に血に染まる【怪異】の隣で？
一日の疲れが押し寄せ瞼が重くなり、視界が狭くなる。

完全に瞳を閉じて夢の世界へと旅立つ直前私の脳裏に魁の言葉が響いた

『貴女の命が尽きるまで貴女の傍に居続けましょう。

貴女に愛を囁き全ての愛を注ぎましょう。

ですから、貴女も私だけを見てください。

ずっとずっと、願わくば

永遠に…』

間章.. 夢の中で

―ベキンッ

フラスコに珍しくヒビが入って割れた。

俺としたことが珍しい。

他の皆も笑いながらお前らしくないと言った。

こんな初歩的なミス、犯すはずが無い。

何か嫌な予感がする。

彼女に何かあったのだろうか？

異国に身を置いている今、愛しい彼女の身を案じることしか出来ない無力な自分に腹が立つ。

あの時もそうだった。

眼を離れたスキにやられた。

あれは全て俺の責任だ。

俺だけの秘密。

俺だけが知っている真実。

愛しい妹である菜春。

愛して止まない。

家族なんていう域は、当の昔に越えてしまった。

この感情は、兄妹愛なんていう安っぽいものではないし、そんなもので終わらせる気は更々ない。

彼女はきつと知らないだろう。

【兄】である自分が抱いている醜く、恐ろしいこの感情を。

彼女の周りに居る異性は全て自分が排除してきた。

この頭脳を駆使して、全てから守って来たつもりだった。

それが俺の存在意義。

それがあいつとの

契約だから。

「おい、弥鶴。

そろそろ帰れー。

きつと疲れ溜まってんだろ。

愛しの妹ちゃんが心配かい？」

茶化す黒人の研究生。

俺より遙か【年下】の男。

ああ、でも外見は年上だ。

そういう風に“設定”されているから。

「あつたりまえだろ！」

俺の妹は、世界で一番可愛くて、愛しいんだからな！」

「いい加減シスコン治せよー。

前もアノいい女振ったんだって？

いい顔してんのに勿体ない…。

俺によこせこの野郎！！」

やりたきゃやる。

俺にはあんな女興味無い。

顔なんて所詮、頭蓋骨に張り付いた皮の造形に過ぎないだろう。

菜春の美しさは違う。

俺は、ずっと彼女を見守って来た。

彼女の家系を見守って来た。

一番近い【兄】という存在に身を置いて、彼女の傍で成長を見て来た。

人間のお偉いさんが何か知らないが、俺と菜春の仲を引き裂いた時は、本気で殺してやろうと思った。

だが、彼女の嬉しそうな誇らしそうな顔を見たら、そうも言えなくて、結局こんな異国の地に踏み入ってしまった。

会えるのは、年に4回。

ずっと傍に居たい。

こんな地位、俺は望んでいない。

俺が望んでいるのは、

お前の傍でしか無いのに。

契約なんて関係ない。

あいつの契約。

家系を見守るという契約。

その契約もあと数週間で終わる。

その時は、お前の前にどんな姿で現れよう？

【兄】としての立場を捨てて、異性としてお前の傍に居続けよう。

愛する菜春…。

愛して止まない、俺の心を離さない大切な人。

十数年抱いてきたこの苦しみからやっとあと少しで解放される…。

失いそうになった時、俺は気が狂いそうになった。

菜春が死んだら、自害しようとすら考えた。

だが、奇跡的に助かった彼女を見て俺は誓った。

どんな手段を使っても彼女を守り抜いて見せると。

「菜春…」

青い空を見上げて彼女を思う。

きつとあちらは、もう夜だろう。

どんな夢を見ているのだろうか？

寂しい思いはしていないだろうか？

彼女は心が優しい子だ。

都会という場所は、機械じみて、生きている心地がしない。

彼女と同じ年頃の子は、皆、何処か荒んでいる。

悪ぶったり、遊んだり、まじめな菜春にはきつと合わないような、そんな馬鹿ばかりだ。

心の優しい彼女のことだから、きっと自分の意見も言わずに笑顔を張り付けて、相手に話しを合わせるのだろう。

俺が傍に居たらそんな思いは絶対にさせないというのに…。

兄妹という関係をこれほどまで恨んだことは無い。

だが、それも後数週間で終わる。

16年も俺は待った。

彼女の隣で笑顔を絶やさず、彼女の為だけに生き続けた。
早くお前を迎えに行きたい。

愛しい俺の【花嫁】。

美しい満月の夜。

初めてお前に恋をした。

そんな夜に迎えに行こう。

遙か昔の契りを果たしたこの俺の褒美を受け取りに。

愛しい菜春。

どうか俺がそこに行くまで願わくばいつものままで…。

俺のことは、その時話そう。

この思いをお前に囁こう。

戸惑うだろう。

怯えるだろうか？

拒絶されるだろうか？

でも、それでもいい。

時間は沢山ある。

少しずつ理解してくればいい。

【あいつ】は好かないが、この出会いを与えたのも紛れもない【あいつ】だ。

それだけは感謝しよう。

彼女と出会わせてくれたあいつに。

その為に俺の百年は奪われたが…。

それに見合う代償だった。

札を言うべきなのだろう。

いつか、墓参りにでも行ってやるか。

パソコンの電源を切り、荷物を持って、外へ出る。

眠い…早く寮に戻ろう。

昼夜逆転の生活。

とても健康にいいとはいえない。

だけど、それでも：

この時間に彼女が寝ている。

その時間に俺も寝ている。

それだけで幸せを感じられる。

どうか、夢の中でもいいから、愛しい【妹】である彼女に、最愛の女である彼女に

会えますように…。

疲労

「おはようございます、菜春様。

本日も良いお天気でございますよ。

朝ごはんは、何が宜しいですか？

和食・洋食、貴女が望むものを私がお作り致します」

乙女の部屋に何故お前が居る。

朝から現実を突きつけられた。

夢だったらよかったのに。

昨日の出来事が全て夢落ちという展開だったら素晴らしい朝だったのに：ッ

ええ、所詮人生そんな甘かないですよね。

完璧【僕】モードスイッチが入っちゃってる魁。

隣には、朱利が補佐するような形で立っている。

私は何処のご令嬢だ？

「いや、あの：お母さんは？」

「お母様は、もうお出かけになりましたよ。

私も生憎、教師の身分なので早めに学校に行かなければなりません

が、朱利に護衛させるので大丈夫です。
ねえ、朱利？」

「えっ、あ、は、はいっ!!」

「菜春様にかすり傷1つ付けて御覧なさい明日の光は見えないもの
と思いなさい」

…こええええっ!!

っていうか、朱利震えちゃってるよ!

九尾になってもやっぱり怖いよね、中身は相変わらず朱利のままなのねっ。

ちよっとお姉さん安心したわ。

って、私の方が遥か年下か。

「ごめん、今何時？」

「午前7時13分24秒でございます」

「…魁、貴方遅刻大丈夫？」

「私は、7時45分までに着けばいいので全く問題はございませんよ。

菜春様のそのお優しい気遣いには本当に心が洗われます。

ああ、これが恋の力というモノなのでしょうか…」

ほう…と、溜息をついて
惚ける魁。

完璧自分の世界に旅立っているわね。

一応復唱するけど、私の家から学校まで30分かかるんだけど…。
でも怪異だから関係ないのか。
前日も、数分で着いたし…。
なんて美味しい設定だよ。

「菜春様が出る時間帯に私も一緒にさせていただきますよ。
しかしながら、私は少しばかり飛ばしていくので出る時だけです
けれど」

文字通り貴方は飛ぶからね、魁。
屋根の上？っていうか空？
ほぼ空中に居たしね、前日も。

それにしても胸騒ぎがする。
何か…凄く大事な事を忘れているような…

―プルルルッ

…これだああっ！！
急いでアラーム時計を見ると時刻は、相変わらずピッタリ午前7時
15分。

パジャマ姿の私。

ヤバイ、制服じゃないのにつ。

ああ、でも出ないと後が怖いっ!!

前回出られなかった時、奴は半狂乱になって日本に今すぐ帰国すると研究ほっぽりだして行こうとしたらしい。

幸い、必死に同僚の方々が引きとめたみたいだけど。

またあんな事が起こるのは、是が非とも回避したい。もう、パジャマとかどうでもいい。

乙女の恥？知らん!!

人様に迷惑をかける方がよっぽど恥ずかしい!

魁と朱利を華麗にスルーし、ベッドから飛び起きると、全力ダッシュで1階へと降りて私は即座にTV電話に出た。

その間、30秒弱。

「ぜえぜえ、お、おは、よ、う」

『おはよう菜春♪』

今日は、何だか息が荒いよ?

何それ、俺誘ってる?』

「寝言は寝てから言うものだよ、弥鶴」

『ひどっ!心配してんのに!!』

先程の発言の中で、心配しているという気遣いの言葉の要素は何処にもなかったと思うよ。

寧ろセクハラ発言が目立っていたぞ。

『しかも、今日はパジャマじゃないか。』

肌蹴てるぞ、そんな姿俺以外に見せたら絶対にダメだからなっ!!』

「このド変態ッ!!」

アンタの電話出る為に2階からダッシュで駆け下りて来たのよっ!!」

『そ、そんなに俺と話したかったのかっ!!!!
お兄ちゃん凄い感激してるぞ、今っ!!!!』

ダメだ、この人。

会話のキャッチボール出来て無い。

都合のいいようにしか捕えねー。

『なんか部屋の雰囲気違うけど、昨日家具とかの場所変えたりしたの?』

IQ300の実力ここで発揮!!!
何この尋常じゃない記憶力!?

帰国したの何か月前でしたっけ？

というか、TV電話のカメラからほとんど部屋の中見えないよね！？

一番聞かれたくない事聞かれたよっ。

変な所で鋭い…。

「そ、そうなんだっ！

ちよっと扉壊れかけてたから新しい家具購入して、昨日設置したの
！」

『ふうん、母さんからは何も連絡無かったけど』

「た、多分忙しかったんだよ！

ほら、今日なんて私が起きる前に行っちゃったし！」

『それは菜春が寝坊したからなんじゃ…。

そういえば、時間大丈夫か？

早く用意しないと間に合わないんじゃないか？』

「そ、そうだね！

急いで着替えなきゃいけないから今日は短めでごめん！
じゃっ！！」

即座に受話器を置いて切る。

あ、危なかった…。

冷や汗ものだった。

「菜春様、今のがお兄様ですか？」

見てたのかああっ！？

いつの間に背後に！？

気配感じなかったよっ！？

…み、弥鶴見えてたかな？

丁度私の背後に居たのなら見えて無いと思うけど…。

カメラが魁を捕えて居ないことを祈ろう。

「そうだよ、弥鶴っていうの。

っていうか、私早く制服に着替えなきゃ！」

「そうですね、ではお召し物を：」

そう言って、ごく自然にさも当然かのように私のパジャマのボタンをはずし始めた。

その動作があまりにも自然だったのでされるがままになっていたのだが第3ボタンにまで差し掛かったところで我に返った。

「ななな、何してんのよ魁！？」

「何と申しまして…お着替えですが」

「明らかに私の服脱がそうとしたよね!？」

「でなければ、お召し物を変えることができないではありませんか」

「いや、そりゃそうだけど、何ゆえ魁が私を脱がす必要性が!？」

「主の着替えを手伝うのが私の勤めでもございますから」

いつの時代だあつ!!

っていうか、貴方性別【男】でしょ!？

察して!! 色んな意味で察して!!

そして、ココ日本。

ジャパン、OK?

イギリスの執事もここまでしません。

「大丈夫! 自分で着替えます!!

というか、異性の前で着替えられるか!

嫁入り前の乙女の身体をさらけ出せるほどふしだらな女じゃありません!!」

「おや、私を異性として捕えて下さっているんですか?

光栄ですね…ふふふ」

ダメだ、ポイントずれてるこの人。

いや、怪異というべきなのか?

美形なのに、何百年も生きてるのに何故そのあたり察せない!？

私の話しの中で変な所を抜粋しないでください!!

「と、とにかく着替えて来るから絶対部屋の中に入らないでよっ!!
そしたら、魁と一生口利かないから」

「クスクス、承知致しました。
朝食は何になりますか？」

「もう、何でもいいよ!
ちゃちゃつと食べられるものでお願い!」

「仰せのままに、菜春様」

私の右手を手にとるとまるで騎士のように跪き手の甲にキスを落と
した。

流れるような動作に言葉を失いポカンと見っともなく茫然としてい
ると、魁は私を見上げて悪戯に成功した子供のようにクスリと笑う。

か、からかわれたっ!!

顔に熱が集中するのを感じ、絶対真っ赤になっているであろう自分
の顔を背けるように2階の自分の部屋へと踵を返した。

制服に着替え、髪を整えると幾分か心拍数と熱が収まり、何とか平
静さを取り戻した。

お前は王子かつ！！

本当に何処で覚えて来たのだろうか？

あんなの、今時イギリス紳士でも絶対にやらないだろう…。

いや、社交界とかならありえるのか…？

執事は絶対にやらない。

あれはもはや、異世界ファンタジーの姫と騎士の域に達している。
常識というのを叩きこまないとなあ。

これからの事を思うと頭が痛くなる。

重い足を引きずりながら、鞆を片手に階段を下りると食欲をそそる
香ばしい香りが私の鼻を刺激した。

リビングのドアを開くと、それは更に強くなり、そこには、エプロン姿の魁が居た。

エプロンが似合う男ってどうよ…。

シュルリとエプロンを外し、私から鞆を受け取る。

そして、右手を取って私をダイニングテーブルへとエスコート。

家なのに、まるで家じゃないみたいだ。

何処かの高級レストランのウェイターさんか、大げさかもしれない
けれど王宮の執事さんか何かに席へ案内されている気分。

そのせいか、私の心拍数は通常の2倍近くの早さになっていた。

椅子を引いて、私に座るように促す魁。

その間に朱利がアンティーク調なお皿を手には香りの根源である料理

を運んで私の目の前へと美しい動作で置いた。

「簡単に食べられる物とおっしゃられたので、スコーンをお作り致しました。

ミルクの変わりに豆乳を使ったのでカロリーは控えめでたんぱく質も取れます。

トッピングは、生クリーム、キャラメル、ジャム、メープルシロップ、はちみつ等がございますので、好きなように召し上がって下さい」

：何だ、この高級感タップリの朝食は。

朝からスコーンで：でも、栄養も考えられていて前菜らしきサラダが小さな器に添えられている。

美味しそうだけど、何処でこんな高級食材を手に入れたのだろうか？
そもそも料理したの誰！？

「え、えっと、料理したの、誰かな？」

「あ、それ俺だよ」

なんと予想外な事に朱利が料理担当だった。

狐なのに、洋食作れちゃうのとか、色々ツツコミ所が満載だ。

先程まで九尾の金髪、長身の青年姿だったのが今は、通学間近というだけあって、茶髪の少年の姿に変わっていた。

毎日これからこんな風になるのかとそう思ったら自分の精神的な負

担に思わずため息をついた。

ん？朝食を朱利が作ったのなら何故、魁がエプロンを！？

「お弁当をお作りしておいたので、鞆に入れておきますね。

朱利、お前の分も作っておきましたよ。

感謝しなさい、崇めなさい」

魁の俺様な部分を垣間見た気がした。

っていうか、お弁当魁作ったんだ。

いつもは私が一番早起きして作るからなく。

なんだか、オカンだよ、魁。

とりあえず、食べないと学校に遅刻してしまう。

時計の針は、すでに7時30分を超えていた。

頂きますと一声かけて、食事に手をつけようとしてふと、その手を止めた。

2人がじっと私を見ている。

テーブルには、6人分の席があるというのに

私一人が座っているという異様な光景。

2人は左右に立っているウェ이터状態だ。

ふと、疑問が頭を過ぎった。

「2人は、もう朝ごはん食べたの？」

「私達の事はお気になさらず…」

「嫌だ、せっかく3人いるのに1人で食事って凄く味気無いものなんだよ？」

ねー、朱利？」

「え、う、うんっ！

確かに一緒に食べた時は、普段1人で食べる時より楽しかった気がする」

まさか話題が自分に振られるとは思っていなかったらしく、ドキマギしながらも、素直に答える。
うん、素直な事はいいことだよ。

「と、いうわけで。

魁も朱利も一緒に朝ごはん食べよ？
もう、フレンチトースト残って無いの？
だったら軽く私がお握り握るけど」

「いえ、そんなお手を煩わせる訳には…」

「いいのっ！？俺、お腹空いた」

魁が朱利を睨む。

欲求に忠実なあたり結構可愛いものだ。

「了解っ！！

素直な朱利の為に稲荷ずしをお作りしましょ。
魁も、もちろん食べるよね？
それとも、私が作るものなんて食べれない？」

「とんでもございせんっ！！
でも：お時間は宜しいんですか？
急いで食べなければならりますが：」

「そんなの平気平気っ！！
じゃ、ちゃちゃって作るから2人とも自分のお皿用意して待つてな
さい」

急いでキッチンに行って稲荷ずしの稲荷のパッケージを開く。
ご飯にじゃことひじきとゴマをあえて稲荷の中にしきつめて、あっ
という間に完成。
10個も作れば十分でしょ。

「はい、お待たせいたしました。
結構大きめに作ったから5個ずつね」

そう言って二人の前に稲荷ずしが乗った皿を並べる。
朱利は凄く嬉しそうにお礼を述べた。
きつと尻尾があったなら左右に勢いよく振られていたに違いない。

「では、皆さん。
ご一緒にいただきますっ！」

「いただきます」

少し覚めてしまった豆乳スコーン。

生クリームにキャラメルソースを絡めて一口食べれば、パティシエ顔負けの上品な味わいが口に広がった。

朝からなんて贅沢なんだろうっ！

朱利ってこういうの作れるんだ。

本当に器用というか、なんというか。

女として色々と見習う部分がある。

料理出来る男の人っていいよね。

お菓子作りとか…なんか可愛い。

にまにましながら朱利を見つめていると私の視線に気づいたのか、勢いよく食べていた手を止めてキョトンと私を見つめる。

その口端には、ご飯粒がついていた。

なんか、朱利って弟みたい。

「朱利、ちょっとこっちに顔近付けて？」

「…？ うん、はい」

テーブルから身を乗り出して顔を近づけてくる朱利。

こうやってみるとやはり端整な顔立ちをしている。

一気に我が家に美形密度が高まったよ。

ご飯粒を取ってあげると、恥ずかしそうに、あちやくと顔を真っ赤にする朱利。

可愛いなあゝ…。

そう思いながら、米粒を口の中に放り込んだ。

すると、次の瞬間。

空間が絶対零度に包まれました。

「朱利：一体何してるんですか？」

「おおお、俺なにかしましたっ!？」

「自分の手を心臓にでも刺してお聞きなさい？」

「それ遠まわしに俺に自害しろって言ってません？」

「いえ、単刀直入に言ってます。

ああ、もっと分かりやすく言った方がいいですか？

死ね、この変態狐」

一体何が気に食わなかったのか分からないがとりあえず、季節はまだ秋なはずなのに室内は、吹雪に見舞われた遭難者気分である。

というか、魁：色んな意味で口調が変わってるよ？

腹黒？やっぱり腹黒なの、ねえ？

普通にDSですよ、分かります。

「えーと、魁：そろそろ時間だから私、出たいなあ」

ガタガタと震えあがっている朱利があまりにも可哀想だったので助け舟を出した。

何より、私が後ろ姿ながらも魁から発せられる殺気に耐えられなかったのもある。

私がそう一言いうと、魁は、指を鳴らす。

すると、まるで魔法かのように

食器がテーブルから消える。

水道代も時間も節約出来るなんとも便利な能力を怪異というのは持っていてうらやましい限りだ。

「申し訳ございません。

我を忘れて時間を気にも掛けておりませんでした。

：朱利、菜春様の鞆を持ってさしあげなさい」

「了解しました…」

血色を戻した顔で私の鞆と自分の鞆を持つ。

先程の泣き顔は何処へやら涼しい顔に戻っていた。

「では菜春様、申し訳ございませんが私は教師という身分なのでお先に失礼いたします。

朱利：くれぐれも粗相の無いように」

「分かっていますよ。

大体、主君は心配し過ぎなんですよ。

今の時代は戦乱でも無ければ、治安が悪いわけでもないですし…」

「念には念をです。

わずかな油断が命取りになるのですよ。

例えば…」

ヒュッと風の音がすると思うと朱利の頬に傷の一線が出来ていた。
魁はもちろん身動き一つしていない。

朱利はというと、茫然としている。

「ほら、気を抜けば座敷わらしの攻撃すらかわせない。

お前は、九尾なのだから階級的には上の立場に立っているにも関わらずですよ？

姿形すら捕えられなかった…違いますか？」

黙りこむ朱利。

「ざ、座敷わらしって…私も見えませんか？

あたりをキョロキョロと見渡すが座敷わらしらしき人物は居ない。

「ああ、菜春様。

座敷藁しには姿を滅多に見せない恥ずかしがり屋な性格なので、大目に見てやってください。

ですが、キッチンとこの家を守っているのは彼ですから」

「そ、そうなんだ…。
えーと、ありがとね、座敷わらし君」

そういうと、コトンと何処かで音がした。
なんですか、このホラー。

いつから私の家はお化け屋敷と化した。
いや、もうこの【怪異】が

普通に住みついてる時点でそうなの？

もう普通と無縁な気がします。

玄関で靴を穿こうと屈むと、肩を掴まれ魁に止められた。
何故止める？

そう思っていると、魁は私の前で跪き、まるでシンデレラに靴を穿かせる王子様のように、壊れ物を扱うかのように私の足を手にとつて靴を穿かせ始めた。

「ちよっ、何してるの魁!？」

「靴を菜春様に穿かせようと…流石に靴下では外には出られないでしょう?」

「いや、そりゃ当り前だけど、何故魁が私に穿かせる必要性が?靴くらい穿けますが?」

私は3歳児以下ですか？

スニーカーの紐、普通に結べるくらいのレベルありますよ？

「おや、仕える身である人間は主人には靴を穿かせたりするのが普通だと学んだのですが…」

一体教えたの誰だ？

っていうか、何で学んだ！？

何処ぞの執事小説ですか？

ドラマですか？

参考書出版した会社を探そう。

そして、すぐに出版停止させよう。

盛大な溜息を吐いて私は魁を見下ろしてはつきりと言った。

「あのね、魁。

色々しようとしてくれるその心遣いや気配りは有難いんだけど、正直な話、それはかなりズレてる。

私はお嬢様でもない一般ピーポーなんだからそんな召使みたいな事：」

「実質、私めは貴女の僕です。

下僕と呼んでも過言ではありませんよ。

貴女が死ねと命じれば、何の躊躇も無く私は、自害しますし」

「私そんな忠誠心いらないから」

ダメだ、戦国時代かココは。
もしくは、西洋物語の世界か？

21世紀の日本にある平均家庭の一つだよな？

6歳の自分を恨むよ。

とはいえ、あの時そうしなければ私は生きていないわけだ。
だからこれくらいの犠牲は仕方無い。
朝からこんなに疲れるなんて：

一日が終わる頃には死人同然になりそ。

「とにかく魁。

私がおかしてほしいと言わない限り過度に色々やるのは禁止！
これ絶対ね！！」

「…不服ではありますが、ご命令であればそれに従いましょう。
菜春様のお心のままに」

そう言って頭を下げた。

そして立ちあがると振り返りもせず外に出ると、次の瞬間彼の姿はそこには居なかった。

ちょっとキツク言いすぎたかと少し申し訳なく思ったけれど、私の精神的な負担を軽減しなければ、ノイローゼになりそうだったので、

仕方がない。

今度こそ自分で靴を穿く私。

無駄に広い玄関は、2人は余裕で靴をはけるスペースがある。

朱利はすでに穿いて私を待っていた。

「待たせてごめんね、行こっか」

「朝からお疲れ様、菜春さん。

主君は、あんなんだけど菜春さんの為に必死なんだよ。

帰ったら構ってあげて。

じゃないと八つ当たりされて俺が死ぬから」

「…ごめん、わかった。

善処するわ」

お互い苦勞人だということが分かり顔を見合わせ苦笑する。

朝から疲労で死にそうですが、今日も学校がんばります。

私怨

「…菜春さん、これ嫌がらせ？
俺なんかしたっけ？」

下駄箱の前で茫然と立ちすくむ私と朱利。
床には、お決まりの手紙という名のラブレターの山。

魁が担任となり、そして朱利が転校してから早2週間。
私もいい加減、色々と慣れました。
朝から魁が部屋で待機してるとか、魁の徹底としたシモべぶりとか
ね…。

すごいね、朱利。
転校2週間にしてここまでモテるなんて、君の容姿に感服するよ。

「これ何、呪符？
俺を封印しようとか考えてる馬鹿な人間がこんなに居るの？」

「いや、それは無いからね。
っていうか、これ何か本気で知らないの？」

「俺、人間に興味無いし」

ですよー。

朱利は、溜息を盛大につくとそのラブレターの山をゴミと称して処

分するのが面倒だとかほざいています。
うん、イケメンってホント罪だね。

「あのね、朱利。

それ、ゴミじゃないからね？
立派な手紙という名の恋文だからね？」

「恋文？

こんな私怨の籠った塊が？
冗談も大概にしてよ……」

あ、やっぱり邪のオーラ放ってるんだ。

私にはまったく見えないけれど、どうやら怪異である彼には何かしら見えるらしい。

あえて何が見えるのかは聞きません。

恋する乙女は何をしでかすか分からないので。

「これ、燃やすか」

そういうと、手から火を出して一瞬にして手紙を灰と化してしまっ
た。

幸い誰も見ていないからいいものを、乙女の敵だよ、朱利。
きっと必死に書いただろうに……。

「読まないで燃やすなんて、可哀想だよ、朱利…」

「人間に興味無いし、小娘とじゃれ合う気ないから。
あ、菜春さんは別だから安心して」

不安要素しかないのは何故だろう？

私は校内で女子の友人が居ない。

というか、どのグループにも属さない。

一匹狼とでもいうのだろうか？

別に一人じゃないんだよ？

一応友達と呼べるというか、ほどほど付き合っては居るんだけど…

連れションとかマジ勘弁です。

何故いちいち一緒に行動したり、リーダー核の人間に愛想振りまいたり、ご機嫌伺いしたり、悪口を言ったりしなきゃならないんだろう？

私は昔からそういうのは苦手だ。

というか、大っきらい。

そういう人間しか何故この学校には居ないのだろうか…。

自分の不運さを本当に呪うよ。

絶対こういう子ばかりが、今時の同年代の女子だけじゃないと思う。
たまたま私のクラスに居ないだけで、私のクジ運が悪くて、馴染めないだけ。

だから、まあ必然的に少し浮いてしまうのだけれどね。

よく両親や弥鶴に言われるのが私は、優しすぎるとの事。

私は自己中で自分が相手を傷つけた事により自分を嫌いになるのが嫌だからただ単に親切にしているというエゴイズムによる行動なのだけれどもそういう所も含めて【優しい】という。

うーん、よく分からないなー。

朱利がラブレターの山を一瞬にして処分して、上履きを穿いた後、私達は、教室へと向かった。

朱利は、ご丁寧に紳士的に教室の扉を開けると私に先に入るように促す。

そして、私のあとに続くような形で一緒に教室に入った。

すると、やっぱり来ました。

美形が教室に入場すると視線は必然的に集まります。

女子の皆さまからの視線が

滅茶苦茶痛い。

視線が物語ってます。

何でお前と一緒に居るんだ？

と、言わんばかりに私に殺意をぶっつけてます。

2週間この視線に晒されてはいるけれど未だにこれだけは流石に慣れない：。

もう射殺せんばかりだしね。

もしも視線だけで殺されるのならば何度死んでいることやら。

とりあえず、私の平穩は崩れ去ったのは明らか。

私の日常よ、さようなら。

遠い目をしていると、朱利は、スッと一步前に私を守るように背の後ろへと私を回した。

そして、次の瞬間爆弾を落としやがりました。

「菜春さんに殺意ぶつけるなんていい度胸してるよね、君達。

彼女の何が気に食わない訳？

なんなら、俺が相手したげるけど？」

火に油を注ぐとはまさにこのこと。

逆効果です。

朱利、貴方絶対に自覚無いでしょ？

殺意の根源は、

貴方が同行してることにあるんですよ！。

しかも、この発言により朱利が私に対して好意的であるということ

が判明してしまいました。

絶対私闘に合う。

近い将来、体育倉庫裏に呼び出し食らうんじゃないか？

朱利の肩越しに、生徒の皆さまを見ると

顔が真っ青に…。

一体どんな表情してるんだ、朱利…。

朱利は、鼻で笑った後私に向き直ると人懐っこい笑みで

「菜春さん、大丈夫。

俺が守ってあげるから安心してね。

あ、荷物重いよね。

持つから、さっさと席座ろ」

死亡フラグを私に立てないでくれ。

切実に私は思った。

視線が痛い。

かなり痛い。

朱利は、もう気にしていないみたいだけれど私は注目された事がないのでかなりこれは拷問に近い。

絶対呪われる。

女子生徒の皆さん、誤解しないでください。

朱利は、魁の臣下にあたっているからただ私を護衛しているだけなんです。

決して恋愛感情とかじゃありません。

むしろつい最近まで面識ありませんでした。

付き合っているとか無いからね？

だから、お願いですからその視線をどうか、納めて下さい。

しかし、私の心の声なんて聴こえる筈もなく私の心の願いは虚しくも無視された。

私はこの今にも刺し殺しそうな嫉妬にまみれた視線から解放されることは魁が入ってくるまで一切ありませんでした。

これからこんな感じなのかと思うと本当に気が遠くなるわ…。

誰かこの役目を代わってくれ…。

喜んでお譲りしますから。

そして、時は過ぎ昼休み。

そろそろ来るとは思っていたけれど、まさか本当にやってくるとは想像していなかったわ。

私は、ヒロインなんていう柄では無い。

どちらかというと、RPG風に言ってしまうえば村人Aくらいが妥当な人間だ。

そんな私が注目を浴びるなんて思っても見なかったし浴びることなんて人生の中で無いと思っていた。

だけど、どうやらそれは彼らに出会った所為で運命の歯車は、狂っ

たらしい。

朱利がお弁当を取り出して私の為にわざわざセッティングまでするというなんともまあ、執事ぶりを見せていると、ついに堪忍袋の緒が切れたのか、女子の皆さま方が私の机の前に佇み笑顔で言い放った

「林さん、申し訳ないんだけど少しだけ付き合ってもらってもいい？」

聞きたいことあるんだよね」

私が一番嫌うグループのリーダー格の女子が私に言い放った。

笑顔だが、眼が笑っていない。

というか、後ろから禍々しい何かが見える気がするわ。

大体内容は予想がつくけれど、わざわざ悪女役を買って出るとは…

ある意味勇者ですねー。

とまあ、現実逃避していると何かを感じ取ったのか、隣に座っている朱利が口を開く。

「何？聞きたい事あんなら今ここで言えばいいじゃん。

俺、腹減ってるから弁当食べたいんだけど」

「あ、七尾君、食事中なのにごめんね。

ちよっと林さんと個人的なお話がしたいの」

「そんなに人に聞かれると不味いわけ？
俺、そういうの大嫌いだし、そもそも大人数で集る^{たか}ってんのが気に
食わないんだけど」

鋭いまなざしが彼女達を突き刺す。

美形の憤慨した顔ってなんか普通の人より5割増し位怖いのは何故
だろうね？

きっと私に向けられていたら泣くか逃げるかのどちらかだろうが、
恋する乙女というのはその注目すら嬉しいのか、微動だにしない。

ある意味最強だと思う。

「七尾君は、転校してきたばかりで知らないのかもしれないけれど、
私達と彼女は友達でいつも一緒に昼食をとってるのよ？

それに、お弁当は林さんが居なくても別に取れるでしょ？
悪いけれど、少し彼女とお話させて？」

いえ、会話した事ありませんよ？

というか、挨拶すら交わした事なくない？

でも、声には出せる勇氣は生憎持ち合わせていない。
今にも噛みついてきそうな雌ライオンの前では特に。

「嫌だね。

菜春さんと離れるなんて言語道断。

一人きりにさせるなんて許せないよ」

はい、爆弾投下！。

女子の皆さまの顔が引きつる。

完璧に誤解された。

朱利、その発言はまるで君が私に好意を持っているように聞こえてしまうよー。

主語とか色々抜けてるから、誤解を招いてしまうよー。

気を取り直した女子達は、腹をくくったのか、面と向かって朱利に聞いた。

「七尾君って今月転校してきたばかりなのに凄く菜春さんと打ち解けてるみたいだけど、2人は知り合いなの？」

「知り合いも何も一緒に住んでるし」

ぎゃああああっ！！！！

何を言い出すんだこの馬鹿はっ！！

完璧に凍った。

女子の皆さまが凍った。

目の前に居る女子だけではなくて耳をダンボにして聞いていたクラスの皆さままでもが硬直した。

「え、あの、住んでるって？

2人は一体どういう関係？」

「話す必要あるの？」

俺説明すんの面倒だから言いたくない。

ねえ菜春さん、お腹空いたから早く食べようよ」

彼女達の戸惑い等を完璧にスルーして自分のお弁当を取り出して食べる準備をする朱利。

私がどうやら食べるのを待っているらしい。

忠犬ハチ公か、お前は。

いや、確かに狐はイヌ科に入るけれどね？

私は溜息をついて、食べる為に箸袋から箸を取り出す。

対する朱利は、弁当をご機嫌な様子で開いた。

そして、その中身を見た女子の皆様は次の瞬間

声にならない悲鳴を上げた。

ああ、完璧誤解された。

作っているのは魁なわけで、勿論違う内容の弁当を作るなんて手間をする筈がない。

つまり、私と朱利の弁当の内容は量こそ違えど全く同じ。

あのね、女子グループA。

お願いだから落ち着いて話を聞いてくれ。

一つ屋根の下に居るのは事実ですが、どうか誤解しないでください。

切実に。

けれど、弁明の言葉を口にする前に彼女達は私に鋭い視線を送った後、踵を返して自分達の巢へと帰っていった。

なんて最悪な結果。

思わず頭を抱えなくなった。

これからきつと変な嫌がらせとか受けるんだろうな！。

と、他人事じみた重たい思いを抱えながら、笑顔で首をかしげる朱利を見る。

うん、可愛いね。

だけどね、君の所為で私はとんでもない状況下に置かれてしまった事を理解しているかい？

屈託のない彼の表情に思わず殺意を抱いた。

しかし、私が食べ始めなければ彼は食べる事は無い。

大きなため息をついて箸を動かして何とも味気ない食事を口にした。

これから起こるであろう事に思い悩みながら…。

こんな少女漫画のお決まりの展開って…ありますか？

疑念

場所は変わって、職員室。

予想外な騒動が起こっている昼休み、いつもなら鏡越しに菜春を監視している魁は、難しい顔をして頭を悩ませていた。

室内には教師は居ない。

皆、学食へと足を運んでしまい、残されているのは彼だけだった。

無論、彼が現れる前の職員室ではこのような事態はありえない事だった。

本来教師達にとって職員室で昼食を取るのは当たり前であり、唯一教師としての肩書を下ろ事が出来る貴重な場である。

しかし、それは魁の出現によっていとも簡単に崩された。

彼は持ち前の怪異としての能力を使い自分以外の者を室内から追い払ってしまった。

職員室を独占するという暴挙。

それも全て彼が愛しい主人を思い、彼女の姿を見る為の空間を確保するため。

前回のような不祥事は、繰り返したくなかった。

だが、今回はそれだけでなく彼の頭から離れない問題に対して答えと解決策を出すべく思考を巡らせていた。

その悩みの根源は…

【林 弥鶴】

画面越しに見えた彼の姿。

菜春様は、彼を【兄】と言っていた。

だが、どう見ても兄妹には見えない。

彼女と共通する点があるといえば日本人万人に共通する黒髪と黒眼のみ。

顔の造形などは、彼女の両親のどちらとも似ても似つかず、とても林家の一員だとは思えなかった。

それだけではない。

菜春様が、画面から一瞬目を離れた時、ハッキリと彼女の兄は自分の姿を捕えたのだ。

妖術を使って己の姿見えないようにしていたにも関わらず、奴は己の姿をその目で捕えた。

その予想外な出来事に、彼は思わず息を呑んだ。

ただの人間である筈の【兄】が何故自分の妖術を破り自分を見据える事が出来たのか。

それが魁には理解できなかった。

そして、自分の姿を捕えた時の彼の瞳は、家族のソレとはまるで違った。

人間があれほど冷酷な眼を向けることが出来るだろうか？

怪異の中でも自分をそう見た者は居なかった。

【兄】と呼ばれる男の瞳には「殺意」「嫉妬」「憎悪」。

ありとあらゆる思念と感情の塊を、たった一度の視線の交わり合い

で自分にぶつけて来た。

【アレ】は一体何者なのだろうか？
本当に【アレ】は、主人の兄なのだろうか？
そもそも、本当に【アレ】は：

【人間】と呼べるのか：

疑問が疑問を呼ぶ。

菜春様が兄と呼ぶ存在。

しかし、自分にはとても彼は主人の【兄】という存在には思えなかった。

彼の彼女に対する視線は【妹】に向ける愛情の類では無い。

もっと複雑で、滑稽で、根強く、深い思い。

そう、それはまさしく

己が彼女に抱いているモノと同じ。

当事者だからこそ直感で分かるその感情。

この激情は、体験している者にしかとても理解できないだろう。

何をしていても、何処にいても、その人物の事しか考えられなくなる。

自分の世界は彼女を中心に回り、向けられる視線が他人に向けられればたちまち狂おしい程の嫉妬に満たされる。

自我を失い、全てを彼女に捧げ、彼女の髪の毛一本まで全てを愛し抜く。

愛憎にまみれば最後。

相手を何度殺しても殺し足りない。

愛に溺れた自分だからこそ分かる。

彼女が願えば、何でも叶えてしまうだろう。

それこそ、この命を捨てるのだって惜しくない。

だからこそ、自分と同じ目で彼女が見られているというのは、耐えがたい事。

たとえば主人が悲しもうが、自制出来る自信はとても無い。

愛に支配された男ほど愚かな者は居ない。

かつて自分はそんな愛によって自滅した者を嘲笑っていた。

なんと愚かな行為だと。

女子おなごの為に全てを賭けるなど馬鹿馬鹿しいと思っていた。

そんな自分がこれほどまでたった一人の年行かぬ乙女にこれほどまで執着するなんぞ

本当に笑えた話だ。

彼女の傍に居る為に、自分が築き上げた地位も土地も捨て、誰もが恐れおののく力をたった一人の人間の為に使う。

これほどの道化が何処にしようか？

それも、彼女の寵愛を受けたいが為。

なんとも滑稽な姿なのだろう？

本当に笑える話だ。

ただの人間の娘の為に

この身全てを捧げるとは。

そして、彼女を独占したいが為全てから守り抜くため自分の権力を全て振りかざす。

本当に自分は、とんだ阿呆だ。

自覚しているにも関わらず、それを辞める気が更々ないのがもう終わっている。

アノ【男】は一体何者なのだ？

ああ、実に忌々しい。

眼が合ったので妖術で記憶を操作しようとしたが、簡単にも弾かれてしまった。

いとも簡単に自分の力を弾くなんて、普通の人間で成しえる業では無い。

陰陽師かその類ならまだしも、菜春様の家系はそのようなものではない。

アノ男から陰陽師が出す【気】は感じ取れなかった。

かといって、同じ同族の者かと思えばそれすらも感じ取れない。

正体不明の存在だ。

だから未恐ろしい。

理解が出来ない存在ほど恐ろしい者はこの世には無い。

情報が無ければ、守る術も対策も考えられない。

一体、何者なのだろうか？

菜春様を見つめたアノ熱意の籠った視線。

汚らわしい瞳で彼女の素肌を乱れた吐息で話す彼女の姿を見るなんぞ耐えがたい拷問、屈辱だ。

抹殺してしまうのが一番手っ取り早いのかも知れない。

菜春様の記憶から、彼を抹消してしまえばいいだけの話。

そう思い、鏡を取り出し彼女を映す。

ああ、相変わらず可憐な方だ。

野草に咲く花のような愛らしさ。

決して派手では無く、主張しない

ポツリと咲く自分だけの花。

いつそのこと自分の手で手折ってしまいたい。

10年経った今もその輝きは失われない。

色あせることも全く無い。

ああ、彼女に触れたい。

肌で感じてみたい。

身も心も全て自分の色に染め上げたい。

いや、すでに自分が彼女の色に染められてしまっているか。

ほのかな赤みを放つ頬。

凜と物事を見つめる力強い瞳。

甘い香りで誘う唇。

ああ、貪りたい。

己の欲を心の中で呟く。

胸が締め付けられる。

こんなにも近くに居るのに、とても遠い可憐な名も無き花。

いつになれば私の手は彼女に届くのだろうか？

この思いはどんな言葉で表現してもきつと誰にも伝わらない。

【愛している】という言葉では薄っぺら過ぎる。

だからこそ、まどろっこしく柄にも無く焦ってしまう。

我を忘れてしまう。

周りが見えなくなり、正常な判断が出来なくなる。

この手を汚すのも躊躇なく実行出来るほど。

そんな激情を抱いているからこそ、【林 弥鶴】の視線の意味を素早く察知出来た。

あれは、兄妹愛という優しい類では無い。

彼女に向けられた視線。

笑顔の奥に潜む、獰猛な獣のような欲求。

ふざけた顔は、悟らせない為のカモフラージュ。

あの者の眼は：

愛に狂った雄だ。

腹ただしい。

自分以外の人間が彼女にそのような感情を抱くのは、絶対に許せない。

否、許してはならない。

自分と同じ目をした主の【兄】。

彼女が慕ってしようと、自制できる自信は無い。

何より自分の勘ではあるが、どうしてもアノ男が兄だという事に納得がいかない。

抱いた疑念は警戒心を呼び起こす。

後ろに向かって、手を払う。

次の瞬間、【何か】が斬れ断末魔が室内に響きわたった。

そして静かに複雑文字が描かれたな呪符が舞い降りた。

その紙は綺麗に2つに切られていた。

そこから湧きあがっている禍々しい気に顔を顰めた。

監視されている気配は、菜春様の家にお邪魔した時から気づいていた。

ずっと主人を舐めるように見つめるソレは、万死に値する。

菜春様は、自分だけの姫君。

ああ、己以外にアノ視線が向けられていたその事実を考えるだけで腸が煮えくり返る。

呪符を手に取り、文字をなぞる。

やはり、監視の呪符。

相手の嫉妬の深さが窺える代物だ。

しかも、あちら側から手だし出来るように細工されている。

なんと悪質な。

だが、何の対価も無しにこのような条件が揃うはずも無い。
相応の代償が支払われる。

それだけ危険性の高い代物だ。

此方側が気付き、攻撃してしまえば相手にその攻撃が伝わり、消滅してしまえば、それなりに傷つくだろう。

アノ断末魔だ…死んだか？

だが、あれくらいで死ぬとは思えない。

自分に喧嘩を売ってくるような男だ。

今朝からずっと此方を監視する行為は、まるで存在感をあえてみせしめている様。

気に食わない。

まるで試されているような気がする。

日本国内で気を張り巡らせても、この術者の気配は感じ取れないのだから、相当遠い所から細かく操作していたのだろう。

となると、やはりとんだ曲者だ。

自分と同じ位の能力を持つ者。

今まで鉢合わせになった事は無い。

あれだけ酷い戦があったのにも関わらず、出会わなかったのは奇跡に近い。

多くの妖が散った大戦争。

人間や陰陽師すら巻き込んだ大惨事。

歴史から抹殺された空白の記録。

日本全土の怪異がその力を奮ったアノ時代。

あれだけの力を持つならばはち合わせた筈。

何故出会わなかった？

分からぬ。

やはり、注意深く見張っておこう。

出来るなら遠ざけたい人物だが、それは主人は好まないだろう。

とりあえずは、様子見だ。

何も害が無ければ放っておく。

だが、もしも菜春様に何かしようという気が少しでもあったなら、

消し去ってしまえばいいのだから。

そう心に決めた一人の怪異は、持っていた呪符を握りつぶした。
狂気と愛の狭間に立ちながら。

不安

こういう状況を絶対絶命というのだろうか？

それとも、蛇に睨まれた蛙？

いや、そんなことはどうでもいい。

とにかく私は現在進行形で

非常に危険な状況下に置かれている。

ああ、こうなったのは、全て朱利の所為だね、うん。

全面的に朱利の所為だ。

私は、何も悪くない。

私の平穏を返せ。

本日最後の科目が体育だったのが運の尽きだった。

魁達と出会ってから、私の運は全て吸い取られている気がしてならない。

現在の私の状況。

女子更衣室で女子生徒の皆さま方に囲まれている。

なんてベタな…少女漫画かこれは。

王道を突っ走っているではないか。

私は、彼女達の勇気に本当に感服するね。

私だったら無理だ。

バレたら一貫の終わりだし、自分から進んで悪役になるなんて本当に心から尊敬する。

善の行為を行うより、悪の道を進む方がよっぽど大変だ。

自分が悪い事をしているという事を知った上での行動。

分からない程の馬鹿では無い筈。

私達は、善悪を見極める事が出来る年齢なのだから。

まあ、嫉妬でちょっと冷静な判断が鈍ってしまっているのかも知れない。

いや、寧ろ怒り？ 憤怒？

うん、とりあえず

形相が女じゃない。

こういうリンチ的な状況下に置かれるのは生まれて初めてだ。今まで目立った事もしてこなかったし、存在感は薄かったし、喧嘩をするような状況を作らないよう努力してきたからね。

なんせ争いごとが苦手なのだ。

手を上げる喧嘩は勿論のこと、口喧嘩すらしたことが無い。

言い返す勇気が無いというか、相手の意見に反発せず、反論せず、右から左へと受け流す感じで今まで生きて来たからね。

だけど、不幸な事に朱利というイレギュラーな存在によって私は、理不尽にも囲まれてしまっている。

美形は周りを巻き込む存在なんだね。

昼休み事件以来から、殺意の籠った視線が前にも増して送られていたのには気が付いていたからね。
もう、目だけで人を殺す勢いだったね。

私は体育の授業が終わって、女子更衣室に行った直後、女子の皆さ
まに囲まれた訳だ。

他にも女子生徒は居ましたよ、勿論。
だけど、私引きとめられちゃったんだよね。
全力で拒否しなかったのだけど、

目で圧力かけられて、無理だった。

火に油を注ぐ無謀な行為は出来ません。
所詮、私はチキンハートよ。
自分が傷つくのが怖いからね。
まあ、結果的には傷つくのだけれど。
現に囲まれちゃっているし。

なんて厄日だ。

星占い見とけばよかった。

きっと私の運勢は最低ランクだったに違いない。

そして、最悪の相性は朱利だったに違いない。

せめてラッキーアイテムの1つでも持っていれば、よかった…。

と、現実逃避をしていた私を引き戻したのは、
女子生徒Aの言葉だった。

「ねえ、林さん。

七尾君と一緒に住んでるって本当なの？」

目が怖い。

もはや女じゃありません。

完璧に獣化^{けものか}しちゃってますよ。

雌ライオンのごとく臨戦態勢だよ。

狩りモードにONだよ。

嘘は付いてもどうせいつかはバレることなので、本当の事を話す。

そもそも私は嘘をついたら顔にすぐ現れてしまうので、下手に嘘つくよかマシだ。

勿論、朱利が九尾という事は伏せる。

そもそも絶対信じないだろうしね。

怪異なんて私だって、つい最近まで存在自体しらなかったよ。

「そうだよ、私の家に住んでる」

そう言うのと、すごい形相で睨む彼女達。
もう、本当に女の顔してないよ。

犯罪者一歩手前の顔だ。

とりあえず、落ち着こう。

話せば分かりあえると思うんだ。

「一体どういう関係なの？」

いい年頃の男女が1つ屋根の下なんて、おかしくない？
名字も違うし、何？　どういうつもり？」

いやいやいや、どういふつもりも何も私何も悪くないし？

相手が勝手に私の家に住んでるだけだし。

チートな技使って、家族騙して家まで改築してまで住んでるんだよ？

寧ろ私は被害者だ。

睨むのは私じゃなくて、朱利に是非してほしい。

いや、分かるんだけどね。

朱利が美形なのは公然の事実だし。

「いや、どうもしないけど…」

「七尾君に気に入られてるからって良い気になってるんじゃないわよ。」

何様のつもり？」

多分立場的にはご主人様だと思うよ。
なんて言えないよね。

どういう関係って言われたら…

主従関係？

いやいやいや、なんてプレイだよそれ。
絶対引かれる。

というか、私殺される。

いやそれ以前に今殺される一歩前。

「黙って無いでなんかいいなさいよ」

ああ、他の女子様まで加勢してるよ。

私何、リンチされるの？

朱利の所為で？

私何も悪くないのに？

何それ、理不尽じゃない？

私、仲良くないし。

相手は護衛で付き合ってるだけだし。

そもそも元凶は、魁だし。

ああ…まったく、こういう時にこそ僕の活躍の時じゃないか。

「…魁、何とかしなさいよっ」

ボソリと呟く。

独り言のつもりで呟いた。

だって聞こえる筈無いから。

目の前の女子達にも聞こえないような、そんなか細い声で八つ当たりに近い声色で吐き捨てた。

そもそも場所は、女子更衣室。

密閉された空間。

異性が立ち入れないし、そもそも滅多に人が立ち寄らない場所。

だから、期待していなかった。

もう、なるようになれと自暴自棄になった。

きつと2、3発殴られるか、これから手酷い虐めに合うか、嫌がらせまがいの事をされるか、近づくなどか色々八つ当たりされるのだろうか。

嫉妬なんてされても困る。

私は嫉妬されるような人間ではないのだから。

だって、相手は怪異で私は人間。

種族から違うし、関係は主従関係だ。

私の僕の臣下。

魁の命令によって護衛しているから、私と共に行動しているだけ。

その任を解かれれば、きっともうそこでさようならだ。
そんな薄っぺらい関係なのだ。

魁にしたってそう。

私が幼い頃、かわしたその契りによって彼は私に巻き込まれたに過ぎない。

幼い私の生きたいという我が儘によって生じた接点。

彼は私に愛していると愛を謳う。

それが真実なのかは定かじゃない。

一体何が目的のかもわからない。

何故私なのか。

何故私の傍にいいのか。

分からない事だらけで、私が聞きたいくらいだ。

生きていくのはとても苦しい事だ。

こんなにも悩み苦しまなければならぬ。

いつその事あ場で死んでいればよかったのかも知れない。

深く人気の無い森の中で、冷たく横たわってしまっていれば…

死んでしまえばよかったの？

都会に来ても友は出来ない。

心から許せるのは、家族だけ。

その家族にすら言えない悩みは山ほどあって…。

なんで、こんなに苦しまなきゃいけないの？

なんでこんなに悩まなきゃいけないの？

私だけ、私だけ全部背負いこんで…

誰でもいい…なんでもいい…

私を・・・私をっ

たすけて

女子更衣室のドアがぶっ飛んだ。

すごい風圧で髪が揺れる。

驚く女子生徒の皆さま。

扉があった場所に振り向くと、そこには、1つの影。

うそ…。

あの時と同じその影。

家の壁をぶっ壊した時と同じように悠然と立つその姿。

まさに妖美で、孤高の存在。

上に立つ風格を持つ怪異。

「失礼致します、お嬢様方。
私の菜春様に何か御用で？」

そう微笑んだのは、紛れもなく魁だった。

本当に来るなんて…。

アノ弦きが聞こえたの？

いや、いくらなんでもありえない。

たとえ、怪異だとしても聞こえる筈が無い。

私の心の叫びなんて分かる筈が無い。

なのに、なんで…

なんで、私が助けを呼んだ時に私の脳裏に過ぎった貴方が私の視界に映っているの？

「菜春様から離れろ、牝狐共が」
めぎつね

口元は笑ってはいるものの、その瞳はとても冷たく私と囲んでいる彼女達を突き刺した。

まるで視線だけで彼女達を殺せそう。

彼女達は、腰が抜けたようにその場に座り込む。

心なしか、肩がふるえている。

魁の瞳孔がスリット状に細くなる。

まるで、夜行性の獣のよう…。

次の瞬間、私を囲んでいた女子達は、目の光を失い、マリオネット

の糸が切れたように床に倒れ込んだ。

魁に再び視線を映すと彼の顔から表情は一切消えていた。

瞳は、心底嫌そうに：ゴミを見るような目つきで見下している。

ああ、彼は心底苛立っているのだ。

でも、何の為に？

私の所為？

何故？

何故、私と彼女達の何が違うの？

「魁…ごめんね」

自然と謝罪の言葉が私の口から発せられていた。

先程まで怒りを抱えていたのに、魁の姿を見たたん、とてつもない不安に襲われた。

もしかして、本当は私なんかの僕になるのは嫌だったのではないか。

仕方なしに私を生かす為に契りを結んだのではないか。

手を煩わせた私に対して呆れているのではないか。

もう私を…

見放すのではないか。

私は、愛されて来た自覚はある。

家族にとっても大切にされてきた。

そういった意味では環境には恵まれていた。

だけど、家族以外の人には心を許せず、また、人を恐れて来た。

事故以来過保護になった両親と弥鶴。

私は、我が儘なんて言えなくて、心配なんてかけられなかった。

また、唯一信頼できる家族に嫌われるのが怖くて、嫌われて、自分が傷つくのが怖くて、自分という人間を作り上げて演じ、生きて来た。

だから、私には魁が分からない。

何故こんな魅力の無い私に愛していると言えるのか。

私に尽くすと言ったのか。

魁は、私の言葉に対して目を丸くさせると、心底不思議そうに首を傾げ

「何故謝るのですか？

寧ろ謝らなければならぬのは私の方です。

もっと早く来るべきでした：。

怖い思いをさせてしまって申し訳ございません。

お怪我は、ありませんか？」

私に歩み寄って、頭に手を差し伸べる魁。

思わず私は、身体を震わせ後退した。

私の反応に対して、手を止める魁。

悲しそうに顔を歪め、再び私に問う。

「菜春様に気分を害するような事を私はしてしまったのでしょうか？
何か失態を犯してしまったのでしょうか？
貴女様を怯えさせてしまうほどの事を…。
おっしゃってください。
すぐに治しますから…。どうか、お声をお聞かせ下さい」

懇願するように私を見つめる魁。

何故そこまで私に尽くすの？

私にはわからない。

出会ってからまだ2週間ばかりなのに。

出会ったのは10年も前のことで1度きり。

そんな私に対して、何故ここまでしてくれるのだろうか？

1度会って契りを交わした私の為に、それを果たす為だけに全てを
捨てた。

何故そんな事が出来るのか理解できない。

だって私にはそんな価値は無いのだから。

「魁は…悪くないの。」

悪いのは全部私なのよ…。

だから、責めなくていいの」

「下手な嘘はおつきにならない方が懸命でございますよ」

「…なっ!？」

彼は、やんわりと私の言葉を否定した。
そして慈しむかのような優しい笑みを私に向ける。
私にしか見せない：私だけの為の表情。

「悲しそうな、傷ついたような顔をなさってますよ。

何故、私に対してまで偽るのですか？

貴女のそんな顔をみると、心臓に何千本もの針で串刺しされたような痛みが私を襲うのです。

どうか、どうか御心を私にお聞かせ下さい」

「魁には：関係無いもの。

だって、私の問題だし、魁が心を痛める必要も理由も無い。

勝手に落ち込んでるだけだから、放っておいて」

そう言ってこの場から立ち去ろうと魁を通り過ぎて、出口へと向かう。

今は、何も話したくない。

助けて貰っておきながら失礼だと思う。

白状ものだって思う。

だけど、私にはわからない。

何故、魁が私にここまでするのか。

涙が出そうになって、必死に堪える。

泣くな、泣くな私…。

どうって事無い。

何もされなかった。

ただ問いただされただけ。

勝手に落ち込んで自己嫌悪に陥るな。

涙がこぼれないうちに外に出ようと駆け出した。

否、駆け出そうとした。

だけど私の行動は叶わなかった。

私の腕が突然引っ張られ、その力に贖う術を持っていなかった私はそのまま力が赴くまま倒れ気がついたら

魁の胸の中に居た。

強く抱きしめられ、息が出来なくなる。

必死に抜け出そうと身を振り、突き放そうと力を入れるが、ビクともしない。

「離してっ!! 離してよっ!!」

叫ぶ私。

その言葉に相反して、腕に更に力を込める魁。

顔が胸に押さえつけられて、彼の顔は私の肩越しにあるので表情すら見えない。

「離しなさいっ、命令よ魁っ!!」

権力を振りかざし、命令する。
嘘つきな私。

本当は、離して欲しくない癖に。
ぬくもりに甘えたい癖に…。

なんて素直じゃない。

可愛げの欠片も無い。

でも、泣いたら嫌われる。
分かってる。

私は面倒な女。

ただの餓鬼なんだ。

「申し訳ございませんが、聞こえませんが、
離しません…ええ、離すものですか」

予想に反して命令を無視された。

朱利を殺そうとした時に、辞めろと命令すれば潔く辞めた魁。

ただ離せという簡単な願いに【主君】という絶対的な存在である私の言葉に従わず反論した。

絞り出すような声で言葉が続ける

「貴女がいけないのです。

泣きそうな貴女を手放す事は出来る筈がないでしょう？

何が貴女をそこまで追いつめているのですか？

私では役不足なのですか？

貴女の心を軽くする事は出来ないのですか？

私は…

信頼に値しない存在なのですか？」

私の心を乱す言葉を吐く彼。

これ以上私を混乱させないでっ。

私は…私は、泣いていない。

泣きそうなんてなっていない。

自分で冷静に自分の状況を見て彼女達に気づかされただけ。

私達の関係が…

すぐに切れそうな糸で結ばれているという事に。

「何で…なんでそこまで私に構うの？

10年前にたった1度しか会って無い私に、何でそこまで尽くせるの？

契りは何？それを結んだから魁は構うの？

主人だから？だから、そこまで構うの！？」

「違いますっ、私は・・・っ」

「違わないっ!!」

魁は、私を見てなんてないっ!

本当は迷惑なんでしょう?

こんな厄介な娘のお守をしなきゃいけない羽目になって: 魁は優しいから私を助けたんでしょう?

私を見捨てられなかったから契りを結んだだけなんでしょっ!!

憐れみなんていらないっ!

中途半端な優しさなんて私はいらないっ!!

そんな気持ちで【愛してる】なんて口先だけで言わないでっ」

「.....っ」

身体が離れたと思った次の瞬間私の視界は、再び何かに埋め尽くされた。

そして、息が出来なくなった。

そう、私は:

魁にキスされた。

荒々しい口づけ。

息づきをさせない、必死に逃げようと後退しようにも手が頭を押さえつけて許されない。

息継ぎをしようと傾けようとすればすぐに後を追われ、逃れられない。

離すよう抗議するために胸を叩いても一向に辞める気配は無い。

何故こんな酷い事をするのだろうか？

慰めのつもりなのだろうか？

いい加減酸欠で意識が遠のき全身の力が抜けると、ハツとしたように、我に返った魁は、口を離した。

悲しそうに顔を歪める。

切なさそうに私を見つめる。

何が言いたいのか？

何を思っているのか？

何故キスしたのか？

言ってくれなきゃ、分からないよ。

「申し訳ございません。

出過ぎた真似を致しました。

命令に背いた事は、万死に値致します。

ですが、後悔は致しません。

死んでも本望です」

違う、私はそんな答えが欲しいんじゃない。

うわべだけの言葉なんていらない。

本心を伝えて欲しい。

私が求めているのは…

「そんなの望んでない…」

「菜春様：」

「魁は、何でそう簡単にキスとかするの？」

私の事、本気で好きだって感じてる？

契りとかそんなもので縛っているから、無理やり思いこもうとして
いるだけじゃないの？」

「っ、違いますっ」

「じゃあ、証明してよ！」

言葉にして私に納得させて見せてよっ」

分かってる。

これは単なる我が儘だ。

私は、何を言ってるんだろう。

今までこんな激情を向けた事は無いのに。

何故私はこんなに苛立っているのだろうか？

分からない。

「証明すれば宜しいんですね？」

「・・・え」

「私は、菜春様の隣に立つ為だけに全てを捨ててまいりました。
地位も、故郷も、全て葬りました。

私には帰れる場所なんて無いのです。

貴女の傍に居られるだけで私は幸せなのです」

「訳・・・わかんないよっ」

「それが、恋した者の弱みでもあり強みでもあるのでしよう。」

私は、菜春様の為ならば何でも致します。

それは契約なんてしていなくても、きっと私は全てを叶えていたでしょう。

私は…本当に、菜春様を愛しているんです」

「でもっ、私は人間で…魁達、怪異にとっては食糧なんですよ!？所詮家畜みたいなものじゃない…愛玩動物みたいに扱って、」

「…いい加減にせよ、人間の娘」

どこか懐かしさを覚える言葉づかいの怪異が私の瞳を見据えた。

懇願

冷たい空気が室内を包む。

人を圧倒させ、怯ませる存在感。

無表情に私を見つめる魁は、正しく怪異の頂点に立つに相応しい姿をしていた。

【人間】を見下した口調。

それに懐かしさを覚える。

遙か昔に聞いた事があるような気がした。

魁は、私の顎を掴むと上へと向かせ、意地悪な笑みを浮かべ口を開く。

「菜春よ、何が不満か申してみよ。

この容姿か？先刻までの口調か？

私の態度が気に食わなかったか？

何ゆえ我が愛を拒む？

望みがあるなら叶えてみせよう。

さあ、申してみよ愛しい人よ……」

私の頬を艶めかしい手つきで撫でられ、ゾクリと背筋が震えた。

口調は多分、魁の素だろう。

短髪だった髪は、いつの間にか魁の腰丈まで伸びていた。

艶やかで滑らかで枝毛が一本も無い本当に羨むほど美しい髪。

そして、この容姿…なんて反則級の生き物なんだろう。

魁は、私の反応が面白いのかおかしそうに口端を上げながら私の髪を愛でる。

余裕な表情が悔しくて、腹が立った。

私がどんな気持ちか知りもしないで…。

いけしゃあしゃあと、私に愛を囁く魁に憤りを覚えた私は…

「じゃあ、私に仕えた理由を今ここで述べてみせて…。

何故私を愛しているのか言ってみせてよ。

私が信じられないって言ったら、もう私に愛を求めないで」

そう言うと、魁は固まった。

マジマジと私を見つめ、本心を探ろうとしているのが分かる。

そして、私が本気と分かると呆れたように深いため息をついた。

何それ、イラつく。

私から手を離し、距離を保つと、偉そうにあぐらをかく。

そんな格好なのに、何故か絵になるのだから不思議だ。

美形だからなのか？

何処からか、煙管を取りだすと堂々と女子更衣室で煙を吹かし始め、私を色っぽい目つきで見据えた。

「我が主ながら、ここまで愚かだとは普通の娘ならこの容姿で近づくだけで喜ぶものを」

「馬鹿にしないで、魁。」

容姿だけが全てじゃないの。

私は中身が大切だと思ってるんだから」

「外見で左右されぬ事ぐらい知っとるわ。

どうして我の愛がそなたに伝わらぬのだ？

言葉であれだけ伝えたのにも関わらず何故お主は信じようとせぬ」

「だって：一度しか会った事無いんだよ？

それも当時私は、6歳だった。

そんな娘に対して恋心を抱くなんてオカシイよ。

幼児趣味でもあったわけ？」

「期待に添えなくて悪いが全く無いな。

そもそも人間そのものに興味が無かった。

菜春、そなたに会おう前まではな：」

そう言うと、優しく私に微笑みかけた。

一瞬それに見とれてしまい、激しく自分をぶん殴りたい衝動に駆られた。

「我は、孤高な存在だった。

この手を血に染め、刃向える者等居ないほど力をつけ、頂点に君臨した。

身体を動かすついでに殺し合いをしても、相手にもならず、すぐに息絶える。

我は、いわば暇だったのだよ」

「じゃあ、私は暇つぶしって事？」

「そう結論を急ぐな：話は最後まで聞くが良い」

再び煙管を口にし、煙を私に向かって吹かし、妖美に微笑んだ。煙によって咳き込む事は無かった。

むしろ、そのお香を焚いたような匂いが私を酔わせる。

「そんな中、我が領域にお前が迷いこんだのだよ。
必死に歩き、生きあがくそなたを高みから見物し、嘲笑った」

「最低：私の苦しみを返せ」

「過去の事だ、時効だと思って許せ。

我は、そなたの命の灯が尽きそうなのを見計らってそなたの前に姿を現したのだ。

本来の【怪異】としての姿でな」

昔を思い出したようにふっと遠くを見て魁は笑った。

その姿は、何処か寂しそうで、思わず手を伸ばしてあげたくなった。

「すると、どうだ？」

そなたは怯える様子も無く、それどころか我に助けを扱いた。
初めてだったのだ。

我を【恐怖】で見つめぬ人間は、そなたが初めてだった」

「…小さかったから分からなかったのよ」

「幼子ほど危険に敏感なものよ：それは長年生きて見に染みている。
我の姿を見るだけで腰を抜かし泣く子供を幾人も見届けてきたわ」

「弱ってたから、見えなかったのかもよ？」

「どちらでも構わぬ。

それでも我は、驚き、そして何処かで嬉しかったのだよ。

【恐怖】を具現化したような我に対してずっと傍に居るとハッキリ
申したお前の言葉が」

遠い過去を思い出し、嬉しそうに笑う魁。

話し方は違っても、やっぱりその笑顔は、魁だった。

【僕】の魁も、今のような【怪異】の魁も、やっぱりどちらも同じ
なのだと、改めて実感した。

「我は、お前を救いたかったと思った。

だから死の淵から救うべく、最終手段を使わざる得なかった。

それは、怪異にとって屈辱でしか無い人間に屈するという契約。

主となる人間が死ぬまで尽くすというモノだ。

それは、我が築き上げて来たモノを全て無に帰し、下落するのと同じ
だった」

「…なん、でそこまでしたの？」

ふっ、と自嘲気味に笑う魁。

全てを失った彼。

誰もが憧れる【頂点】を極めた者。

その玉座を捨ててまで、何故私を助けたのだろうか？

嬉しかったからといって、そこまで普通出来るものだろうか？

「分からぬ」

「…え？」

「我にも何故そんな事をしたのか分からぬのだよ」

「訳分からんない」

「確かにな。」

愚かなのは、お前では無く我なのかも知れぬ。

愚か者同士お似合いではないか？」

くくくつと楽しそうに笑う魁。

私はまったくもって不愉快極まりない。

「よくそれで愛してるとか言えるね。」

それじゃあ、私の事好きって言えないじゃない」

「いや、そなたの事は愛しておる」

「だーかーらー、言葉だけならいらない。
本気じゃないんでしょ？ どうせ」

「そなたの為にどれだけのことをしたとおっておる？

愛しておらねば地位を捨てられるか？

わざわざ人間の中に溶け込む努力をするか？

そなたの傍に居るに相応しくなるべく、人間の常識をわざわざ取得
するか？」

「そ、それは…」

「恋するのに理由が必要か？

我にもこの激情がどのようにして生まれたのか、何故そなたにここ
まで惹かれるのか分からぬ。

だが、そなたを見つめる男共を見ると全員抹殺したくなるほどの嫉
妬に襲われる。

そなたを思うと、胸が苦しくなる。

菜春が泣いていると、どうすればいいか分からなくなる。

私の行動や思考は全てお前を中心に回っておるのだ…。

己では制御できぬほど、我はそなたに恋焦がれているのだよ…」

悲しそうに笑う魁。

私は恋をしたことは無い。

だから、魁の感情は分からない。

そういえば、誰かが言っていた。

恋はするものではない。

恋は、落ちるものだ。

魁は、恋に落ちてしまったのだ。

何処をどう間違ったか、何故か平凡極まりない私に。

何の取り柄も無く根暗な私に。

ただ私が怖がらなかったというだけ。

凍てついた彼の心を何故か溶かしてしまった。

だけど、不思議な事に、私は彼にキスをされても嫌ではなかった。

それは一体何故？

魁は再び私に近付き私の頬を触る。

大切そうに、まるで壊れ物を扱うかのように優しく触れる。

「どうすれば伝わるのだろうか？

これほど愛しているのに、そなたに何故伝わらないのだろうか？

言葉では言い表せぬのが腹ただしい：

いっその事、我が心をそなたに見せられればいいものを…」

泣きそうな顔。

私を失いたくないと切に願っているかのように優しく、優しく、私に触れる。

「愛しているのだ。」

そなたを失えば我は壊れてしまう。

それほどにまで愛しているのだ。

側近である朱利でさえ、手にかけるのもいとわぬほどそなたを愛しているのだ……」

子供のように何度も同じ言葉をつぶやく彼。

本当に彼は、頂点を極めたのだろうかと思わず疑ってしまうほどに、目の前に居る魁は、とても弱々しく、今にも壊れてしまいそうに見えた。

「お願いです：私を嫌わないで下さい。

私を拒絶しないで下さい。

愛してくれとはもう言いません。

せめて、お傍に置いて下さい……ご無礼をお許しください、菜春様。どうか……どうか、私をお傍に……」

口調が【僕】の時へと戻り、髪は元の短髪に、そして煙管は何処かに消える。

まるで、全て幻想だったかのように……。

懇願して、私の傍に居たいと願う魁。

信じられなかった。

いや、信じるのが怖かった。

傷つくのが嫌だったから、傷つく前に離れようと思った。

だけど、ピンチに陥った時、真っ先に助けを求めたのは家族ではなく紛れもなく、魁だった。
たった2週間。
されど、2週間。

それほど彼は私の中で大きな存在になってしまった。

私の為に全てを投げ打ち、全てを失い私しか縋るものが無い、一人ぼっちの寂しがり屋さん。

私は彼をまだ信じられない。

だけど、彼の事を受け入れよう。

私しか無い、何も無い彼を。

何故か、私を愛していると私に言葉をかける彼を。

「魁：貴女のその愛はまだ信じられないの。

ごめんなさい、これは私の問題なの。

だけど：私は貴方の傍に居てあげる。

私の大切な、僕さん」

泣きそうな彼の頬を私は撫でた。

信じられなくてごめんなさい。

私は、ただ臆病なだけなの。

だけど、いつか信じさせてみせて。

いや、寧ろ

私を落としてみせて。

貴方が私に溺れているというならば、私を貴方に溺れさせてみせて。私を愛しているというならば、愛という感情を私に教えてみせて。

全てを投げ打ってでも、私に尽くし、愛する貴方。

とても不憫だと私は思ってしまう。

だけど、そこまでしてくれる彼を嫌いにはなれない。

そこまで私は冷酷にはなれない。

だから甘いかもしれない。

私の言葉を聞いた魁は、目を丸くした後、本当に嬉しそうに微笑むと、私の手に自らの手を重ね合わせてその体温を愛おしみながら私に言った。

「ありがとうございます、菜春様。

それでも、私は構いません。

ですが、どうか他の異性に目を向けないで下さい。

私だけを見つめていて下さい。

愛せとは言いません。

ですが、私だけをどうか見つめて下さい」

「それは貴方次第よ魁。

私は、恋というモノを知らない。

だから貴方がそれを教えて？

私を恋に落としてみせて。

貴方が私に溺れているように、私を溺れさせて見せて」

まるで宣戦布告。

私の言葉に一瞬驚くが、すぐに深い笑みを浮かべる魁。

その瞳は、獲物を捕えた肉食獣。

絶対に逃すまいとその目が私に訴える。

私は、早まってしまったのかもしれない。

ああ、後悔先に立たず。

「ふふふ、では覚悟なさって下さいませ。

それは遠慮なさらずとも良いという事ですよね？

貴方を私の虜にしてみせましょう。

愛しい私のたった一人のご主人様。

どうか、その瞳に私だけを映してください。

もう決して離しはしませんからね？」

不敵な笑み。

妖美に光る蜂蜜色の瞳。

私の髪を掬い取り、それに口づけを落とす。

熱っぽい視線に酔ってしまいそうになる。

ああ、とんでもない事をしてしまった。

だが、もうそれは後の祭り。

私と彼の攻防戦が幕を落とされた。

予兆

人が倒れている研究室の中、佇む一人の人影が一つ。

いや、人影というのはおかしいか。

何せ、俺は【人】では無い。

月夜に照らされ、あらわになるその姿。

黒い髪は白銀となり日本人特有の黒い目は、紫色に染まっていた。

ハハハ、傍から見たら化け物だな。

全ての準備は整った。

全員から【俺】の記憶は消し去った。

もう、俺の存在を知る者はココには居ない。

アメリカ政府も俺の事はもう把握しては居ない。

俺の戸籍なんぞ、もう存在すらしないのだから。

「主君、任務完了致しました」

影から現れる俺の配下。

ああ、そういえばあんな事も言ったなと遠い目で思う。

「っ、その傷はどうなされたのですか!？」

その人間ども…食い殺しても?」

「いや、こいつらの所為じゃない。
ちよっとした害虫に噛まれただけだ」

そう言っただけで変化を解けかけたアイツを制する。
全く、血の気が多くて本当に困る。

少しは俺くらいの余裕を持って欲しいものだ。

それにしても、菜春の傍に居るアイツ…。

名は魁と言ったか？

きつと菜春が付けたのだろう。

そもそもアイツには名は無かった筈だ。

戦を好んで、血を啜るのを生き甲斐としていたような奴が何故、俺の愛する菜春の傍に居るのか、不思議でならない。

孤高の存在だか、なんだか知らないが、若造が粹がりやがって…気に食わない。

あの程度で俺が死ぬと思って、図に乗るのもいい加減にしろってんだ。

手から滴る血を、舌で拭い傷口を封じる。

造作も無い作業。

痛みなんざもう何百年も昔に慣れた。

所詮簡単に死ねない身体なのだから。

何年生きたかなんてもう忘れた。

数えるのは、百を超えたあたりから辞めた。

老いる事の無い身体。

退屈な日々。

そんな中、訪れたのがアノ人間だったな。

怪異がまだ飛び交う世の中、人間は、最下層におり弱い存在だった。一番犠牲になるのは人間であり、怪異にとって一番力を得やすい食糧だった。

俺は、別に玉座になんか興味は無かった。

元から権力には無関心だったし、力は、誰にも劣らなかった。

血生臭い事は、別に嫌いではないが、雑魚を相手にするのが癪だった。

だから、洞窟の中で大人しくただ時が経ち、玉座に立つ者が決まるのを高みの見物していた。

そんな中、

奴が現れた。

ボロボロになった人間。

今にも死にそうな男。

よくもまあ、俺の元までたどり着けたと少しばかり関心した。

まあ、俺も暇だったし叶えてやらなくもなかったが、怪異と人間。

そもそも格が違う。

簡単に願いを叶えてやるのは、お門違いだろう。

百年も家系を守れだなんぞ、人間風情がおこがましい願いをしたものだ。

あいつの血肉1つじゃ足りない。

そう思い、他に何をくれるのだと奴に溜息混じりに聞いた。

すると、自分の子孫を嫁にやると言いだした。

百年後に女が生まれたの話だが、まあ、男と女の出生率を考えたら女の方が多いに決まっているし、堂々と生贄を差し出すその発言が面白くて暇つぶしにもなると思い承諾した。

そして、俺はアイツを喰った。

ただの暇つぶし。

奴の血肉は他の人間と異なり上位の怪異と同じほどの妖力を得られる稀な存在だった。

おかげでその怪異の頂点とやらに君臨する誰かと同等ほどの力があると自負している。

記憶を操り、家族として中に入っていた。

人間の勉強は、百年の中さほど変わらなかったし、覚えるのにも苦勞しなかった。

昔とは程遠い口調になったのも多分環境に順応した為だと思う。

3代目の子孫の息子として記憶を弄り、俺は今に至るわけだが、あと十数年で契約が切れるとなると、3代目の女を嫁に貰う事になるのかと若干頭が痛くなった。

息子としての俺が、夫になると分かったらこの女はどんな顔をするのだろうと少々不安ではあったけど、それは杞憂に終わった。彼女との間柄に娘が誕生したのである。

特別美しくも無く、本当に平凡な女だと思った。

だが、これも100年前の契約。

嫁に貰うということは、どうしてもいいということ。

別名、【生贄】だ。

気に食わなければ、殺してしまえばいいだけの話。

人間の世界での暇つぶしは中々楽しかったし、まあ、最後くらい【兄】として振舞おうと将来の【嫁】を【母】に渡され、抱いたのは16年前の話だ。

本当にどうでもいいと思っていた。

ただ可哀想にと憐れんだ。

生贄として捧げられた娘として、俺は、菜春を見ていた。

徐々に成長していく【妹】。

舌つたらずの口で最初に口にした言葉が自分の名だった事に対して不覚にも感動してしまったのを今でも覚えている。

それからは、【兄】として、菜春の傍を片時も離れずにいた。

大切な生贄だ。

傷つけられては困ると思っていた。

いや、そう思い込もうとしていたのかもしれない。

学校という面倒な場に行かなければならない時は、臣下を使って護衛させたほどだ。

それほどまで俺は、彼女に入れ込んでいた。

自覚は：無かった。

彼女が隣に居るだけで心が安らぎ、名を呼ばれるだけで胸が高鳴った。

これを何と呼ぶのか、何百年も生きてる癖に俺は知らなかった。

それを自覚したのは、10年前の忌まわしい事件。

不覚だった。

アノ怪異の領域だとは知らずに踏み入れてしまった。

その為、俺の臣下は役に立たず、ひたすら俺の脚で探し続けた。

死んでしまうと思った。

大切な大切な彼女を失うのを想像するだけで、気が狂いそうになった。

他の怪異の領域に踏み入れるのは自殺行為だと知っていた。

それだけで拒絶反応により身体を蝕まれるからだ。

だが、それでも構わなかった。

自分の命より、彼女の命が最優先だった。

日が刻々と過ぎるにつれて、俺は、正気を失っていた。

死んでしまうと止める臣下を薙ぎ払い、只管、菜春を探したのを覚えてる。

彼女が見つかった時、心から安堵した。

生きている：手が暖かい。

当たり前の事がこれほどありがたい事だと実感した。

あの時、菜春が死んでいたら
きっとアノ山一帯を地獄絵図へと変貌させていただろう。
悲しみのあまり、正気を失って…。

菜春が目覚めて、俺を瞳に映し、俺に笑いかけた時、どれほどの
喜びを覚えたか。

その時俺は誓った。

絶対に彼女を守り抜いて見せると。

そして、気付いた。

俺は、彼女を【女】として愛しているという事を。

そして、時は満ちた。

契約が遂行される時。

ああ、どれだけこの日を待ち望んだ事か。

やっと【兄】という呪縛から解き放たれ、【男】として、【婿】と
して菜春を迎えに行く日をどれだけ首を長くして待った事か…。

急いで日本に帰らなければならない。

菜春の傍に居た男：アレは、間違いなく10年前の奴だ。
嫌な予感に胸がざわめく。

俺の菜春に手を出していたのなら、迷わずこの手を血に染めよう。
あまり血生臭いのは好まないんだけどな。

ああ、愛しい菜春。

今からお前を迎えに行くよ。

そして、その忌まわしい男から
お前を救いだしてみせよう。

早くお前を抱きしめたい。

お前の髪に顔を埋めたい。

滑らかな頬に手を滑らせ、清らかな唇を

貪りつくしたい。

16年も我慢してきた欲求。

今にも爆発してしまいそうだ…。

早く、早く戻ろう。

彼女が待つ

日本へと…。

「弥鶴様、用意は全て整いました。

菜春様を迎えに行かれるのでしょうか？」

「勿論だよ、流蛇（リュウタ）。

迎えに行くのは、満月の夜と決まっているだろう？」

「長い間、お勤めお疲れ様でした」

「ああ：本当に長かったよ。
早く菜春に会いたい：俺の菜春、愛しい花嫁」

空に浮かぶ月を見上げる。

かぐや姫のように大切に育てた彼女。

ああ、紫式部という人間が書いた、【源氏物語】の光源氏の気持ちがよく分かる。

作られた当時は、笑っていたものの、それを今は撤回しよう。

英語で愛しているという言葉を月にみたてとある日本人は訳したと聞く。

そいつは中々才能があったと思う。

美しい月を見て、愛しい君の笑顔を思い浮かべて俺は言う。

迎えに行くから待っていて。

「月が綺麗だな」

愛しているよ、

愛しい俺の菜春。

到来（前書き）

放置しませんでした←←

この小説は携帯HPでは完結しております。

それを此方に移行しているだけなので、続きが気になる方は、携帯HPを訪れて下さいまし。

アドレスは、<http://ip.tosp.co.jp/i.asp?imicro6onde>です。

mainというボタンから入ってお読みくださいませw

到来

「はあ、今日も学校つかれた」

「朱利、お疲れ様」。

いつも本当にありがとうね」

「そんな情けは、狐には不要ですよ菜春様。

前回、菜春様を守れなかった、利用価値、存在意義、皆無ですからね」

「主君：俺の事、嫌いなんですか？」

「おや、やっと気がつきましたか？」

笑顔で言う台詞じゃないからね、魁。

こんな会話が更衣室事件以来繰り返されている。

いい加減、許してあげようよ魁。

そもそも女子更衣室とは男子禁制の聖地なんだよ？

純情な朱利には踏み込み不可能な境地だって。

っていうか、乗り込んで来れる方がおかしい。

溜息をつくのは、これで何度めだろう？

幸せがドンドン逃げていくのは遠慮したい。

そういえば、魁が来てから弥鶴からの電話が来なくなった。

アノ弥鶴から電話が来ないだなんて、天変地異が起こる余興なんじゃないかと思った。
音沙汰一切無し。

本気で不安だ。

いや、彼女でも出来たのならいいんだよ。
だけど、何か事件にでも巻き込まれたのかなとか血の分けた唯一の兄妹にだけ本当に心配だ。

あんなシスコンな弥鶴だけでも、とても私を大切にしてくれるのは重々承知しているし、だからこそ毎日、日本を離れてもわざわざ国際電話を使ってまで私と喋ってくれていた。

たとえば、後日に学論の発表会があらうと、大統領のパーティーが控えていようと、私の為なら全てを犠牲にして来た弥鶴。それが申し訳ないのと同時に、凄く嬉しかったのも事実。

ああ、私もブラコンなのかしら。

少々自分に対してすごく不安になってきたよ。
浮かない顔をした私を気にしたのか、

魁が私の顔をのぞいてきた。

「菜春様、顔が優れないようですが、
どうかなさいましたか？」

アノ件以来、特に変わらない魁。
ただ少々過保護度が上がった気がする。
後は、私が妙に意識をしてしまい、
ちよっと戸惑っているだけ。

「な、なんでも無いよっ！」

ああ、熱が顔に上ぼっているのが分かる。
それを見て、楽しそうに笑う魁。

絶対確信犯だ。

伊達に長生きしてないな。

「クスクス、この顔がそんなにお好きですか？
なら、もう少し近くで見せしても宜しいのですよ？」

そう言って、吐息が掛かる距離まで
詰めてくる魁。

もう私の頭は、沸騰して気絶寸前だ。

こういうのに免疫が無いので本当に困る。

無駄に端整な顔立ちと、

色気という名のフェロモン満開の魁だと

余計に私は反応してしまう。

それがまた魁を喜ばせてしまうという悪循環。

「ああ、それともこの声で愛を囁きましようか？

他の人間の女が、声がいいと言っておりました。

菜春様もこの声が好きですか？

どんな言葉を囁けば、

貴女の頭は私だけを考えてくださるのでしょうか？」

そつと唇を耳に口づける。

びくつと反応してしまう自分の身体が恨めしい。

共働きの両親をこの時ばかりは恨む。

朱利は、魁がこのようなになると、

空気を読んで何処かに消えてしまう。

助けて欲しいのですが、切実に。

あわあわと私が焦っていると、
微笑んでいた魁の顔から表情が消えた。

あまりにも突然だったので
頭を傾げて魁に声をかける。

「どうしたの、魁？」

一向に口を開かず、表情一つ動かさない。
おかしい…いつもなら、絶対何かしら
反応を示す筈なのに…。

魁は、私から視線を逸らし
玄関のドアへと矛先を向ける。
そして私を守るように
私の身体を背に回し、
一言呟いた。

「ついに…来ましたか」

え、誰が？

そう問おうと口を開こうとした
次の瞬間

爆風が襲った。

魁に関わって以来、
こういうことばかりなような気がする。
動じない自分に少々呆れた。

凜として立ち、
扉があった場所から視線を逸らさず
冷たい瞳で射抜くように見つめる魁。

パラパラとコンクリートが落ちる中
魁はポツリと呟いた。

「…中々の手慣れなようですね。

朱利は、一体何をしているのだか」

そういうと、何かが此方に投げられる
ドサリという音が私の真横にした。
音の矛先へと視線を向けるとそこには、

美しい金色の髪を赤に染めた朱利が居た。

人間とは、本気で驚くと

声すら上げられないらしい。

私は、ただ動かない虫の息の朱利を
茫然と見ていた。

「おやおや、随分と手荒いご登場ですね？
貴方なのでしょう？
ずっと菜春様を監視なさっていたのは」

埃が地面に落ち、視界がクリアになる。

人影があつたその場所には、
水銀の長い髪を一つに束ね、
見事な刺繍がほどかされた
和と中を混ぜたような服装をしていた。

瞳は見事な山吹色で鋭くつり上がっていて、
蛇に睨まれた蛙のごとく私は動けなくなってしまった。

なんて、恐ろしいほど美しい人。

いや、この人は【人】では無いと
直観的に思った。

朱利をこのように出来る【人間】なんて
何処にも居る筈はない。

居たとしても、この人は…

魁達と同じ怪異だ。

「お前ごときが菜春様の名前を呼ぶな、愚か者」

怪異の頂点に君臨していたという

魁を見ても動じず、
冷めた瞳で魁を見つめる彼。

一体何者なのだろうか？

「おや？私をご存じ無いわけでもないでしょう？
貴方と私とは【格】がそもそも違う…。

たとえ引退した身とはいえ、
力が衰えていると思ったら大間違いですよ。
…白蛇ごときが」

「臣下がこの程度の実力では、
お前の実力なんざたかが知れている。

我が君が力を振うまでも無い。
菜春様を迎えに参った。
さっさと道を開けろ」

「それは出来ないご相談ですね？
私は少々怒っているのですよ。

たとえ出来そこないで役立たずの臣下とはいえ
百年近く私の元で働いた者を
ボロ雑巾のように放り投げられたら
いくら温厚な私でも腕の一本？ぎ取るくらいは
致しますけれど？」

「出来るものならしてみろ。
だが、それをして菜春様が喜ぶのならばな。

菜春様は、血を見るのを極端に嫌がる。
共に居ておきながらそれすらも察せないのか阿呆が」

「…お前に菜春様の何が分かる？
我が主君の1つも知らぬ戯けにこれ以上かける言葉は無い。
それ以上無駄口を叩くならば：

喉を掻っ切るまで」

ザワザワと魁の周りが騒ぎだす。
魁の手が【人間】のそれとは異なり
獣じみたモノになる。

目の前に居る怪異は一体何モノなのだろう？
私のことを随分と知った口調だ。
そして、私が

血が嫌いなのを知っている。

幼い頃から血は苦手だった。
弥鶴が怪我をした時には、泣いたほど。
女性にある月に1度来るアノ日が初めて来た日は、
思わず弥鶴に泣きついたほどだ。

軽くアノ後笑われて女になったと言われたけれど。

今思えば人生の汚点だ。

だが、そんな事はどうでもいい。

現在進行形で血生臭い、朱利の時とは比べ物にならない事が行われようとしているのがヒシヒシと伝わってくる
双方の殺気から感じ取れる。

目の前の【白蛇】と魁が言った美青年は、

【我が君】の為に私を迎えに来たという。

だが、私には生憎、怪異の友達は居ないし、
知り合いも居ない。

一体誰の事を指しているのだろうか？

魁が動き、手を振る。

目の前の青年は、一瞬にして
立っていた場所から立ち退き、
攻撃を回避する。

魁が手を振った地面には、
深い亀裂が入っており、その威力を示していた。

ごめん、ここ室内なのを忘れないで。

現実離れた戦いの中、
冷静に突っ込める当たりまだ
思考回路は正常に作動しているようだ。

今度は、炎の玉をいくつか出すと
青年へと飛ばす魁。

彼は動く事無く、何処から共なく
激しい濁流が現れ、それによつて
炎は沈下されてしまった。
呆れたように溜息を付くと、

「貴方は、馬鹿ですか？
一応屋内で炎を使うだなんて
自殺行為も甚だしい。
火事にでもなったらどうするつもりです？
菜春様に万一の事があっては遅いのですよ？」

「黙れ、蛇が。
私は、虫の居所が大変悪いのですよ。
それにご心配なく。
そんな状況になったとて、

菜春様だけは守り抜く自信はあるので」

「その過信が己を滅ぼすんだよなー、魁」

室内に馴染みのある声が響いた。
緊張感の欠片も無い、余裕の声。
私が生まれてから慣れ親しみ、
安心感をいつも与えてくれる声。

まさか：

「・・・み、つる？」

青年の後ろから、
私を溺愛しアメリカに居る筈の兄が
笑顔で私に向かって手を振っていた。

「み、つる…？」

な、なんで日本に帰国してるの？」

「それにしても、家大改造したんだな。

家具も変わってるし：随分と外観も変わってる。
いつの間にか、招かざる客人も来てるっぽいし。
：：菜春？ どうして俺に相談しなかった？」

すっかり忘れていた。

そうだ、弥鶴は魁の術にかかっていない。

つまり記憶は操作されておらず、

魁の存在はおろか、家の外観が何故変わったのかも知らない。

言いわけが思いつかず、言葉につまる。

そんな私を見て、ふんわりと微笑むと

「まあ、そんな気難しい顔するな。

俺はちゃんと分かってっから。

その変化解けかかってんのが、魁で

死にかかってる九尾が朱利。

どっちも菜春が付けた名前なんだよな？」

「ど、どうしてそれを：：」

「当たり前だろ？」

菜春の事なら全部知ってるよ：：

何から何まで、髪の毛一本残さず。

だって：俺の菜春だから」

その瞳は、まるで愛おしい人を見つめる者。
兄としてでは無い、【男】の瞳。

ゾクリと背筋が疼き、
熱っぽい視線に思わず顔が赤くなる。

相手は、弥鶴なのに

なんで私はこんなに取り乱してるのだろう？
いつもふざけて、シスコンの兄な筈なのに、
目の前に居るのは…

「愛してるよ俺の菜春。

百年前からお前が俺のモノになるのをずっと待っていた」

今度こそ私の心臓は止まるかと思った。

【百年前】？ 【俺のモノ】？

待って、弥鶴は私の兄で、それで人間で…。

ああ、でも待って。

何で弥鶴は…

紹介しても居ない魁と朱利の名を知っているの？

家がこんなにも変わったのに動揺した様子は無い。
ましてや、人外に近くなりつつある魁を見ても

顔色一つ変えず、この惨状を見ても
ケロリとしている。

神経が図太いなんていう次元の話じゃない。
オカシイ：普通の人間ならココで取り乱す筈。
私だって発狂寸前の所を理性で留めている。
血まみれの朱利を見た時、
恐怖に鳴き叫ばなかった事を褒めてやりたい。

弥鶴は、普通の人間で怪異の事なんて知らない筈。
私と同じ人間：だよな？

百年前：その言葉がどうもひっかかる。

疑問が疑惑に代わり、そして核心へと近付く。

「弥鶴：ど、うしたの？

いつもの弥鶴らしくないよ？」

「俺は俺だよ、菜春。

ずっとこの日を待ち望んでいた。

百年前の契約を果たされるこの日を。

愛しい俺の菜春：お前を迎えに来たよ。

俺がこの世で唯一愛した女だ」

「わ、私達兄妹なんだよ？
そんなの：おかしいよっ」

クスリと笑う弥鶴。

いつもの爽やかでふざけた雰囲気は、

何処にいったのやら、

私を引き込むような色気が取り囲んでいた。

「菜春：賢いお前ならもう気付いているんだろう？」

ああ、認めたくない。

嘘だ、絶対に嘘だ。

でも、状況が、彼の言葉が

たった一つの真実へと導く。

「俺は、お前の兄貴じゃない。

血なんて繋がって居ないし、ましてや人間じゃない。

俺は、太古から祭り上げられてきた怪異。

人々は、俺を：【八咫烏^{ヤタガラス}】と呼び崇める」

ずっと一緒だった弥鶴。

唯一無二の兄妹だと思っていたのに、

血は愚か、人間ですら無いだなんて…。

誰か嘘だと言って。

「う、そだ。

だって、小さい頃からずっと一緒に、
弥鶴は、私と同じように成長して…」

「変化なんて俺くらいの怪異になれば自由自在なんだよ。
何千年生きてると思う？
そこに居る小童の数倍は生きてるんだ」

「じゃあ、騙してたの？
ずっと、ずっと私を騙してたのっ!？」

「…結果的にはそうなる」

泣き叫びたくなった。
耳を塞いで、目を瞑って、喚きたかった。
現実から全てを逸らして、
いつその事、消えてなくなりたいと思った。

信頼していたのに…。
ずっと守ってくれていた弥鶴。
私を大切にしてくれていた弥鶴。

それは全て演技だったというの？

「なんで騙してたの！？」

お母さんも、お父さんも騙して…っ」

「それがお前の先祖との契約だったからだ。
百年間、子孫を守るというな」

また契約。

契約ってそんなに大事なの？
人の心を簡単に踏みにじるほど？

「・・・てたのに」

「え？」

「弥鶴のことっ、信じてたのにっ！！」

頭を抱えて泣き叫ぶ私。

それを見かねて、

魁が私へと近づく。

だが、それは

「下僕に分際で俺の菜春に
近づくんじゃねえよ…」

弥鶴の一言で中断された。

先刻まで大人しくしていた、

【白蛇】という怪異が動き出し、

魁に鋭い剣を向けて突進してきた。

何事も余裕でこなして来た魁が、

それを止める為に私から離れ

食い止めるべく、何処から出したのか

日本刀で食い止める。

剣と剣がぶつかり合う音。

俊敏な動きに私の動体視力がついていけない。

いや、それ以前に私の心は

別の事でいっぱい、いっぱい

魁が危険に晒されているというのに

私の頭は、色々な事でごちゃ混ぜになっていた。

「菜春：俺は確かに人間として過ごして来た。
怪異なのに、だ。」

お前を騙した事には変わりはない。
だが、これだけは言える。

お前と共に過ごした16年間で注いで来た愛情
触れ合ってきた時間は、全て真実だ。
偽りなんて微塵も無い」

「そんな言葉：信じられないよっ。
だって、弥鶴は：怪異なんでしょう？
私の先祖との契約で守って来ただけで：
何で：何で私ばかりっっ」

なんで私ばかりこんなに苦しまなきゃならないの？
普通の兄妹だと思ってた。
馬鹿みたいに笑って、
からかいあって、喧嘩して：
なのに、それは全て契約事項？

ふざけないでよっ！！

消えたい。
夢であればいい。

こんなの非現実的すぎる。
怪異だなんて伝説上の生き物が
そもそも存在するなんてこと
ありえないのに…。

私のすぐ傍に居たなんて…っ

「菜春…お願いだ、話を聞いてくれ」

「嫌っ!! 近寄らないでっ!!」

伸ばされた手を弾く。

拒んだ事の無い優しい手。

私をずっと守ってくれて、

包み込んでくれた弥鶴の手。

だけど、今はそれが酷く憎たらしい。

「これ以上近づかないで…」

…愛した事なんて無いのでしょうか？」

その言葉に弾いたように反応した弥鶴は、私の腕を強引に掴み、そして抱きしめた。それから抜け出そうと、突き放そうと必死に胸を押し返そうとするが、弥鶴の腕の力が更に強まり、叶わなかった。

「んなわけねえだろ馬鹿っ!!」

菜春：お前と俺との間はそんな薄いモンだったのか？

16年間の年月は、そんなに価値の無いものだったか？

本当の兄妹じゃないと言うだけで、

嫌われるような存在だったのか、俺は？」

泣きそうな声。

不意に顔をあげると、

そこにはいつも笑顔の弥鶴では無く、

今にも壊れてしまいそうな

弱くて、切なさそうな顔をした彼が居た。

「菜春、俺はお前を愛している。

100年間もの間、お前が俺のモノになるのを待っていた。

兄妹愛なんてもんじゃない。

俺は、一人の【男】として【女】のお前を愛しているっ」

頭が真っ白になった。

弥鶴が：私の事が好き？

愛している？

妹では無くて：一人の女として？

「う、嘘…」

「嘘じゃないっ！！」

この日をどれだけ待ちわびた事か：ッ

こいつらが菜春の傍に居たというだけで、

虫唾が走り、すぐにでも帰国して

お前を連れ去りたかったさ…。

俺だけの菜春なんだ：誰にも渡さない。

絶対に：誰にも」

そこまで私を愛しているなんて、

ちっとも気付かなかった。

どんな思いで私の傍から離れたのだろうか？

どんな思いで魁と一緒に居る私を

見守っていたのだろうか？

ふわりと浮遊感が襲う。

そして、気がついたら私は、弥鶴に横に抱えられていた。

いわゆる【お姫様だっこ】という形で。

「でも、もう我慢する必要も無い。

契約上お前はもう俺のものだ。

俺の菜春…愛しい菜春。

俺が生を受けてから唯一渴望する大切な菜春。

愛しているよ…俺の花嫁」

そういうと、瞳を閉じて弥鶴の唇が私のソレと被さった。

優しいキス。

兄から、【男】として私が弥鶴を意識した瞬間だった。

狂気（前書き）

大変お待たせしました。

お気に入り200超えてびっくりです。

魁視点でお送りいたします♪

ヤンデレ化しちやります。

狂気

目の前に繰り広げられている光景はなんだ？
菜春様が、アノ男に接吻されている？
彼女が、アイツの花嫁？
アイツのモノ？

ふざけるな

「余所見してるなんて余裕ですね、魁」

ああ、勘違いも甚だしい。
ずっと彼女を思っていた？
それは自分も同じ事。
許せない。

自分以外の誰かが彼女に触れるなんて、
彼女を視界に入れるなんて。

自分が居て置きながら、
彼女に触れる事を許してしまった。
そんな自分が何より情けなく、
腹ただしい。

目の前で自分を呼びすてにし、
攻撃を仕掛けてくる白蛇。
鬱陶しい。

何より、自分は機嫌が悪い。

余裕なんて今は無い。

心の中は荒れ狂っている。

菜春様が他人のそれに触れる瞬間を
見てしまったのだ。

憎い。

奴が憎い。

早く菜春様を奪い返さなければ。
その為には、

「邪魔だ、消えろ」

血の飛沫が降り注がれる。

懐かしいこの匂い、暖かさ。

若かったアノ頃を思い出さされる。

只管、力を追い求め

自分の前に立ちはだかる
全てを薙ぎ払っていたアノ頃。

菜春様の手前、
血が苦手だという彼女の手前
遠慮をしていたが、
もう、その必要性を感じない。

菜春様。
我が主人。
愛して止まない我が主人。
今すぐ助けに参ります。

腕を胴体から抜くと
更に血が流れる。
血が自分の顔に降り注がれ
服が汚れるが問題は無い。

昔の服装に戻ればいいだけの話。

動きにくかったスーツから
太古から着なれている
着物に着替える。

血は、風と水で吹き飛ばせば問題ない。

操れるのが、火だけだと思ったら大間違いだ
己の力を過信するなんぞ愚かな白蛇よ。

ドシャと派手に地面に倒れる。

血の海が自分の足元まで及ぶ。

ああ、血で汚れてしまうではないか。
汚らしい。

まだ生きては居るが、

もうこれで反撃は出来ないだろう。

視線を奴から離し、

菜春様へと向ける。

ああ、愛しい菜春様。

何故、貴女の瞳は私を映していないのですか？

頬を紅色に染めるのは私だけでいい。

触れるのは私だけ：

なんで簡単な事に気がつかなかったのだろうか？

菜春様に触れた輩は、

消してしまえばいいだけの事なのに。

気が付いたら本能の赴くままに体が動いていた。獣のごとく獲物に向かって爪を突き立てていた。仕留めたと、そう思った。

落胆したと同時にそんな相手に菜春様に触れることを許してしまったのかと自分を責め立てた。

所詮その程度の実力だったのかと、あまりの手応えの無さに疑問を抱いた。

だが、自分が突き刺した

相手からは血が噴き出している。

生気は感じられない。

しかし、違和感がぬぐえない…。

そう思った次の瞬間、

「危ねえなあ…俺にどうしようが構わないが、
もしも菜春に当たっていたらどうするつもりだ？
てめえは、馬鹿か？」

しまったと思った次の瞬間、

背中に鋭い旋律が走った。

久々だったとはいえ、油断していた。

自分が仕留めたのは本体ではなく、ましてや、そこには何もなかった。

た。

幻術か…小賢しい真似をつ！

殺気を込めて後ろを睨みつけると、そこには菜春様を抱きかかえる
八咫鳥。

変化を解き、本来の姿に戻っていた。

銀髪に堇色スミレの瞳が冷やややかに自分を見下ろしていた。
その威圧感に不覚にも冷や汗をかく。

何故、今まで彼は表に出なかったのか、

それほどの力がありながら、

何故百年前の戦で出くわさなかったのか、

何故頂点を極めようとしなかったのか、

自分には不可解なことばかりだった。

本来ならばすぐに治るような浅い傷。

だが、何故か治癒力が衰えている。

妖力は、十分にある筈だ。

なのに…何故だ？

菜春様に触れているその腕を耒り取ろうと
無理に体を起こす。

だが、激痛が体を襲い、体の動きを止めた。
その様子を見て、奴は笑った。

「動かないほう懸命だぞ？」

陽の恩恵を受けている俺が施した傷だ。

いくら力があるとはいえ、対局の陰の恩恵を受けているお前には、その傷は治せないし、その状態では動けない」

反応が無い菜春様を見ると、その瞳には光が宿されていないかった。まるで傀儡のようにダラリと忌々しくも奴に体を預けている。

「菜春様に妖術を使う、卑怯者が太陽の使者とは笑えるな。恥ずかしくはないのか、八咫鳥よ」

「菜春を手に入れるためなら、どんな罪でも背負えるさ。

愛する菜春…やっとな手に入れた」

そして、恍惚とした表情で菜春様の額に唇を落とした。

こんなに近くにいるのに

また触れる事を自分は許してしまった

こんな男に

愛する菜春様を

主人を、菜春様をまんまと取られて

一体、私は何をしている？

自分が全てを犠牲にしてまで

渴望した女をいとも簡単に奪われ

拳句の果てに接吻する姿を

見せつけられた？

それを私が許しただと？

断じてあっては、ならない

彼女は、私のモノだ

他の誰でも無い私だけの主人

心も体も忠誠も全て捧げ

愛し抜くと決めた唯一の女性

それを奪われてなるものか

これ以上、触れることを

許してなるものか

こんな傷がなんだ

相性がなんだというのだ

こちらが不利だからなんだ？

それだけの理由で

お前は彼女を奪われていいのか？

##CS## 『カイ』

『魁の意味は、

頂点を極めた者を指すの』

『貴女にぴったりの名前でしょう？』 ##CE##

そうだ、私の名は【魁】

頂点を極め

全ての上に君臨する者

負ける事なぞ許されない

それこそ名を下さった菜春様に

顔向け等できない

ならば、全てを壊そう

彼女と自分の間に立ちはだかる

全ての障害を粉碎しよう

持てる力を全て出し

貴女を奪回してみせましょう

愛しい菜春様

我が主君

我が最愛であり最上の主君

我は今、全てをかけましょう

ザワザワと周囲が揺れる。

揺れているのは、風景か。

それとも自分か、もはや分からない。

考えるのも面倒くさい。

理性を失い、本能のままに。

我が主を、愛する彼女を奪回する為に

忌まわしき姿へと身を変えよう。

封印していた何かが切れる音がした。

次の瞬間、闇に包まれる全ての視界。

何も無い、広がるのは虚無の空間。

次の瞬間、

身を引き裂くような激痛が襲った。

あまりの激痛に雄叫びを上げる。

身体が熱い。

骨が折れ、再構成される音がする。

血は手に滴り落ちる。

その手を見れば、変わり果てたその姿。

ああ、やはり姿を変えようとも、

本質は化け物なのだと自嘲する。

肌は浅黒く染まり、鋭く尖った爪。

視界に映るは、山一つ潰せる扇子。

相手の心を聞き取れる尖った耳、

死を恐れる声を聞きなれた尋常ならぬ聴覚。

ああ、この姿だけには戻りたくなかった。

たとえ意識が無いに等しい主君であれ、

決して見せたくは無かった

化け物と罵られたこの姿を。

足は変形し、死を思わせる黒の翼が背に生える。
化け狐の変化を解いた九尾の姿なんぞ
この身と比べれば可愛いものよ。

妖気が大量放出されると共に、
塞がれる傷口。

これでもう動けない心配は無い。
後は、

目の前の標的を切り裂くのみ。

暗闇に飲み込まれた意識の中、
只管自分の本能が頭に反響する。

殺せと

血を啜れと

愛する者を奪い取れと

どんな手を使ってでも。

闇に飲み込まれた自分には
成すすべも無く、
それに身を投じる。
愛する者が戻るのならば、
この手を血に染めても構わない。
我が主人に触れたその罪

「死んで償え」

地の底から響いたような低音。
これは自分の声なのだろうか
意識しなければ気付かないほど
変わり果てたその声色。

憤怒にまみれ、
悔しさに飲まれ、
愛しい彼女しか目に入って居ない。

正しく獣と呼ぶに相応しい。

閉じられていた瞳を開けば
クリアになる視界。

先刻まで明るかったその世界は、
我が妖気によって薄気味悪く歪んでいた。

驚愕の表情を浮かべている八咫烏。

太陽の化身と呼ばれる神の使い。

それは私の対となる者。

神に抗い、善人を喰らい、
己の本能のままに力を欲し、
怪異としての名に相応しく、
人間に恐れられた自分。

八咫烏は、その自分の
神により、人間により
与えられたその名を口にした

「ついに本性を現したか。

三大悪妖怪に名を連ねた大妖怪

オオデング
【大天狗】」

この姿にだけはなりたくなかった。
自分の罪を見せつけられる外見。
化け物の名に相応しい、
生き物を殺すのに長けた構造。
黒い翼は、まるで死骸を漁るカラスのようだと
怪異にも人間にも耳が腐るほど言われてきた。

見下した目で見る八咫鳥。
まるでゴミをみるように、
愚かだともいうように嘲笑う。

「醜い姿だな、魁。
玉座という甘い蜜に溺れた結果が
その姿だとは…笑わせてくれる」

「…菜春様を離せ、鳥頭」

「どの口が利いている？
それにどちらが有利か
お前にはまだ分からないのか？」

有利？

陽と陰の關係の事を奴は刺しているのか？
自分にはそんなモノは關係無い。
相性なぞ、打ち消してくれるわ…。

更に妖氣を放出し、
空氣が重くなる。

この空間内は、我が領地に入った。
どちらが有利かは歴然としている。

だが、それに焦った様子もなく、
無駄な抵抗だと言わんばかりに
楽しそうに笑う。

馬鹿な奴と八咫鳥は言った。

「お前は絶対に俺に勝てない」

「戦ってもおらぬのに、
己の勝利を確信するとは愚かな…っ」

腕を振り上げ、扇を振う。
爆風が舞い上がり、
菜春様の身体を持ちあげる。
神通力を使い、菜春様の身体を此方に引き寄せる。

彼女の温もりに心底安心し、
ほっ、一息ついた。
やっと奪い返せた。
愛しい我が君。

この世で唯一愛する人…。

爪で傷つけないように
細心の注意を払いながら、
頬にそっと触れた。

「…ぐあっ」

激痛が脇腹に走る。
人の至福の時を邪魔するとは、
空気の読めない奴よ…。

貫通している剣を見て
後ろを振り返ると、
そこには、怒りの焰に瞳を
ギラつかせる八咫鳥が居た。

「き、さま…菜春様に、

その剣が当たったかどうかというつもりだ」

「そんなへまする訳ねえーだろ。

その薄汚い手で菜春を触るな、

身分を弁えろ、脳味噌入ってんのか？」

一気に剣を抜かれ、噴き出す血。

我が血で菜春様に付着する。

ああ、我が血に染まっている…。

なんと、まあ

美しい…。

自分の色に染まっているという錯覚を覚えた。

だが、彼女の衣服を汚すわけにもいかず、

またこれから起こるであろう激戦にそなえ、

そつと菜春様を壁際に座らせた。

「とつとつその面こつちに向ける。

これ以上、お前の瞳が菜春に注がれたら

菜春が汚れる^{ケガ}」

「それは此方の台詞だ。

お前の責務はもう終わったのだろうか？
だったら用は無い筈だ。

百年もの間御苦労だったな。

我は、彼女と【契り】を交わした。

永遠と彼女の傍に仕えると言う契りだ。

今度は、我が彼女の身を守るが故、
安心するが良い、とっとと失せろ」

「馬鹿かお前？

俺の契約は、そんな【守る】だけで
終わるわけねーだろ。

俺の百年は命1つじゃ安すぎるだろう？」

「：さっさと言え」

「契約を持ちかけて来たそいつは、

百年後、自分の子孫を【嫁】に

やると言っただよ。

そして、百年経った今、

子孫の末裔は、菜春のみ。

そして、幸いなことに彼女は女だ。

：これ意味分かったよな？」

嘘だ。

信じたくない。

まさか、菜春様はコイツの…

「百年の時が経った。

俺は菜春を花嫁として迎えに来たんだよ。

残念だったな。

愛しい俺の菜春は、もう俺のモノなんだよ」

勝ち誇った笑みで

絶望に落とされた自分を笑う。

怪異にとって【契約】とは絶対的なモノ。

その【契約】は絶対に破られない。

この場合、菜春様を自由にする権利は、
全てこの八咫鳥にある。

【嫁】とは言いかえれば【生贄】だ。

所有件は、コイツに明け渡された…。

ならばコイツを消せばいいだけの話では無いか？

「おっと、俺を殺すとか考えるのは
辞めておいた方がいいぜ？

俺を殺せば、契約上
菜春も道連れに死ぬ事になる。
それはお前は、望まないだろう？」

何という事だ…。

恋敵を殺す事すら叶わないというのか？

自分は、ただの主従関係。

それに対して相手は、

菜春様とは婚約の儀を交わせる身。

誰か、嘘だと言ってくれ。

「残念だったな、魁。

お前は、菜春の護衛役として生かしてやるよ。

精々、俺と菜春が愛し合う姿を、

指咥えてみるがいいさ」

最悪だ。

契約を無きものにするには、

怪異の口から【契約を破棄する】と

言わせなければならない。

だが、コイツは絶対に口にしないだろう。
あれほど菜春様に執着している奴だ…。

なんて残酷な運命だ。

10年前の自分が今の自分を見たら
きっと笑うだろう。

娘一人に何を絶望する事があると…。

だが、知ってしまった。

愛する事を知ってしまった。

愛おしいという気持ちを知ってしまったのだ。

絶望。

悲しみ。

悔しさ。

痛み。

怒り。

経験した事の無い

様々な感情が交差する。

身を引き裂かれるような痛み。

こんな現実を自分は望んで居なかった。

何故、彼女でなくてはならなかったのだろうか？

何故、自分は彼女を愛してしまったのだろうか？

何故、なぜ、ナゼ？

悲しい。

また一人取り残されるのか。
愛の無い中をさまようのか。

思考が停止する。

こんな現実見たくはない。
こんな世界は、いらない。

もう、どうでもいい。

考える事を放棄した次の瞬間。
何かが切れる音がした。

悲嘆（前書き）

連続投稿。

悲嘆

重い空気。

息苦しさを覚え、

濁った視界をクリアにすべく

何度か瞬きをした。

ああ、これはまだ夢の世界なのだろうか？

そう思いたいと強く願いながらも、

変わり果てた弥鶴の姿を見て、

ああ、やはり彼は怪異なのだと再認識した。

美しい白銀色の髪、

タンザナイトを思わせる澄んだ瞳。

その姿は、神々しく、

私とは似ても似つかなかった。

頭が重い。

回転が鈍い。

驚愕に満ちた顔で弥鶴が視線を送る先を

ゆっくりと顔を向けると、

そこには…

渦々しい【何か】が居た。

それを中心に、歪みが生じているのが分かる。
室内は、うす暗く、光が差し込む隙間は無い。
不気味な色に染まった世界に
私は恐れを抱き、
それを発しているであろう、【ソレ】に対して、
恐怖を覚えた。

「…本当に三大悪妖怪の名に相応しいよ、大天狗」

弥鶴が呆れた口調で喋る。
瞳がこちらに向けられる。
怖い。
私を襲う殺気。
負の感情を具現化したような世界。

一体【アレ】は何？

現状を確認すると、私は壁に身体を預け
床に座り込んでいた。

大天狗と呼ばれる恐ろしい姿のモノ。
肌は、浅黒く、目は不気味に赤く光っており、
全てを憎んだように殺気立っている。
袴の上に武士の鎧を被り、一本歯の高下駄を履いていた。
その背中からは、悪の化身のような
【死】を思わせる黒翼が生えており、
正に死神を具現化したような姿だった。

アレが天狗？
随分と思っていたイメージとは違う。
鼻は確かに高いが、
外人のような鼻の高さであり、
人間との差異はさほど無い。
日本人でも今ではあれくらいの高さは居る。

端正な顔立ちながらも、
獣のような姿。
鋭い爪が鈍く光る。

ソレに直面していたのは、他でも無い弥鶴だった。

静寂に包まれ、

二人は対峙し合う。
どちらも動かない。
ただ聞こえるのは、双方の息づかい。

ふと、大天狗と呼ばれるソレが私に目を向ける。
思わず、身体を構えるが、
その姿に恐ろしさと同時に、懐かしさを覚えた。
そして、そのおどろおどろしい姿とは裏腹に、
ソレの瞳が私を捕えた瞬間、

瞳が揺れた

何処か親しみのある瞳。
私は彼を見た事がある。
何処か遠い昔。
遠い記憶の中に封印された玉手箱の中。

ねえ、貴方は何故そんなに悲しそうなの？

私から視線を外したのを合図に、
二人は、姿を消した。

そして、激しくぶつかり合う金属音が鳴り響く。
音の大きさが力の威力を示す。

私の動体視力ではついていけない、
俊敏な動き。

生死を分ける激しい戦い。

緊迫感が、息をさせる事を忘れさせる。

ソレが獣の咆哮を上げると、
鋭い爪が生えた腕を振り上げ、
弥鶴の腕に突き刺す。

痛みに顔を歪ませる弥鶴を見て、
思わず悲鳴を上げた。

「弥鶴っ!?!」

私の悲鳴を聞いて、
脂汗をかきながら、私に向かって微笑む。
馬鹿、そんな事する余裕があるなら
怪我なんてするんじゃないわよっ!!

口パクで【だいじょうぶ】と伝える。
嘘つき。

床に滴る血の量は、
傷の重傷度合いを察するには十分だ。

私の悲鳴を聞いたもう一人の怪異は、
肩を振えさせた。
そして、頭に直接響いて来るその声。

『悲しい』

『一人ぼっち』

『愛されない』

『叶わない』

『愛してる』

悲しい感情が直接私に降り注がれる。
恐ろしいその姿とは裏腹に、
ソレは、悲しみに押しつぶされそうで、
もしも可能ならば、

抱きしめたい衝動に駆られた。

貴方は一人じゃないよと。

愛されていないなんて事はないよと。

自分をこれ以上傷つけないで…。

激しく矛盾している私。

弥鶴を心配しながらも、

得体も知らないソレに同情している。

恐ろしいと思いながらも、

愛おしいと思っている。

誰かも分からないソレに。

世界を拒絶し、
全てに絶望し、

愛を渴望している怪異。

悪妖怪と呼ばれるには、
不釣り合いなほど、
子供じみたその感情。
愛を欲しているだけの子供。

そんな人を私は知っている。
だけど、彼とは似ても似つかない。
そういえば、【彼】は…

何処に居るの？

「ゴホッ…死ぬ、かと思った」

「朱利っ!？」

血を吐きだし、脇腹を押えながら置き上がる。
痛みに顔を歪ませながらも、私の方へと足を進めた。

「菜春さん…怪我、ない？」

「私なんかより酷いのは朱利でしょ!？
そんな怪我して…心配させないでよっ」

そう言って温もりを求めて

朱利を抱きしめる。

驚きながらも、朱利は腕を私の背中に回して抱きしめ返してくれた。
そして、苦笑しながら

「今のこの状況見られたら俺、殺されますね」

と、抱きしめながら、私の頭を優しく撫でた。
顔を上げると、真剣な瞳で目の前の激しい戦いを見つめる。

咆哮を上げながら、只管攻撃する怪異。

弥鶴も防御しながらも攻撃を施すが、攻撃は最大の防御と言われるように押されている。

だけど、もう一方の怪異に確実に切りつける。

だが、それに臆することは全く無い。

自分が傷つくのもいとわず、目の前の敵の息の根を止める為だけに力を振っているその怪異。

あまりにもその姿が痛々しくて、見ていられなくなり、目を背ける。

対して朱利は、対峙している弥鶴と大天狗を見て、驚愕に瞳を一際大きくさせた。

そして、呟いた

「しゅ、くん…？」

一体何故？

何故、あれほど嫌っていたアノお姿に？」

【主君】？

彼がそう呼ぶ人を私は一人しか知らない。

だけど、私が知っているその姿とは似ても似つかない、寧猛さ。

私を知っている彼は、私の事となると籬が外れるけれど、いつでも紳士的で、優しくて…。

私を愛していると無邪気に笑う人。

だけど、目の前に居るのは、身体をボロボロにさせながらも、血を手染め、殺気立たせ、憎しみに顔を歪ませた

変わり果てた姿。

嘘だと言っほしい。

だけど、確認せずには居られなかった。

私は、朱利に問いかける

「朱利…アレはもしかして魁？」

お願い、嘘だと言って。

私の願いも虚しく、朱利は悲しそうに私を見つめ

「紛れも無く我が主君。

最強にして最悪、殺戮に身を投じた三大悪妖怪の一人であり、妖怪の頂点に君臨された大天狗殿です」

目の前が真っ暗になった気がした

真っ先に私が姿を求めた彼。

まさか、あんな恐ろしく、

自分を顧みずに腕を振り上げている獣のような生き物が

魁だなんて…。

いつも私に対して優しくて、

度が越えるほど過保護で、

まるで御伽話から出て来たような

紳士的な振る舞いをしてきた魁。

とても、目前に居る黒い翼を広げ、

血みどろに成りながらも血走った目で

剣と鋭い爪を振り上げているのが

アノ魁？

狂気に染まった世界。

魁であろう、その大天狗の顔を見れば

確かにそこには魁の面影はあったけれど、

琥珀色こはくの瞳は、紅色に染まり、

顔には見た事の無い歪んだ笑みが浮かんでいた。

まるで悦楽に浸っているかのように。

ああ、これが本来の【怪異】の姿なんだ。

頂点に君臨すべく、魁が重ねた罪。

血を手染める事を、

生き物を殺める事を厭わないと

私に公言した魁。

その意味がやっと分かった気がした。

だけど、朱利は今、

魁は今の姿を嫌っていたと言っていた。

これが異常事態だということは、

朱利の動揺が物語っている。

そして、何より私に響いて来る
悲痛な叫び。

悲しいと、助けて欲しいと泣き叫ぶ声。
その声は、

魁から発せられている気がした。

「朱利：魁は、何であんな姿に？
私が気を失っている間に何が起こったの？」

「俺が、知るわけ無いじゃないか。
さっきまで死にかけていたんだっ。
だけど分かる事は一つあるよ…」

「何っ、教えて!？」

悔しそうに顔を歪めている朱利の
着物の襟を掴み問い詰める。
酷い傷を負っている朱利に対して
そんな行動を取ってしまうほど私は、
相当焦っていた。

朱利は、私に視点を合わせ、
戸惑いながら：

しかし、落ち着いた声色で私に言った。

「このまま主君が理性を失った状態で妖気を暴走させた状態でいたら

勿論、この地域周辺は

多大な被害を受ける。

…それだけじゃない。

あのまま妖気をダダ漏れ状態にしてしまったら主君の妖気が尽きてしまう。

ましてや相手は、神の使いと言われる八咫鳥。

たとえ領域が見方をしているとはいえ、相性的には主君の方が不利。

妖気の消費は、きっと激しいと思う…」

「だから何？」

そうすると、何が起こるの？

地域一帯が地獄絵図になるとか？」

「その可能性も否定できないけれど…それだけじゃない」

瞳を揺らして、言うか言うまいか迷っている様子の朱利。ギュッと拳を握りしめる。

鋭い爪が肌に食い込むのも気にせず…。

「っ、何してるのっ!？」
ただでさえ酷い怪我なのに…自分を傷つけるなんて馬鹿じゃない!？」

「俺の怪我なんて大した事じゃないっ!!」
そんな事は、今は問題じゃないんだっ」

【そんな事】？

死にかけていたというのに…。
こんなにも酷い怪我を負っているのに？
彼にはいつものような明るさも余裕も微塵も無い。
いつもの笑顔は、何処にも無い。
揺れた瞳に映っているのは、

【恐怖】？

確かに、魁は今恐ろしい姿をしている。
だが、百年も共に過ごしてきたという朱利ならばきつと見慣れている筈だ。

そんな彼が何故ここまで恐怖し、自分の体調をも凌駕する彼が言う

【問題】とは

一体何なのだろう？

「朱利：落ち着いて。」

私に言えないような事なの？

でも、言ってくれないと

：：朱利の不安は拭えない思うよ？」

目を見開く朱利。

そして、泣きそうな笑顔でかすれた声で言う。

「やっと：：魁様が菜春さんを選んだ理由、分かった気がするよ：：」

と、朱利は、初めて【魁】と自分の主の名を呼んだ。

そして、意を決したように、私に彼の不安である【問題】を打ち明けた。

「菜春さん、俺達が昔妖気に関して言ってた事覚えてますか？」

「妖気と器がどうのこうのって奴：：？」

それが魁に何か関連しているの？」

「関係大有り。」

菜春さん、俺達【怪異】にとって妖気は、人間にとって【血】と同じ。

生命力の源と言ってもいい。

それがダダ漏れ状態…これがどういう意味分かる？」

「…まさか」

「そのまさかだよ」

朱利は、大きく息を吸って

私の頭に過ぎった最悪の答えを口にした。

「このままだと、魁様は遅かれ早かれ死ぬ」

【死ぬ】？

アノ魁が？

何があっても動じなくて、

怪異の頂点に君臨していた魁が？

「じょう、だんでしょ？」

「こんな時に冗談言える奴が居たら会ってみたいよ。自分の上司が死ぬなんて、誰が本人を目の前にして言えると思う？ましてや、菜春さんの前で」

ああ、本当なのだ。

これは、現実なのだ。

重く圧し掛かる空気は、【妖気】。

それも殆ど魁が出しているモノなのだろう。

たとえば、頂点に君臨していたとはいえ、燃料は無限にあるわけじゃない。

使い続けてしまえば、いずれ尽きてしまう。

たとえば、その量が膨大だとしても、

この勢いでは底を尽きるのは早いと、

朱利は言いたいのだと思う。

どうしたらいいの？

私は、一体何がしたいの？

自分に問いかける。

私は魁をどう思っている？

魁は、私の【僕】だと言った。

そして、私に毎日のように愛を囁いた。

依存とも呼べるその異常な執着。
それが無くなったらいつものような
平凡な日々が待っているのでは？

だったら彼が居なくなった方がいいじゃないか。

でも、その一方でもう一人の自分が反論する。
馬鹿な事を言うなど。

魁は、何度も私を助けてくれた。

私にこれでもないという程尽くしてくれた。

私の事だけを考え、私を中心に行動する。

そんな彼を見殺しにするの？

6歳の私が交わした魁との契約。

私を生かす代わりに、私が彼の傍に居るという契約。
死ぬまでずっと一緒に居ると。

それは下手をすれば…

プロポーズじゃないか。

だけど、あくまでも主従関係。

私の方が立場的には上。
つまり私が死ぬまで仕えろと言う事。
だけど、魁の行動を振り返ってみる限りは、
私には結婚する相手どころか、
恋する相手すら選べないと思う。

相手が魁に殺される。

今の私には自由が無い。
それは魁という存在が居るから。
だったら、魁は消えた方がいい。
ましてや【三大悪妖怪】と呼ばれる程
罪を重ねて来たというのなら、
ここで息絶えても文句は言えないじゃない。

だけど、もう一方の私が言う。
馬鹿な事を言っているんじゃないと。
魁が居なかったら10年前、私は死んでいた。
たとえ興味本位で魁が私を生かしたのだとしても、
彼が救ってくれた事には変わりはない。
ましてや、今魁は私に尽くしてくれている身。
自分が持っている全ての財産を捨ててまで、
私の元に来てくれた。

そんな彼を見殺しにするの？

私にとって【魁】という存在は何？

下僕という名の召使い？

私に無駄に執着する厄介者？

紳士的で綺麗で、非の打ちどころの無い人？

私を愛していると、愛を注いでくれる人？

違う。

どれも何かしつくりと来ない。

私は、魁の主人だ。

それは、契約上の事。

だけど、私自身は一体、魁をどう捕えているの？

魁が居ない日常。

それは一体どんなものだった？

毎日同じ事の繰り返し。

過保護な両親に鳥かごに閉じ込められて、心配されて
上っ面だけ同級生と仲良くして、

話を合わせて談笑して、
それで学校で勉強して、
誰もいない家に一人で帰る。

誰も居ない寂しい家に。

なんて色あせた平凡な日常。
魁が来てからは、毎日がお祭り騒ぎで、
朱利と魁と一緒に帰って、

「ただいまと」言えば、隣に居る魁と朱利が
「おかえりなさい」と私の言葉に返してくれる。

暖かい毎日。

大変で、迷惑でしょうがないと思ってた。
だけど、それ以上に私は、楽しかった。
そう、私は魁が居たから

虚無の日常から脱する事が出来たんだ。

契約？主従関係？
そんなの関係無い。

私には、僕が必要なわけでもない。
ましてや【怪異】という存在が欲しいわけでも無い。
【三大悪妖怪】から何だっていうの？

確かに過去に犯した過ちは、
拭い去れないかもしれない。
消えた命は戻ってこないし、
過去の出来事は、修復出来ない。
それは仕方がない事。
だから、

【これからどうするか】を考えなくちゃいけないんだ。

私には、魁が必要。
死ぬなんて事、私が絶対にさせないし、
契約を破るなんて絶対に許さない。
死ぬまで私の傍に居るんでしょう？
私を愛しているんでしょう？
私の心を奪って見せるって言う約束はどうしたのよ。

破るなんて、私は絶対に許さない。

ゆっくりと立ちあがると、
腕に付いている血が滴り落ちた。
何故かこの血は朱利のモノじゃないと分かった。
これは魁の血なのだと、本能が告げた。
ついに私は人間じゃなく吸血鬼にでもなったか
と少し苦笑した。

悲しいと泣き叫ぶ貴方。
孤独を恐れる私の僕。
笑みを浮かべていながらも、
零れる涙は隠せない。

止められるのはきっと世界で私だけ。
私を愛しているという【怪異】。
種族の違いだけでも禁忌を犯しているのに、
それでも、愛する事を辞めない貴方。

こんな状況にならないと
気付かない私も馬鹿だけど、
約束を忘れて暴れまわる魁も相当馬鹿だよ。
後でこっそり説教して、理由を聞いた後
貴方に言ってあげようか。

悲嘆に暮れている貴方に
救いの手を差し伸べよう。

ははは、度胸付いたな私。

さあて、止めに入って見せますか？

剣と剣が交わる激戦地帯の境界線から
一歩前へと踏み出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9169o/>

怪異と私の恋物語

2011年6月6日20時20分発行